



教会学校教案誌

2005.4.5.6月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.17

2005年4～6月カリキュラム (第17号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月3日 進級式	神の民の祈りの家	問34	ウ告白25章
		マタイ18:18-20	マタイ18:20
信仰の歩みは神の民と共なる歩み。信仰の友が与えられていることを喜ぼう			
10日	キリストの体なる教会	問34	ウ告白25章
		エフェソ2:14-22	エフェソ1:23
キリストに結ばれて互いを受け入れ、感謝のうちに共に生きよう			
17日	再臨の約束	問35	ウ小28、ウ大56、ハイテ52
		使徒言行録1:6-11	使徒言行録1:11b
天に昇られた主イエスは再び来てくださる。その約束の希望に生きることに			
24日	再臨に備える	問35	ウ小36、ウ大79-83、ハイテ52
		マタイ25:1-13	マタイ25:13
再臨を喜んで待ち望み、地上の生を大切に生きることにも励もう			
5月1日	死のときの祝福	問36	ウ小37、ウ大85、86、ハイテ42
		ルカ23:39-43	ルカ23:43
主イエスに結ばれて死ぬことの幸いを知り、死の恐れを克服することへ			
8日 母の日	復活のときの祝福	問36	ウ小38、1、ウ大87、88、90、1
		ヨハネ3:1-3	ヨハネ3:2
主イエスと完全に一つとされ、御子に似た者とされる幸いを知ろう			
15日 聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—	—
		エゼキエル37:1-14	使徒言行録2:4
神の霊が人を生かし、神の民を生み出す。神の霊に生きる教会として歩もう			
22日	感謝—神の求め	問37	ウ大97、ハイテ2、86、90
		ルカ17:11-19	ルカ17:19
律法主義的な生活ではなく、福音的な感謝の生活を生きよう			
29日	感謝としての服従	問38	ウ小2、39、ウ大91、97、ハイテ91
		ヨハネ21:15-19	ヨハネ21:19
主イエスへの感謝と献身に生きること、喜びに生きる道があることを知ろう			
6月5日	十戒—感謝の道標	問39	ウ小40、41、ウ大93-98、ハイテ92
		申命記6:16-25	詩編103:2
十戒は神から神の民への愛の贈り物、愛の言葉。神の愛にこたえて生きよう			
12日 花の日	神と人への愛	問40	ウ小42、ウ大98、ハイテ93
		マルコ12:28-34	レビ19:18b
神の愛の言語化が十戒。神と人への愛に生きることへの招きにこたえよう			
19日 父の日	贖いのみわざ—過越	問41、42	ウ小43、44、ウ大101
		出エジプト12:21-27	出エジプト12:9
十戒の根拠である神の御業—過ぎ越し—を思い起こそう			
26日	過越の成就—キリスト	問41、42	ウ小96、ウ大168、ハイテ75-78
		ヘブライ9:11-14	ヨハネ3:16
贖いの御業を成就してくださった神の小羊キリストをたたえよう			

も く じ

2005年4・5・6月カリキュラム

まえがき	相馬伸郎	4
巻頭説教「本当の権威者」	岩崎 謙	5
日曜学校・教会学校訪問		
那加教会教会学校の紹介		7
本誌の基本方針		11
連載「日曜学校教師会のために」	相馬伸郎	14
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例		23
4月3日		24
4月10日		32
4月17日		40
4月24日		48
5月1日		56
5月8日		64
5月15日		72
5月22日		79
5月29日		87
6月5日		95
6月12日		103
6月19日		111
6月26日		119
幼稚科工作（予備）		127
成人科 日本教会史（第1～3課）	木下裕也	128
2005年7・8・9月カリキュラム		131
2005年度 年間カリキュラム		132
自由献金のお願い		134
あとがき・編集後記		135

まえがき

相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)

「教会学校教案誌の出版のための自由献金を捧げたいのですが……。出版を楽しみにしています。がんばって下さい。」「……。既に4年前から出版されているのですが……。」「……。」

これは、先日の編集会議の席上、ある教師から聞いた電話のやりとりのワンシーンです。

日本キリスト改革派教会は、大きな教会でしょうか。決して大きいとは言えないと思います。しかしながら、情報が大会的に行き渡ることにおいて、なおいささか検討の余地があることを示す事例をみる思いが致しました。

最大の原因は、私どもの「宣伝べた」にあるのだと思います。私どもの責任です。もっともっと、大声をあげて、「献金して下さい！ 購読して下さい！」とあらゆる機会を利用し、メディアを用いて、宣伝すべきなのかもしれません。

「宣伝べた」は「伝道べた」に通じるかもしれませんが。せっかく「改革派信仰」というすばらしい伝統を継承しているのですから、もっともっと地域の人々に、「わたしたち（の教会）を見よ！」と宣伝すべきではないでしょうか。ちなみに、わたしは、他教会の牧師には日本キリスト改革派教会を「宣伝」することをその使命と感じています。

何よりも問われるのは、この「宣伝べた」が、「日曜学校の伝道熱心の減退」に通じるのであれば、それは、由々しきことです。

たしかに弊誌は、既に大会的な執筆陣を与えられ、購読教会もすべての中会に行き渡っております。中部中会では、三分の二以上の教会伝道所は、定期購読だけではなく、採用して、日曜学校に励んでおられます。さらに、他教派の

牧師、教会の方で定期購読しておられる例もあります。しかし、日本の教会、のみならず私どもの教会にも、子どもたちのにぎやかな声が変われ、回復の兆しをなお見ることがないのです。統計的現実には惨憺たるものがあります。つまり、日本の国、日本キリスト改革派教会の将来が危機に瀕しているということです。心は疼きます。

新しい年度が始まりました。他の誰彼に求めるのではなく、私どもから始めてまいりましょう。そのために、弊誌の宣伝のために、ご協力ください。その願いの心は、ただ購読教会・伝道所が増えるということだけを意味しているのではまったくありません。いずれにしろ、日本キリスト改革派教会の青少年への教育的伝道が、正しく、豊かに担われ、前進すれば良いのです。そして、日本に主の教会が力強く立つことです。そのためなら、どのような形、方法であってもかまいません。

小さな教会でもあります。しかし、その小ささを逆に生かすこともできるのではないのでしょうか。力を結集しましょう。

終わりに、大胆にお願い申し上げます。編集部の方のためにお願いします。皆様のお手元に届けるために、どれだけの犠牲的奉仕をささげて励んでいることでしょうか……。皆様の先頭に立って、伝道に勤しむ牧師たちのためにも祈り続けてください。

あなたと、御教会のお働きの上に聖霊の豊かな祝福を祈りつつ。

Soli Deo Gloria!

「本当の権威者」

—マタイによる福音書21章23～27節による説教—

岩崎 謙 (神港教会牧師)

彼らは論じ合った。『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。『人からのものだ』と言えば、群衆が怖い。皆がヨハネを預言者と思っているから。」そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

(マタイによる福音書21章25～27節)

今日の聖書箇所には、権威という言葉が繰り返し登場します。本当の権威者とは誰なのかが、今日の主題です。父親や教師の権威がなくなったとよく言われますが、権威に対する感覚が鈍くなるとすれば、これは教会にとって死活問題です。なぜならば、御言葉の権威を敬うところのみ、教会は立ちうるからです。

イエス様は、エルサレム入場において、ダビデの子にホサナというメシアの称号を受けられました。エルサレムに入るとすぐ宮清めをされ、暴力的ともいえる仕方、神殿から商人を追い出しました。イエス様は、次の日にまた神殿においてになり、神殿で教えておられます。

そこに、祭司長と民の長老達が登場します。そして、イエス様に二つの質問をしました。一つは、「何の権威でそのことをしているのか」です。律法学者なのか、預言者なのか、祭司なのか、どのような肩書きで、宮清めをしたり、民衆に教えたりしているのかが問われています。二つ目は、「誰からの権威でしているのか」です。エルサレム神殿における権威者である祭司長や民の長老たちが、イエス様に権威を授けた訳ではありません。祭司長たちからすれば、彼らの承認を受けずに勝手に振る舞うイエス様が邪魔でしようがなかったのです。本来なら、彼らは、権威の所在を問うこともなく、力づくで

イエス様の活動を止めさせることを望んでいました。ところが、民衆が、イエス様の癒やしの奇跡に驚き、イエス様のお話に熱心に耳を傾けています。民衆からすれば、イエス様はその実力において十二分に権威者です。祭司長たちの苛立ちは、彼らの承認を受けていないイエス様が、民衆により彼ら以上の権威を授けられていることにありました。

イエス様は、祭司長や長老の問いに答えるまえに、逆に彼らに質問しました。祭司長や長老がイエス様の質問に答えることができた場合にのみ、イエス様も彼らの質問に答えようと語られました。イエス様の質問は、バプテスマのヨハネの権威は、「天からか、人からか」という問いです。「天からの権威」とは、神様から与えられた権威という意味です。「人からの権威」とは、自分で努力して、人から獲得する権威です。

バプテスマのヨハネは、祭司長や町の長老たちによって権威を与えられて活動していたわけではありません。もし、バプテスマのヨハネの権威を認めるとすれば、祭司長や長老によって与えられたのではない権威が、当時の社会においても機能していることを認めることとなります。またさらに、そのヨハネは、自分の後から来る救い主に対して、わたしは靴の紐をとく値打ちもないと、イエス様の権威を認めていまし

た。バプテスマのヨハネの權威を受け入れるなら、そのバプテスマのヨハネが認めていたイエス様の權威をも受け入れることになります。

彼らは、イエス様からの問いかけを受けて、慎重に答え方を検討しています。一方で、天からの權威といえば、イエス様から必ず、「何故、天からの權威を受けたヨハネに従わないのか」と詰問され、イエス様の權威をも「天から」と答えることになります。他方で、「人から」と答えるならば、ヨハネのことを人々が天からの預言者と認めていますので、彼らは民衆から非難を浴びることになります。ですから、彼らは「分からない」と答えました。彼らが真剣に考えたのは、權威の問題ではなく、自分にとっての損得勘定です。天からと答えるのと、人からと答えるのと、どちらが彼らにとって都合が良いかを考え、どう答えても自分たちに不利になると判断し、何も答えない結論に達しました。それが、彼らの「分からない」です。

權威とは、權威があることを認め、かつそれに服従する意志がある場合にのみ、意味を持ちます。天からの權威とは、自分にとって不利になっても認めざるを得ない權威です。本当に權威あるお方であれば、受け入れるしかなく、權威のないお方であれば、受け入れる必要はありません。イエス様を權威あるお方と見なすのか、權威のないお方と見なすのかを、一人一人がイエス様の前で決断しなければなりません。

イエス様は彼らに対して、私もまた答えないと語られました。彼らが天からの權威に従おうとしていないからです。イエス様は、バプテスマのヨハネと同じ性質の、人の手によるのではない權威を持っておられます。しかし、イエス様が「天からのメシアの權威である」とお答えになっても、祭司長達はイエス様の權威を受け入れることはありません。ですから、イエス様も答えることを差し控えられます。

そして、福音書は、この世の權威者である祭司長や民の長老が、天からの權威者であるイエ

ス様を殺すという構図を明確に描き出します。偽りの權威者が、自分の權威を守るために、イエス様を殺すのです。天からの權威が確立されるとそれに服従せねばなりません。そのことを嫌う者たちは、イエス様を殺し続けるのです。自らの偽りの權威を振りかざして、本当の權威者を殺すのです。

しかし、否定することができない權威が、本当の天からの權威です。權威を巡る問いは十字架後の復活の出来事と結びつきます。マタイによる福音書の末尾は、「わたしは天と地の一切の權能を授かっている」という復活のイエス様の御言葉で締め括られています。この權能とは、權威と同じ言葉です。イエス様の權威とは、人々のために十字架で死に、神により復活させられ、天からの權威であることを証明された權威です。ローマ書の言葉によれば、「死者の中からの復活によって神の子と定められた」權威です。自分の權威を守ろうとする者たちによって一度は殺されるのですが、そのことによって罪人の罪の贖いを成し遂げて、父なる神様によって復活という仕方で高く引き上げられる權威です。イエス様の權威が天からのものであることを指し示す究極的な印は、復活の出来事です。

今日の社会においては、「日の丸」、「君が代」等の上からの締め付けが驚くほど厳しくなっています。「天からの權威」を知る感覚が麻痺した社会においては、人の權威が最高の權威にまで上り詰めます。このような社会であるからこそ、十字架において人に仕え、復活において高められたイエス様の權威を、教会学校で子供達に教えましょう。その際の教え方は、言葉によるだけではありません。教師が偽りの權威を振りかざすことなく、本当の權威者にひれ伏すなかで、子供達は天からの權威を学ぶことができます。イエス様の權威は、イエス様を礼拝することを通して、学ばれます。人間に過ぎない者が權威主義的に振る舞うことを決して許さない場所が、イエス・キリストの教会なのです。

那加教会教会学校の紹介

那加教会教会学校教師会

私たちの那加教会は中部中会に所属する岐阜県各務原（かかみがはら）市にある教会です。

岐阜県は日本のほぼ中央にあります。私たちの那加教会もこの「かかみがはら」市の中央にあるのです。「かかみがはら中央教会」と呼ぶたいくらいです。市庁舎、産業文化センター、消防署、地方都市には珍しい広大な敷地の中央公園、中央図書館へは歩いていずれも10分以内、これまた地方都市には場違いの観のする航空宇宙博物館には車で10分たらず、交通の便は私鉄駅には徒歩で2分、JR駅へは12～3分、車なら高速ICからこれまた12～3分と抜群の良さなのです。

このようなすばらしい場所を得たのが50年前、当時市内にあった米軍基地の中の教会からの献金と米国内教会の献金で教会の土地建物が与えられたのです。もちろん50年前すでに今のような抜群の立地条件であったわけではありません。全能の神様が御手をのべてこのような場所にしてくださり、そして「ここでわたしの福音を宣べ伝えよ」とご命令になったと確信しています。この那加教会のCSのご紹介を4人の教師が分担して書きました。まずは創設から現在までのことから始めます。

1. これまでのあゆみ

那加教会のCSは、1955年、ちょうど50年前の9月25日に開校式が行われました。教会献堂式の行われた二週間後です。いかに当時の牧師先生や役員の方々がCSを重視しておられたかがわかります。校長は伊達量平那加教会初代牧師。教師は4名。マカルピン宣教師夫人がオルガン奏楽と教師の指導で助けて下さいました。

初年度は在籍生徒70名、クリスマスは86名も集まりました。伊達牧師は青年が受洗すると、すぐCS教師に任命しました。それが教会やCSに、また本人にとっても有益と考えておられました。

毎日曜日の朝集まる元気の良い子供達をこうした若い教師たちががっちり受け止め、伊達牧師の指導のもと教会学校を形作っていきました。イースター、花の日の病院・警察・消防署への訪問、ピクニック、夏期学校、クリスマスなどの外、CBCラジオのキリストへの時間に出演したこともありました。

当時は今と違って、契約の子供より信者以外の家庭からの子供が圧倒的に多数でした。ですから教理的には深くないのですが、こうした状況の下、伊達先生の教師指導は、「聖書を語りなさい」に徹しておられました。



1960年代の那加教会CS（最初の会堂の前で）

このような初期のCSから60年、70年台はそれぞれ8名、80年台は11名、90年台は2名の受洗者が生まれ幾人かの方々は現在中部中会の各教会で活躍しておられます。

昨年のある日曜日、当時の生徒が子供さんを

連れて CS に出席してくれたので教師一同びっくりと、大喜びでした。蒔かれた種は子供の心に残っていたのです。感謝です。

50、60年台は30～50名の出席数であった那加教会学校は75年を最後のピークとして下降線をたどり、80年後半には10名を割りました。そしてついに90年台に入るや5名を切りました。しかし CS のともしびを忍耐強くともし続けてまいりました那加教会学校に、教会の頭主イエスキリストはわたしたちをあわれんで下さって、90年台の最後の年99年に11名と急上昇に転じたのです。何という感謝でしょう。望みを失うことなく主の業を続けるものに、主のあわれみが必ず与えられることを覚えて心から感謝いたします。(K・K)

2. 那加教会教会学校の現在

①教勢

平均出席人数は約10名で、そのほとんどが契約の子です。契約の子以外では二人がほぼレギュラーに出席しています。毎週の出席生徒以外に数名の在校生徒がいます。教師は中根汎信牧師以下7名です。教師は教師暦30年以上のベテランから数年の若手までいます。教師のうちの三名は当教会の教会学校出身者です。また二名が他教会の教会学校出身者や教会学校教師経験者です。これが那加教会の経験と他教会の良いところの融合に役立っています。

②礼拝

毎週主日の9時25分から行っています。礼拝に先立って10分間の教師の祈祷会が持たれています。祈祷会では当日の礼拝司会者が聖書朗読と祈祷を行います。

礼拝のメッセージは教師と長老一名が交代で行っています。テキストは2004年の4月から中部中会教育委員会発行の『教会学校教案誌』を使用し始めましたが、それ以前は CS 成長センター発行の『成長』を使用していました。メッ

セージは話す教師によって個性がでます。教案誌に忠実に話す人、紙芝居や歌を織り交ぜたりする人、それぞれの仕方で語っています。

賛美歌はこどもさんびかやリビングブレイズを歌っています。リビングブレイズには振りがついており、CS キャンプなどでは皆で踊ったりすることもあり、子供達に好評です。

③分級

礼拝終了後、幼稚科、小学科下級、小学科上級の3クラスに分かれて分級を行います。

分級ではそれぞれの教師が工夫して、メッセージの内容の学びを深めたり、楽しいゲームをしたりしています。

④教師会

第二聖日の午後に定例教師会を開いています。教師会は隔月毎に、事務打ち合わせと勉強会を交互に行っています。

事務打ち合わせでは、司会、メッセージの担当者、行事計画、教会学校の現状について話し合われます。

勉強会においてはテキストを基に、教師として必要な心構えや、方法について学んでいます。

⑤映画会

二ヶ月に一回、土曜日の午後に映画会を行っています。映画会の前に小学校の前でチラシ配りを行います。チラシの効果は絶大で毎回多くの子供達が集まります。上映するのは聖書関係のアニメを一本と劇場公開されたアニメ一本です。映画の後にはゲームをしたり、おやつを食べたりして楽しく過ごします。映画会に来た子供達のうち、継続して教会学校に出席している生徒が一名いますが、大半は特別行事だけの出席に終わっているのが課題です。

⑥誕生日のお祝い

大人の礼拝が終了した後、誕生月の子供のお

祝いをします。牧師からの紹介、聖書朗読、賛美、会員の祈りをし、教会全体で子供の誕生日を祝福します。

⑦夏期キャンプ

夏休みの間に一泊の夏期キャンプを行います。最近根尾クリスチャン山荘を使用しています。聖書の学び、キャンプファイヤー、バーベキュー、川遊びや自然探索、藍染めなどを通して、自然の中で働かされている神様の大きな御力を学び、交流を深める機会となっています。

⑧クリスマス会

12月23日の祝日の午後に教会学校のクリスマス会を行いました。今回は小学科の生徒達が自主性を持ってクリスマス会を行うことを目標にしました。出し物を何にするか生徒自身で考えて準備しました。小学科上級はイエス様のご降誕の人形劇、小学科下級は手品と聖書クイズを、幼稚科はお遊戯をしました。それぞれのクラスがすばらしい発表をすることができました。また新しい試みとして全員でアイロンビーズの工作をしました。これは中会信徒研修会のときにやって楽しかったからです。しかし、クリスマス会に予想以上の子供が集まったため、材料が足りなくなり急いで近くのおもちや屋に走ったり、アイロンを増やしたりと目が回るほどの大忙しでした。おやつを食べたり、プレゼントをもらったりして楽しくクリスマスをお祝いしました。(Yo・S)

3. 那加教会の将来について

現在の那加教会の教会学校の礼拝出席は、改革派教会の平均をわずかですが上回っています。しかし、このことに安心してはいけません。この先、何人の子供が10年後青年会に残り、20年後教会の中心になり働いているであろうか。それは、一握りであるおそれもあります。

四月から、一人男の子が中学生になり、それ以降は中学生、高校生が増えていくので、その子達にきちんとした信仰教育をしていかなければなりません。世の中に迎合しない、主を畏れ主により頼み「世の光」「地の塩」となる真のキリスト者を育て上げていかなければならないと思います。

そのためにはやはり、幼稚科の頃から主を畏れるきちんとした礼拝態度を教えていかなければと思います。礼拝の中心は常に、主なる神様であり、いつも私たちの礼拝態度を見ていらっしゃることを、小さな子でも未信者の家庭の子でも、同じように教えていくべきだと思います。そして、もう一つの大きな課題は、教師がなかなか増えていかないことです。若い青年もぜひ教師になってほしいですし、子供の親も教師に加わり、自分たちの子供の霊的成長のために皆で一丸となって良き教会学校を作っていきたいと思っています。(Ya・S)

4. 中部中会への要望

中部中会への教会学校教師としての願いは、今それぞれの教会学校の子供達が少なくなり、特に中学高校生が激減している現状を本当に心痛む思いです。私達はこの事を覚え、真剣に祈って取り組んでいかなければいけないと思います。このような中で、中会の教育委員会で『教会学校教案誌』が発行されるようになり、中会としてCSの為に力を入れて下さり本当に感謝しています。

子供達を個々の教会だけではなく、更に中会全体で考えていく必要があると思います。

まずは、夏のキャンプや子供の為の集会などの色々な企画を中会のCS教師達が協力して中会単位で開いてほしいと思います。このことによって子供達がまわりに多くの信仰の友達がいるということを知り、友達関係を深めて、共に霊的に成長し信仰告白をして欲しいと思います。

次に、教師の学びと成長のために、中会として定期的に（月に一回でも二回でも）CS 教師のための学びの講座を開いてほしいと思います。学びを深め、教師が自分でお話しを作って力強く話せるようになることが大切だと思います。

先ずは二つのことですが、実現までには時間がかかるかと思いますが、これからの子供達の信仰が確立し CS のあゆみが充実していく為に、検討して下さいますようよろしくお願いします。

(H・A)



2002年の那加教会 CS
(根尾クリスチャン山荘での夏季学校)

本誌の基本方針

～教会（日曜）学校像について～

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、子どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものをやったかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

——日曜学校の目標——

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに共同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（共同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでし

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会

——分級の目標——

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずで

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

—教師会と教師—

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているのです。そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子もたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているのでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもこそははっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria（ただ神の栄光の為に！）

連載「日曜学校教師会のために」

第一回 教師（会）の務め

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

これから一年にわたって、「日曜学校教師会のために」と題して連載を開始いたします。拙稿ですが、皆様の教師会のなかで、読み合わせていただけることを願って、毎月、3ページにまとめて記してまいります。今号は、全体のオリエンテーションを企図しました。

次号からは、「④日曜学校の歴史と日曜学校像

⑤子ども礼拝式の捧げ方 ⑥礼拝と説教 ⑦説教作成 ⑧牧会する場としての分級 ⑨子どもの発達に即した分級 ⑩教師会運営 ⑪行事

⑫伝道する日曜学校」などを考えております。ただし、まったくの予定です。執筆のためにお祈りご批判、ご教示とを心からお願い申し上げます。

さて、3月の教師会では、新しい年度で始まる日曜学校の編成もほぼ整いつつあり、分級の担当者もほとんど決まっておられるのではないのでしょうか。

既に数十年と日曜学校教師を継続しておられる兄弟姉妹方もおられるかと思えます。心の底から感謝申し上げます。そのような奉仕者が教会に起こされ、与えられているからこそ、あなたの教会の日曜学校の営みが支えられていることを思います。教師としての神の召しにお応えくださった皆様に心から感謝を申し上げ、敬意を表します。どうぞ、今年度も、心新たに、望みをもって、志を高くして、日曜学校伝道、契約の子教育のために共に励んでまいりましょう。

しかしその一方で、今年初めて教師としてあるいは、補助教師として御奉仕くださる兄弟姉妹もおられることを信じます。牧師に頼まれ、

あるいは、日曜学校校長に乞われて、しぶしぶ（?）、とりあえず（?）、3月からの教師会に出席されている方ももしかしたらおられるかもしれません。

また一方で、教師や補助教師になることをなお躊躇しておられる方、あるいは、今年度で奉仕を辞められ、休まれる方もおられるかもしれませんが、既に、遅すぎるのかもしれませんが、しかしどうしても、なお訴え、呼びかけたいことがあります。

「どうぞ、この尊い日曜学校の奉仕に加わって下さい！ 担い続けて下さい！」

最初から横道にそれますが、弊誌『教会学校教案誌』は、2001年の創刊以来、今号で第17号となりました。既に、第5年目を迎えております。これは、当事者にとりまして、恩寵の奇跡以外のなにものでもない、編集部と同労の教師たち、また戦友である執筆者の教師、兄弟姉妹たち、何よりも読者の皆様方に心から感謝を致しております。創刊号より、中部中会の決議に基づき、中部中会教育委員会の名によって発行しました。しかし、その成り立ちが、有志によって担われるという、日本キリスト改革派教会には、あまり馴染みがない仕方でしたから、そのスタートは実に厳しいものでありました。言わば、嵐の船出となったのでした。ところが、今では、中部中会はもとより、広く大会的に採用されていますし、何よりも執筆陣は、既に大会的な陣容でそうそうたる方々が加わって下さいます。思えば、創刊より第8号までは、当時の編集部員が聖書・カテキズム研究、説教展開例をほとんど一人で執筆し、分級展開例は、

中部中会の日曜学校教師（会）によって、それこそ、ぎりぎりの奉仕の状況のなかで担ってまいりましただけに夢のようです。今や、短いと言えども、既に一つの歴史を刻んでおります。

さてここで改めて記したいことがあります。何故、弊誌発行を志し、立ち上がったのかという原点についてです。私どもは、日本キリスト改革派教会の教会学校教案誌がどうしても必要であると考えました。そして、それは、この切なる祈りに基づくものです。

第一に、なんとかして、「子どもたちをわたしのところに来させなさい」（マルコによる福音書第10章14節）という主イエスの命令に生きたいという祈りです。日本の子どもたち、地域の子どもたちを日曜学校（主イエスの臨在したもう教会）に招き入れたい、主イエス・キリストと出会ってほしいという祈りです。（創刊号所収巻頭説教参照）。

残念ながら、日本キリスト改革派教会もその例外ではなく、日本の教会の日曜学校は、既に10年以上の長きにわたって、地域の子どもたちが減少し続けている現実があります。ほとんど、地域の子がいなくなっている日曜学校も今や例外ではありません。つまり、今日、子どもたちに、福音の真理、神の言葉が届いていないのです。主イエスの説教を思い起こさざるを得ません。

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい』（マタイによる福音書第9章35節～38節）。

飼う者のいない羊たちの状況とは、まさに現代の地域の子どもたちのなかにこそ見えている

状況ではないでしょうか。弱り果てて倒れているのです。どうぞ、「わたしにはできない……。わたしには賜物がない、資格がない……。」と言う前に、まず教会の現実を見て下さい。教える子どもたちがいないという現実です。あなたが、立ち上がって下さらなければ、教会の外にいる大勢の子らを迎え入れることができないままになるのです。あるいは、子どもたちは多く与えられていながら、教師が足りないばかりに、丁寧に分級で子どもたちの状況を見てあげ、お祈りしてあげ、御言葉によって励まし導いてあげられないまま、魂が養われないままの子がいませんか。

昨年、私どもの日曜学校に来るようになった一人の女の子は、離婚によってお母さんと弟と三人で暮らすようになりました。日曜学校に通う友達に誘われて、また分級の先生の熱心な励ましによって、休まずに来るようになりました。毎年恒例の、降誕祭前の「十回プレゼント」、これは、三ヶ月間の中で10回通えた子らには、新約聖書をプレゼントするというものですが、彼女は、昨年末、ついに自分の新約聖書を手に、日曜学校に通えるようになったのです。「毎日、読んでいるの」と担任の先生に報告してくれました。私どもの周りに、このような子どもたちは、例外ではないと思います。何も離婚した家庭の子らの問題だけではありません。すべての子どもたちは、主イエス・キリストの慰めと御言葉の励ましが必要です。どうぞ、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ書第6章8節）と「一緒に！」祈りましょう。共に、この尊い主イエスからの召しを受け入れましょう。

発行の祈りの第二はこれです。教会に与えられた契約の子たちに、改革派信仰を喜んで継承してほしい。次代を担う教会人として、主とその教会に大きく用いられる奉仕者として育てたい。「キリスト教有神的世界観」に基づい

て、積極的に、主の証人として社会のなかで活躍してもらいたい、というものです。

昨年連載しましたが、中部中会の教会学校教師研修会の講師として御奉仕くださいました加藤常昭先生が、集会のなかで、このような祈りを捧げられました。「あなたに召され、あなたに違わされて、子どもたちの全存在を清め、洗い、あなたにお捧げするための務めに生きている者たち」（弊誌第14号、25ページ）。旧約聖書によれば、神への献げ物とは、そのもっとも良きものであることは常識とされていました。子どもを神に献げるとは、子どもを神の栄光のために用いられるようにということです。そしてそのためには、献げる者たちが教育することが必ず求められるのです。契約の祝福を受け継ぐには、御言葉を受け渡す以外にあり得ません。そこに、日曜学校教師の務めがあるのです。

私自身の言葉で申しますと、日曜学校教師（会）の務めとは、①聖餐桌に「招く」準備教育（契約の子には信仰告白準備教育となり、地域の子らには、伝道として展開されます）。②聖餐桌に「仕える」訓練教育（共に礼拝を捧げ、分級その他において、教理をその全存在をもって教えることによって担われます）。この二つに収斂されるかと思えます。

しかし、そこで、それでは狭すぎるとの批判が出るかもしれません。もちろん、聖餐共同体である教会形成だけを視野に入れているわけではありません。

創立宣言の第一の主張である、「有神的世界観・人生観」の下、「より良き日本の建設」を担う人材、社会の「木鐸」たるキリストの証人を生み出すことをも教師の務めと考えます。しかし、そのためにこそ求められているのは、主イエス・キリストを紹介し、主との交わりに生き

る喜びにあずからせることです。つまり主張の第二点であります、キリストの主権に服する教会を日本において確立することです。創立宣言の第一の主張と第二の主張の実現に奉仕することが、日曜学校教師（会）の務めに他なりません。

そして、これを、一人の教師で担うのではなく、教師会として「共に」担うのです。新年度の今号にもあらためて記載させていただきました「本誌の基本方針」の、「5」の項にこのようにあります。「およそ教會的な奉仕のあり方とはいずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。」

つまり、子どもたちに教える内容（御言葉・教理）そのものが、教える私ども自身のあり方（務め、教会像・日曜学校像・ひいては教会教育の方法・理解……）など全てを規定するのです。何よりも、造り上げてくださるのです。私どもの目標実現のためには、教師個人の成長に待つより、むしろ日曜学校教師会の成長と形成を求めるのです。ここに、日本キリスト改革派教会らしい日曜学校の営みと結実の姿があるのです。

もう一度、繰り返します。日曜学校の営みとは、どこまでも、共同で担うものです。最初から、「立派な」教師になる必要はありませんし、それは不可能です。教師会の仲間、同労者と共に歩むことです。この光榮ある、すばらしい奉仕の道を共に歩んでまいりましょう。

第二回 教師の資格

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

私どもの教会（名古屋岩の上传道所）は、今年はじめ、日曜学校校長の就任式と日曜学校教師の就任式および補助教師の指名を会員総会において挙行いたしました。私どもの教会は伝道所ですから、「教会」学校校長を就任させることはできませんから、式文を部分修正して、挙行いたしました。何よりも、日曜学校教師の務めに就いていただく兄弟姉妹の方々にも、開拓伝道第11周年目にして初めて、式文を作成し、誓約を求め、就任していただきました。（私ども日本キリスト改革派教会の式文には、日曜学校教師就任式はありません。この問題はここでは取り扱いません）。補助教師には、誓約を求めず、宣教教師の指名に応答していただく形で致しました。この式典を挙行した理由は、第一に、教会員全員で、日曜学校の働き、日曜学校教師会の働きを覚えるため。第二に、教師たちが、神からの召命を自ら問い、教会員の明白な支持による支えを受け、召命を支えていただくためです。（政治規準第18章「教会職制の原理」参照）。その為、就任式に先立つ一月以上前に全教会員に、就任式次第を配布いたしました。

日本キリスト改革派教会の会員にとって、教会（日曜）学校教師について考察する上で、何よりも先ず確認すべきは、教会規定第3部「礼拝指針」第四章、教会学校の項でありましょう。その第32条を、改めて読んでまいりましょう。

第32条（教会学校教師）

教会学校の目的実現は、教師の人格と資格に大いに依存する。教師は、信仰歴、動機、人格、才能、教育的理想、キリスト者品性の向上と授

業の熟練とへの熱心などにもとづいて、選任されなければならない。その働きのためには一定の訓練が要求され、またそれを受ける機会が備えられなければならない。教師はその召命を、神聖な、もっとも重要なものと確信して、毎週周到な準備をし、規律正しく勤め、学校の方針と他の教師たちとに誠実でなければならない。

ここには、今回の主題である、「日曜学校教師の資格」についても言及されています。皆さんは、日曜学校教師の選任においてその「人格」、「資格」が問われるとするこの規定に対して、どのように思われるでしょうか。おそらくほとんどの方は、首肯なさるのではないのでしょうか。ただし、この条件が、自分に当てはめられたときには、一体、何人の方が心に疼きを覚えないでいられるでしょうか……。ここにはそれほど、高い理想と目標が記されていると思います。

「信仰歴、動機、人格、才能、教育的理想、キリスト者品性の向上と授業の熟練とへの熱心」。挙げられているのは、いずれも、日曜学校教師の働きを正しく担うために必要な、言わば急所が記されているのです。しかし、正直に申しまして、そのすべてを満たしている教師は、おそらくそう多くはないのではないのでしょうか。そうであれば、多くの方が辞められたり、休まれたりするようになって良いのでしょうか。前回記した通り、一人でも多くの教師、また日曜学校を支援してくださる教師のピンチヒッター、会計、送迎、奏楽、ゲーム（遊び）担当……。つまり教師補助者は何人でも欲しいのです。主イエスと主イエスが愛しておられる子どもたちの前に、あれこれ弁解せずに、奉仕していただ

きたい、これが、牧師や教会学校校長の心からの願いであると思います。ただしそこでなお、「資格」、「条件」についてきちんと、正面から考える必要もあるのです。

これは、一部思い切って記しますが、教師は、いわゆる教育の専門家である必要は「まったく」ありません。基本的な条件としては、現住陪餐会員であって、子どもたちに主イエス・キリストを紹介し、福音へと導きたいと言う、その志があれば誰でもなれます。いや、なっていたきたいのです。

礼拝指針は、「信仰歴」を最初にあげていますが、私の例で申しますと、降誕祭に洗礼を受けたその翌年の4月、大学2年生から既に中学科の教師としての奉仕が始まりました。何よりも自分自身は、日曜学校なるものに一度として出席したことの無い者なのです。「一定の訓練が要求され、またそれを受ける機会が備えられなければならない」と指摘されておりますが、一定の訓練を受けるどころではなく、見よう見まねで始まったのです。以来、今日まで、休むことなく御言葉を子どもたちに語り続けてまいりました。わたしは、日本の諸教会の実情から、これは例外ではなく、むしろ、その平均と言えるほどの現実なのだ、と考えています。

私自身、牧師としての奉仕を重ねて、既に17年が過ぎました。まことに恥をさらして、臆面もなく記してしまいましたが、教師の訓練のためのプログラムを準備して、実践しているわけではありません。本当に怠慢な牧師のそしりをまぬかれません。ただ、言い訳がましいのですが、たとい、教師養成プログラムはなくても、当伝道所の会員として公的な集会に出席されていれば、基本的にはそれで良いという自負もあるのです。つまり、大胆に申しまして知識と技術などは、教師になってから習得しても構わないのです。教師会のなかでの「学び」の時間に、弊

誌を利用して教案研究をして下さったり、掲載論文、講演録などをお読みくださればと思います。何よりも、このシリーズは、まさにその一助となることを願って設けたわけであります。

横道にそれ、蛇足になりますが、教師会には、牧師が出席し、指導すべきことは当然と信じます。先述もし、後述でも詳しく触れる予定ですが、日曜学校の正しい実りの鍵となるのは、教師会の形成に求められます。教会の事情はさまざまですから、牧師の常時の出席がかなわない場合もあり得るでしょう。しかし、牧師の出番は、教師会にこそあるはずですが、そこで、校長こそは、率先して牧師の指導を仰ぎ、学ぶ人間の模範となっていたことが大切です。これなしに、良き教師会形成は、困難です。

さて、教師の資格、条件のなかで、しかしこれだけは、譲れないというものがあります。それは、礼拝指針で申しますと、「動機」であり、「教育的理想、キリスト者品性の向上と授業の熟練とへの熱心」です。「人格も才能」も後からついてきます。ただし、逆に申しまして単に、「子どもが好き」、「子どもに慣れている」からという理由だけでは、教師になってはいただけなのです。何故なら、日曜学校は、「信仰の教師」だからです。どれほど教育知識と技術に長けていても、伝えるのは信仰の道です。信仰を教え、伝えるためには、生きた見本、「人格」がどうしても必要となります。それなしには、子どもたちには、福音の真理は伝わらないのです。教師はまさにその全存在が神に用いられるのです。なんという光栄でしょうか。ですから、そこで問われるのは、繰り返しますが、子どもをキリストに導くための真実な「愛」と、教師自らが成長したい、しなければならぬという自覚、「聖化」されることへの熱心です。自分は教える人、子どもは教えられる人と考えながら、自分は成長の努力を息り、キリスト者、会員として

の誠実を息っていて、どうして、子どもたちの前に「信仰の教師」として立てるでしょうか。いずれの教会奉仕にも通じることですが、とりわけ、日曜学校教師とは、単に「自分の才能」を生かす奉仕ではないのです。「賜物」とは、常に教会を建て上げ、隣人を生かすために与えられたものですし、そのようにして、自分自身の全存在が神に用いられる光栄を味わう道なのです。

教師の奉仕は、「教会役員」（長老、執事）に負けず、多くの犠牲を求める奉仕に他なりません。実に、「召命感」こそは、この奉仕を担わせ続ける霊的な力の源泉なのです。しかもこの召命感が、召命感のさらなる深化のために、自らの霊性を深める努力を惜しまない熱心の源となるのです。「子どもたちをわたしのところへ……」。この主の御声に心動かされるあなたなら、召命の「確信」がなくても十分です。どうぞ共にこの労を担ってまいりましょう。必ず深化させられてまいります。

日曜学校の教師、それは、御言葉を生きる人であり、それを求める人です。そうでなければ担えません。そして、すばらしい恵みの事實は、御言葉自身がそのような教師（像）を作り上げて下さるのです！ そうであれば、キリスト者なら、誰でも教師になれるとすら言いえるはずで

下記に、当伝道所の教師就任式の式文からの抜粋をご参考までに掲載いたします。

二、式辞

日曜学校は、契約の子を信仰告白へと導き、地域の子らを羊の大牧者たる主イエス・キリストへと導くための教会の働きに他なりません。教師の務めは、子どもたちを礼拝者として育てるために、子どもたちの主日礼拝式のために仕えます。教師たちと共同で説教、司式、祈りを導きます。また、分級においては、担当する生徒に御言葉を教え、一人ひとりの魂を看取り、自分の口で自ら祈れる子として育つように導きます。

礼拝指針第32条にこう記されていることを心に留めなければなりません。

「上述参照」

これを実現するために、自ら信仰の研鑽に努めなければなりません。また、日曜学校は教師の共同の働きによってのみよく担えることをわきまえ、日曜学校教師会を重んじ、共同的研鑽を受け、ともに互いのため、生徒のために祈らねばなりません。

子らに信仰の良き模範を示すために、祈禱会などの諸集会を重んじ、真理の御霊の助けを祈り求めつつ、率先して奉仕に生きるべきであります。

三、誓約

- ①あなたは、旧・新約聖書が神のことばであり、信仰と生活の唯一の誤りなき規準であると信じますか。
- ②あなたは、私たちの教会の信仰規準を、聖書の真理を体系的に示すものとして誠実に受け入れますか。
- ③あなたは、宣教教師の監督と日曜学校校長の指導の下にこの任務を果し、召命にふさわしい生活において福音の告白を飾り、子らの模範となるように努めることを誓約しますか。

第三回 教会教育の基本形（カテキズム）

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

「日曜学校教師」書いて字のごとく、教える人です。改めて問います。そもそも、日曜学校教師の務めとはどのようなものなのでしょう。

政治規準第43条には「教師の職務」が記されています。この教師とは、いわゆる牧師のことを指しています。この教師の職務を表現する名称として、「監督」「牧師」「しもべ」「長老」「使者」「伝道者」「説教者」「教師」「神の典義の管理者」として聖書的用語を列記しています。「この名称は、職務の階級を示すものではなく、皆同一の職務を表している」とされています。「牧師」つまり「教師」の務めとは、多様なものなのです。このことは、日曜学校教師である私どもの教師としての自己理解を正しく導く、道しるべともなるのです。

わたしは、自分の仕える教会の日曜学校教師会で、何度でも「教師とは、分級の子もたちの牧師の役割を担うのです。家庭では、契約の子の牧師は父親、父親がキリスト者でなければ、母親が牧師になってあげてください」と申します。つまり、教師とは、知識を教授するだけの人ではないということです。むしろ、その全存在をもってキリストを証しし、キリストの恵みを共に受けるようにと招き、教え、励まし、慰め、彼らと共に生き、仕える人なのです。それは、まさに皆さんの教会の教師、牧師の務めと存在そのものです。もしも牧師が一人机の上だけで生きているのなら、果たしてそこに教会は建つでしょうか。

考えてみますと、日曜学校教師になるために、試験はありません。最低条件としては、洗礼受領者、現住陪餐会員であることです。「召命」は

問われますが、「確信」まで行かずとも構いません。しかし既に、二ヶ月、三ヶ月と奉仕を経て、奉仕の喜び、楽しさを味わう一方で、これは、本当に大変な奉仕を引き受けてしまった……と悩み始まる時期でもあるかと拝察いたします。

もしかするとそのような方をもっと、悩ませてしまうことになるかもしれません……。あらためて、「礼拝指針」第32条を読みます（第二回原稿参照）。そこに、「毎週周到な準備をし、規律正しく勤め、学校の方針と他の教師たちとに誠実でなければならない」とあります。いかがでしょうか。またまた、心疼く思いが湧かないでしょうか。「毎週の周到な準備」(!)これは、目もくらむような大変なレベルを要求されているわけです。

しかし、私どもの現実は、正直に申しますと、土曜日になって、「どうしよう……」と焦り始めることも少なくないのではないのでしょうか。そこで、教師が考えることは、「よい『教案(誌)』があればなあ」ということではないのでしょうか。そして、弊誌を手にとりてくださって、分級展開例を見る。「……、このままでは使えないなあ……」。これは、「本音」ではないのでしょうか。某有名な教案誌には、「ワーク」もあります。このワークを子どもに与えて、それで済ませる分級ということも、まさかと思いますが、不可能ではないかもしれません。それほど、よく出来ている(らしい)のです。それに対して、私どもと致しましては、先ず素直に非力を認めます。第16号でワークへの挑戦がなされましたが、確かに私どもの課題です。

しかし、私どもの『教会学校教案誌』は、決して「負け惜しみ」ではなく、「周到な準備」を

助けるための言わば「虎の巻」として発行したのではありませんでした(第4号拙稿参照)。誠実な教師であればあるほど、準備に苦しみます。おそらく何年経っても、準備は楽になってはまいません。自ら学ぶべきこと、取り組むべき課題がますます見えてくるからです。

そこで、この「周到な準備」についても逃げないで、真正面から考えてみたいと思います。まず、私自身のことを申し上げます。牧師の最大の務めは説教することです。このことのために、召され、生かされています。牧師とは、主の日のために生きている人間であると言い切つてよいと思います。ところが、その主日のための準備に集中できないさまざまな働きが求められてまいります。それには、牧師自身の問題もあれば、教会(中会・大会)の問題もあるでしょう。いずれにしろ、一つの説教を(完全)原稿に書き記すために、私などは、それだけで、まるまる二日間は集中しなければなりません。もちろん、時間をかければ良い説教ができる、とは限りません。しかし、周到な準備を誰よりも求められる牧師であるわたし自身、毎回、「来週こそは……」と考えているのです。そうであれば、社会で働く日曜学校教師方にとって、いったい、日曜学校の準備のために何時間集中できるのででしょうか。弊誌を、通勤、通学の友としてくださる方もおられると思います。すばらしいことです。しかし、この「周到な準備」が教師の心を蝕み、休職、辞職へと追い込むこともありえると思います。

教師個人の「負担」を軽減し、かつ豊かな日曜学校とするために、何か良い方策があるのでしょうか。あります。しかもそれは、「方策」として考え出されるようなものではなく、豊かな日曜学校となるために不可欠な筋道なのです。それは、礼拝共同体としての日曜学校の本質的な姿から導き出されるものなのです。

礼拝指針第28条(教会学校の目的)によれば、「教会学校とは、教会の教育事業が主として行われる組織を言う。それには、日曜学校・週日学校・休暇中の聖書学校・その他がある」とあります。教会学校は、教会につらなる全年齢の神の民に、学びのプログラムが提供される組織を指します。その意味で、教会即教会学校であると考えても良いのではないのでしょうか。

「本誌の基本方針」1の表題をご覧ください。「子どもの『礼拝共同体』としての日曜学校」とあります。いにしえより、神の民の祈りの家、つまり礼拝共同体である教会は、「学びの家」とも呼ばれてまいりました。そこでは、御言葉が繰り返し教えられていたからでもあります。

しかもそこで急所となるのは、御言葉を教える営み、教理の学びとは、その言葉によって礼拝を捧げるためのものであるということです。その意味で、礼拝を伴わない学びや、礼拝へと至らせない学びは、真実の意味で教会の学びとは言えないはずで。

もしも、日曜学校がいわゆる「学校」の真似事のようになり、教師と生徒、教科とカリキュラムの制定、管理と運営……などに力を注ぐだけになるのであれば、本来の教会の働きとは異なっていくのではないのでしょうか。

その意味で、私どもが、日曜学校の働きについて考察する際の基本は、これは、日本キリスト改革派教会としての教会論にもとづく営みであるし、あらねばならないということです。実に、私どもの教会の自己理解、福音理解こそが教育の内容、教育の方法、教育の目標……つまり教会教育の基本形を規定するわけです。そこから必然的に、日曜学校の共通イメージすら結ばれてくるのではないのでしょうか。

弊誌はもともと、別冊「子どもカテキズム」をカリキュラムにした二年間の定期刊行を目指して刊行しました。その後、一年の旧約新約の救済史を軸としたカリキュラムで刊行し、さら

に、現在は、「子どもカテキズム」カリキュラムの二サイクル目の第二年を迎えております。つまり、「カテキズム教育」という教育方法論こそは、教会が自らの福音理解にもとづいて生み出した、教育の基本形であると信じているのです。(来年度の予定は、二年間の救済史による聖書の学びです。)

しかしそこですぐにこのような誤解、批判も他から聞こえてくるのです。「現代の教会は、そのような教授中心、詰め込み、暗記教育を乗り越えなければならない。この世においてなされている悪しき、古き教育方法は捨てなければならない。」しかし、私どもは、そのような声に惑わされません。それはまさに偏見と誤解でしかないからです。もとより、教育学や心理学の進歩に対して教会はその恩恵を受ける必要があることは、当然です。この世や時代からの挑戦によって、教会が自己変革を強られることを一概に否定しません。しかし、「教会の自己変革とは、神の御言葉による。」これが、私どものモットーであります。

教育の方法、日曜学校の営み、ひいては日曜学校像(教会像)すら、本来の「カテキズム教育」のなかで規定されるのではないか。これは私どもの一貫した主張でありました(創刊号、三川師論文参照)。

「カテキズム」とは、「響く」という言葉に由来します。「福音」の文字の中にもすでに、喜びの「響き」、命の響き、躍動が示されています。福音の言葉によって誕生せしめられた教会は、自らその響きを教会内外に響き渡らせます。神の言葉を響き渡らせることつまり教えを告げ広める家、教えを学ぶ家である教会、そして日曜

学校には、既に喜びの共鳴があるのです。あの放蕩息子の譬えに示されていますように、父と子の喜びがあふれ出すのです。父と子の喜びが共鳴し始めるのです。

カテキズム教育は、何よりも顔と顔とが向き合う関係を要請します。そうでなければ響きません。先ず教師とは、子どもたちに先立って、神に御顔を向けられた人です。神御自身こそが真実に人間に向き合っていて下さる、人間を問題にしてくださるお方なのです。教師は、その神の「顧み」を受けた喜びをもって神へと向き合い、その喜びをたずさえて子どもに向かうのです。そこに教師と子どもの向かい合う姿が生まれる。これが、日本キリスト改革派教会の日曜学校の教育イメージです。教会教育の基本形なのです。

「毎週周到な準備」とは、教材、工作、教案の準備である前に、子どもたちのために祈ることではないでしょうか。子どもたちのために、教師が先ず神の方を仰ぎ見、執り成すのです。それもできない……? そのときは、悔い改めて下さい! 私どもの営みが実るのは、私どもの力、技量を越えて、聖霊の御業なのですから。

最後にあらためて繰り返します。これらを共同で担うのです。正しいカテキズム教育とは、共同体による営みなのです。そしてその中心的な場こそ実は、子ども礼拝式のなかにあるのです。その頂点は、神の言葉の説教、そこでこそ、「共鳴」(神と人・教師と子ら、子らどうし)が実現するのです。

焦らず、共に今月も励んでまいりましょう。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト マタイによる福音書18章18節～20節

究極の権威

この世において究極の権威とは何でしょうか。絶対的な権能とはなんのでしょうか。それは、人の罪を赦すことと裁くことです。「あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは天上でも解かれる」(18節)ことです。「つなぐ」とは禁止すること、つまり、罪を断罪することです。「解く」とは解放すること、つまり、赦すことです。これらは本来、人間には許されないことです。何故なら、神のみがお持ちになられるものだからです。既に主イエスは、16章19節において、「あなた」つまりペトロにこの権威と使命を委託されます。もちろんこれは、ペトロ個人に天国の鍵が付与されたということではありません。今日のテキストに明らかです。ここでは、「あなたがた」とされています。つまり、教会共同体が、この権威を委託されているのです。それゆえに、教会こそは、地上において絶対的な権威を持ち、これを行使すべき共同体なのです。

互いの罪の赦しを求めて祈りを合わせる群れ

教会のことを聖書は幾通りにも表現しますが、その代表的なものの一つは「神の民の祈りの家」(21:13他)です。しかもそこで改めて問うべきことがあります。神の民、キリスト者は何を祈るのでしょうか。主イエスは、ここで、神の民の祈りの家である教会に、罪の赦しの権能を与えていることを教え、その教会がそこで何をこそ願うべきなのかを指し示されました。教会の祈りが集中するのは、罪の赦しをめぐるとりなしの祈りなのです。15節以下では、罪を犯した一人の兄弟をどのように教会の交わりの中に迎え入れることができるのか、その筋道を示しています。この一人の兄弟の罪の赦しを巡って語られた説教のなかで、

教会の務めである、とりなしの祈り、福音宣教、牧会などの奉仕が述べられているのです。

主イエス・キリストが共におられる家

何故、神の家が、罪の赦しをこそ求める、祈りの家になるのでしょうか。それを決定的に強調するのは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」との御言葉です。つまり、どんなに少数の者たちであっても、互いに集まるところに「救い主、贖い主」イエスキリストがおられるからです。この主がおられるところで、私どものなすべきことは、「とりなし祈る」ことであることは、明らかです。

黙想

今、私どもが、主イエス・キリストの救い、恵みにあずかることができたのは、既に私どもに先立って、私どものために心を一つに集めて、罪の赦しのために祈る交わり、神の民の祈りの家であるキリスト者の共同体があったからこそです。

そして、今日、私ども日曜学校教師もまたこの祈りの家に支えられ、一人の小さな兄弟姉妹を主のもとに得ようと、罪の赦しにあずからせようと励んでいるのです。

子どもたちが、一人のキリスト者として産み落とされるためには、この神の民の祈りの家が必要です。その、祈りの交わりのなかに包み込む主体となるのが、私ども日曜学校教師会です。そこでこそ、幼い彼らも私どもの兄弟姉妹と見る眼差しが開かれてまいります。子どもたちと共によき日曜学校を作ること、子どもたちと共に祈りの家をつくることへと私どもは招かれています。

(相馬伸郎)

カテキズム 子どもカテキズム問34

子どもカテキズム

問34 だれと歩むのですか。

答 私はひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

参考教理問答 『ウエストミンスター信仰告白』第25章

「子どもカテキズム」は、ウエストミンスター小教理問答の構造を用いて記されています。しかし、この設問は小教理問答にはありません。このカテキズムは、「教会とは何か」を厳密に考えないまま歩んできた日本に、この一書で、教会なしに私どもの信仰が成立しないことを明らかにし、堅固な真の教会形成に資するべく編まれました。

聖霊の家、神の家としての教会

問28から議論が始まっているのは、「救済論」についてです。救いとは何かを巡って、聖霊なる神のお働きを賛美告白しています。そして教会についての信仰もまたこの聖霊の御業のなかで、言い表されます。聖霊のお働きが人を救い、何よりも教会を教会たらしめているのです。

神の民としての教会

問33で、救われた者は、聖化されることを学びました。ここから、信仰の生活が始まるのです。しかもそこでこそ、そもそも教会生活なしに信仰は成立せず、その歩みをつくることもできないということを確認させるのです。

そもそも、聖書の信仰とは、共同体の信仰です。個人の信仰、個人の救いが聖書の主題ではありません。旧約聖書は神の民イスラエルを場にした救いの物語が記され、新約聖書は新しい神の民である教会を場にした救いの歴史が記されているのです。救いとは、神の民の中に招き入れられることであると言っても構いません。

教会の外に救いはない

この古来大切に受け継がれてまいりました標語

が、今日、教会内でも評判の悪いものとなっているようです。主イエス・キリストは、ご自身の教会（民）の交わりの内に臨在しておられる（聖書研究参照）以上、ここに立ち続けることを止めたら（諦めたら）聖書の信仰はまさに形骸化し、空虚となり、救いの確かさは崩れます。

個人的信仰から共同体的信仰へ

誰でも、最初に教会に来たのは、自分の救い（幸い、問題解決）を求めてであったはずですが、しかも、罪赦され、キリスト者、会員となってお、自己中心の罪、個人（主義）的な信仰へと引き戻らされ続ける私どもです。「自分のための信仰」と言うように、神をも自分に引き寄せて、自分に奉仕させようと無意識の内に企み、不信仰へと転落するのです。これを正し、「神と教会のための信仰」へと動き出させるのが、この教理です。

黙想

もしも、教会が、福音を正しく継承し、これを述べ伝えてくれなかったとしたら私どもは今日の恵みにあずかることはできなかったはずですが、私どもの喜ばしい光栄ある、重い責任は、これから私どもの教会へと招かれる選びの民のためにも、使徒よりの信仰を継承し、その業に生きること、つまり、福音を宣教し、真の教会を建てあげて行くことです。子どもたちに、信仰を教会と結びつけて理解すること、教会なしに主イエス・キリストとの交わりがないこと、またそこでこそ見えてくる自己中心の罪を教えることもできるはずですが、

（相馬伸郎）

テキスト マタイによる福音書18章18節～20節
カテキズム 子どもカテキズム問34

〔単元のねらい〕

進級式を迎える主日です。不安と期待を持って新年度を歩み始める子どもたちです。その成長を喜び、感謝し、お祝いし、特別にお祈りしてあげてください。今日の主題は、教会は神の民の祈りの家であり、信仰はこの教会の交わりの中で与えられ、育てられ、神の民である教会の形成のため営まれることを教えます。決して、一人ぼっちで信仰に生きることはできないこと。むしろ、神の家族である、信仰の先生、信仰の友が与えられていることとその大切さを教えたいと思います。また、子どもたちにも、お友達を教会に誘うこと、そのために祈りする使命が与えられていることを教え、励ましたいと思います。共に手をつないで御国を目指す信仰の旅路の幸いを伝えたいと思います。

「僕は一人ではない」

今日は進級式を致しました。それぞれ一つ学年があがりました。おめでとうございます。先生は、皆の成長を見ることができてとても嬉しく思います。教会の日曜学校には、進級式があります。入学式はありませんから、いつから来ても良いのです。何よりも大切なことは、日曜学校には、卒業式はありません。先生も、いつまでも卒業できませんし、卒業してはいけません。したくもありません。これからみんなと一緒に神さまを礼拝し、聖書の御言葉を心に蓄えて信仰の生活を続けていきたいと心からお祈りしています。

今日の聖書のお話は、イエスさまの説教です。「はっきり言うておく。」これは、イエスさまがとても大切なことを仰るときの言葉です。イエスさまはこのお話の前に、実は、弟子のペトロに、「あなたに天国の鍵をあげよう」と仰いました。もちろん、天国には、皆がもっているような自転車の鍵や家の鍵のようなものはありません。イエスさまは今、お弟子さんたちに向かって、「あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる」と仰せになりました。この意味は、もしもイエスさまを信じている人たち、つまり教会のことですが、誰かの罪を赦すなら神さまも赦され、もしも、誰かの罪を赦さないことにするなら神さまも、

そのようにするということです。イエスさまは、信じられないくらいすごい力を教会にお与えくださったのです。

さて、それなら教会は、もう神さまのように権威があって、偉いのですから、ふんぞり返って「えっへん、お前たち罪深い者たちを救ってやろう、けれども、きちんとイエスさまを信じていないとだめだぞ」と、こんな風に言って良いのでしょうか。

イエスさまは、ここでもう一度「はっきり言うておく」と仰いました。「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなげて求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」と仰せになりました。つまり、イエスさまは僕たち私たちに、どんな願い事でも、僕たち私たちのうちの二人が心をつなげてお祈りすれば、それをかなえてあげると約束しておられるのです。「やったあー、それなら、さっそくお願いしよう」と考えたお友達はいますか。皆は、そこで何を願うのですか。ただし、一人ではだめなんです。そうなる、お友達を見つけて、「ねえ、今、欲しくてたまらないゲームがあるんだけど、一緒にお祈りしてくれないかなあ」とお友達と一緒に祈りしてくれるようお願いするのかもしれない。

でもちょっと待って下さい。二人が心をあわせてお願いするのであれば何でもかなえられるとイエスさまが約束された意味は、どんなゲームでも買えるとか、自分の願いどおりに実現するということなのでしょう。

ここで、教えられたことは、罪を赦すこと、赦さないことのお話でした。イエスさまを信じている人たちの集まりである教会がしなければならないことは、何でしょうか。それは、イエスさまに「罪を赦して下さい。罪を赦して神さまの国に入れるようにしてください。教会に来れるようにしてください」というお祈りを捧げることです。そのことを一生懸命、心を合わせてお祈りするなら、天のお父さまは必ず赦しを与えて下さると約束されたのです。つまり、教会は、罪を犯した人がそのままになってしまって、ついには、そのせいで神さまのお怒りを受けなければならないその人のために、罪から立ち返って、イエスさまの教会につながるために、天国に入れるようにとお祈りするところなのです。イエスさまは、「そのような祈りは必ず、神さまが受け入れてくださって、赦していただけるのだよ」とお教えくださったのです。

「二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである。」今日の暗唱聖句です。教会は、イエスさまのお名前によって集まっている集いです。イエスさまのお名前が結ばれている集いです。そして、集うその場に、必ずイエスさまが共におられるのです。それなら、イエスさまはどなたですか。イエスさまは何をして下さった神さまですか。それは、僕たち私たちのために十字架について罪を赦し、神さまの子どもにしてくださるためにお甦りになられ

たお方ですね。

そのイエスさまによって、僕たち私たちは、今、集められて、お祈りするようにと励まされています。自分のために、お友達のために、その罪が神さまに赦されて、天国に行けるようにとお祈りするのは、でも、今、あらためてそんな僕たち私たちこそ、自分勝手な、自分中心のお願い事ばかりしていることを先ず神さまに赦していただきたいと思いませんか。日曜日のたびに僕たち私たちは、ここに集まってこのように礼拝しているのは、罪を悔い改めるためでもあるのです。そして、そんな僕たち私たちが神さまに赦していただけることは間違いありません。

今、僕たち私たちが、この教会でイエスさまを礼拝し、イエスさまの御言葉を聞くことができるのは、僕たち私たちのために、先回りをするように、先生たちが心を合わせてお祈りしてくれているからです。神さまが、そのお祈りを聞いてくださっているからです。それなら、今度は、僕たち私たちも、ここに来ていないお友達のために、お友達とそして先生と一緒に祈りませんか。教会というのは、そのために心を合わせてお祈りする神さまの家です。

この家には、イエスさまがいつも一緒にいてくださいます。信仰の先生やお友達も一緒です。誰でも一人ぼっちでイエスさまを信じている人、信じられる人はいません。僕たち私たちは、これからもずっとイエスさまと一緒に、教会の皆と一緒に、まだここに来ることができないお友達とも一緒に、天国を目指して歩み続けて行くのです。特に、ここにいないお友達のために、勇気と根気をもって誘ってあげましょう。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書18章20節

二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、
わたしもその中にいるのである。

〈ねらい〉

- ・旧年度の感謝をし、新年度の祝福を求める。
- ・教会に来て、みんなと一緒に聖書を学んだり、お祈りしたりすることの大切さを学ぶ。

〈展開例〉

春になり暖かくなりました。春は英語でスプリングと言います。パネと同じ言葉です。「芽を出す」という意味もあります。春って元気に新しく飛び出すような感じがしますね。

4月になって幼稚園に行ったり、年長さんになったり、小学生になったりする人もいますね。皆さんはどうですか？ 幼稚園生になる人、年長さんになる人、そしてお兄さん・お姉さんも、新しい年を元気に迎えられるように、神様にお祈りしましょう！ この一年を神様に守って頂いた感謝も忘れずに！

さて、みなさんは教会学校に来ていますよね。幼稚園や保育園、小学校とは別の学校です。教会や教会学校ってどんなところでしょうか？ みなさんで言うてみてください。

聖書は教会のことを、「あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐがれ、あなたがたが地上で解くことは天上でも解かれる」と言っています。

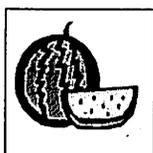
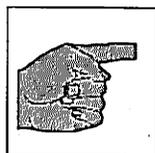
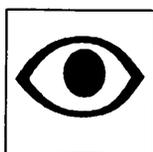
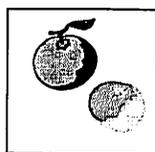
す。とてもとても大切なお役目です。たとえて言えば、家の中が神様の国としたら、教会はそのお家の玄関かな。玄関はお家の出入りするのにとっても大切なところですよ。教会のお仕事は、神様のお家にみんながたくさん入って来られるようする大切なお仕事です。そのお仕事をしている牧師先生や教会学校の先生などのためにお祈りしましょうね。

もう一つ聖書は、教会のことを「祈りのお家」と書いています。みんなと一緒にお祈りをするところです。このクラスもそうです。二人でも三人でも、集まってお祈りするところには、イエスさまと一緒にいてくださいます。これは、イエスさまのお約束です。もちろんイエスさまは、ここにもおられますよ。

〈お祈り〉

- ・進級などが出来てありがとうございます。
- ・教会では、お友だちや先生と一緒に聖書のお話を聞いたり、お祈りをしたりすることが出来ます。ありがとうございます。
- ・わたしたちも神様のことや教会のことを、友だちに教えてあげることが出来ますように。

☆ ながまはどれかな？ ☆



- ① うえとしたで、ながまをさがし、せんでむすぶ。
- ② せんでむすんだながまをみて、どんなおいのりがあるかみんなでおはなしする。
- ③ かんがえたことを、みんなでじゅんばんにおいのりする。

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ①人の罪を裁いたり赦したり（つないだり解いたり）できるお方は、どなたでしょうか？（→神さま）
- ②地上には、そのような神さまのお働きができる人たちの集まりが一つだけあります。それは何でしょうか？（→教会）
- ③教会とは、誰のお名前を信じて集まっているところでしょうか？（→イエスさま）
- ④イエスさまを信じる教会でする大切なことは何でしょうか？（→お祈り）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

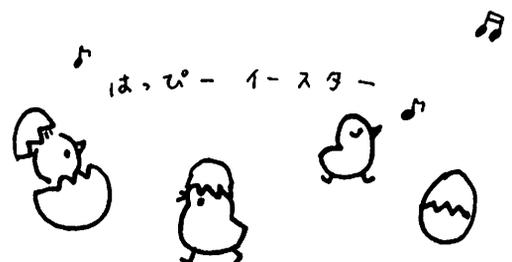
- ①イエスさまは、信じる人をひとりぼっちにされましたか？（→されません）
- ②イエスさまを信じる人たちとは、どこで会えますか？（→教会）
- ③教会は、どういう家と言われますか？（→神の民の祈りの家）

〈考えてみよう〉

今、どんな願い事があるでしょうか。でも、そのことをお祈りする前に、それが神様に喜ばれる願いかどうか考えてみましょう。まず忘れてはいけない大切なお祈りは、自分の罪を赦してもらおうお祈り、そして、人の罪を赦すお祈りです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日も教会に来ることができてありがとうございます。私たちの罪を赦してください。私たちもお友達の罪を赦すことができますように。教会で、これからもたくさんお祈りすることをできますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

- ・教会の仲間と一緒に主イエスを信じていること。
 - ・教会は、主イエスがおられるところであること。
- 上記のとおり「教会」という共同体の仲間と、臨在するキリストに心を向けさせること。自らが教会に生きる民であるとの自覚を促す。

〈展開例〉

一緒に考えてみよう。

プリントをつくり、() の言葉を生徒に答えさせるのもよいでしょう。

- イエス様の救いってどんな救い？
私達は（罪）があるからそのままでは神様の（お怒り、刑罰）をうけなければなりません。けれどもイエス様が身代わりに私の（罪）の（刑罰）を受けて下さった。このことを信じて（罪を赦され）て、（天の国）に入れていただけること。
- 「教会」ってどんな人達の集まりですか？
（イエス様を信じる人たちの集まり）
- では教会がしなければならぬお祈りは？
イエス様に、（罪を赦してください）、（神様の国に入れるようにして下さい）、（教会に来れるようにして下さい）とお祈りすること。

それから、（まだイエス様を信じていない）人たちが、イエス様を信じて（教会につながるように）とお祈りすることです。

- そうやってお祈りするところには、どなたが一緒におられるのでしょうか。
（イエス様）です。

- 暗唱聖句を読んでみよう。
マタイによる福音書18章20節。

- 教会には、イエス様を信じて罪を赦された人、天国と一緒にいる仲間がいるのですね。ぼくたち私達はたった一人でイエス様を信じているのではないのですね。

〈祈り〉

今日は、進級式を迎えました。教会には、一緒にイエス様を信じる仲間がいます。イエス様を信じて罪を赦されて天の国に入る仲間がいます。そして教会には、イエス様がいつも一緒にいてくださいます。新しい学年になりました。ぼくたち私達が、この学年の間も、そのあともずっと一緒に教会に来ることができるよう守って下さい。それからイエス様を信じる新しい仲間が入りますように。

【目標】

教会で二人、三人で祈ることの意義、そこにある交わりが、教会外の交わりとどのように異なるのかをとらえる。教会の二人、三人と共に何を祈るべきかを考える。

の道を初めて理解し、その道に従う者となり、天上での赦しの確信を得るのである。そして古い自分が十字架で葬られて、罪の自分と死別し、赦しと新しい命に生きる者となるのである。そこに、教会にこそある深い交わりと支え合いが存在し、教会でこそ祈られる祈りがある。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「教会の交わり、そこで互いに祈り合う経験」とは？ それを生徒と分かち合う。

Q. 疑問は解けましたか？

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書18章18節～20節を生徒と読む。

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 御言葉と同じような経験をしたことがありますか？

【ポイント】

このマタイ18章は主イエスが語られる教会論であると言える。18章15～20節には、教会の中に罪が生じた時の具体的な対処が語られている。そこで為される二人、三人の祈りとは、罪の告白の祈りである。罪を互いに告白し、それを明るみに出すことは恥ずかしく、できれば避けたいことであるが、それによって私たちはキリストの十字架

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

祈りが確かに聞かれていること、祈り合う友が与えられていることの感謝。祈りの交わりの深まりのために。具体的な友人が、さらに教会の祈りの交わりに加えられるように。

テキスト エフェソの信徒への手紙2章14節～22節

本日のカリキュラムの主題は、「キリストの体なる教会」。暗唱聖句は、エフェソの信徒への手紙1章23節、「教会はキリストの体……」。ここでは、カリキュラムの主題を念頭においてテキスト研究を行います。

キリストが平和

14節で、「実に、キリストはわたしたちの平和であります。」とあります。聖書が指し示す「平和」とは「関係」の概念です。つまり、神と人との関係が良好であること、それが「平和」なのです。ところがここでは、キリストご自身が「平和」と呼ばれています。パウロの表現ではここだけで登場しますが、大変興味深い表現です。それは、主キリスト御自身が平和を創り出されたからです。このキリストが共におられる場所、キリストを信じ受け入れるところに平和が実現するからです。キリスト御自身こそ平和と告白することは良く分かることではないでしょうか。

ひとつの体

パウロは、主キリストは「二つのもの」を一つにするといいます(14節)。二つのものとは、ユダヤ人と異邦人のことです。それは、「敵意という隔ての壁を取り壊す」ことによって、また「律法を廃棄」することによってなされます。

敵意は、ユダヤ人が異邦人を軽蔑し、異邦人がそのような彼らを憎むという関係のことです。「律法の廃棄」とは、旧約聖書の律法のすべてを意味しているわけではないのは当然です。ここでは、律法主義つまり、律法の実行によって平和を獲得しようとする企てを廃棄することです。

それなら、主キリストは、どのようにして平和を実現なさるのでしょうか。それは、「ご自分の

肉において」、「十字架を通して」、「一人の新しい人に造り上げて平和を実現」、「一つの体として神と和解させ」、「敵意を滅ぼ」させられたのです。

平和の主は、イエス・キリストであり、このお方が、人となり、肉体をとって十字架で贖いの死を遂げられたことによって、信じる者を一人の新しい人、一つの体にしてしまわれることによって、平和を実現なさるのでした。

神の家族

読者の大部分が異邦人である教会員に向けて、ユダヤ人パウロは、「あなたがたは神の家族」(19節)であると呼びかけ、神の民となっていると説得します。主キリストのおかげです。

聖なる神殿

神の言葉を語る者が真の神殿の土台とされる(20節)。そればかりか、主イエス御自身も神殿の一部と言われます。神殿の天井アーチを築き上げる最後の部分、それなくしては崩れてしまうその要石がキリスト御自身です。

黙想

私どもは今、キリストにおいて、神との平和を得、キリストとの結合によって、キリストの体の一部分になり、神を宿す神殿、神の民、家族となっています。それは教会員とされている自分の姿に他なりません。当然のことですが、この神の家族である教会に子どもたちも招かれているのです。

子どもたちは、どのように教会を考え、感じているのでしょうか。私どもの中に「平和」を見てくださいませんか。

(相馬伸郎)

カテキズム 子どもカテキズム問34

子どもカテキズム

問34 だれと歩むのですか。

答 私はひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

参考教理問答 『ウエストミンスター信仰告白』第25章

キリストとの結合

問30で、「神の恵みはどのようにして与えられるのか」との質問に対して、「私たちを主イエス・キリストと一つに結び合わせてくださることによってです」と答えています。主イエス・キリストとの結合こそは、私どもに与えられている「恵みの事態」です。これにまさる恵みはありませんし、この恵み以外からもたらされる祝福もありません。「救いの事態」とは、主イエス・キリストとの交わり、主と一つに結ばれていることです。

キリストの体の一部分

キリストとの結合は、そもそも、御子なる神が人となられ、肉体をお受けになられたことに基礎を持ちます。この肉体の十字架上の死そして三日目の復活によって、私どもの救いは成就しました。今、主イエスの肉体は、天にあります。地上にはありません。しかし、先週のテキストで学びました、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」を思い起して下さい。神の民の祈りの家である教会は、キリストの臨在する家です。その家は、パウロによれば、「キリストの体」です。キリストとの結合は、ここで、つまり、キリストの体なる教会において現実化するのです。

その意味で、キリストの体なる教会から離れたところで、キリストとの交わり、結合が通常はありえません。教会の交わりから離れたところでキリストの救いのリアリティーを求めようとする企ては、結局、主観的、観念的、神秘的にならざるを得ません。

それだけに、私どもが今、教会の交わりの中におかれていることがどれほど幸いなことであるのか。賛美、感謝せざるを得ません。

洗礼入会式、聖餐の礼典

聖化の歩みは、具体的には、洗礼（入会式）から始まります。もちろん、洗礼に至るまでに、教会の交わり（主日礼拝式を中心として、諸集会、学び会、キリスト者との個人的な交わりなど……）が不可欠です。横道にそれますが、洗礼入会志願者は、これまでの歩みを振り返り、「教会なくして自分の救いはありえなかった。これからは、自分もまたキリストの体の一枝として、教会の形成に参加したい」との志と確信が与えられるまで学びを深めることが必要です。

洗礼は、キリストの御体に加えられることを確証する礼典です。聖餐はキリストの御体にあずかっていることを確証、更新させられる礼典です。いずれも、キリストの御体との結合を示します。いずれも、キリストの体なる教会を教会たらしめ、形成する恵みの手段です。

黙想

契約の子は、自分が既にキリストの体の一部分とされている神の民であることを礼拝の体験（特に説教、そして祈禱によって）と分級の体験によって、体感し、受け入れることができているでしょうか。地域の子に、どうすれば、私ども教師が、キリストの体の一部分であることを見せられるでしょうか。

（相馬伸郎）

テキスト エフェソの信徒への手紙2章14節～22節

カテキズム 子どもカテキズム問34

(単元のねらい)

私どもは、教会を挙げて、地域の子らへの伝道に取り組み祈ります。地域の子が、教会に来る。なんという喜びでしょう。この聖なる奉仕に召された教師の存在と役割はまさに重大です。私どもは、神が送って下さった子らを、主イエスとその教会から一人も離れないようにと、全力を注いで取り組みたいと思います。子どもたちと教師の関係のイメージは、「牧師・先輩・友達・兄弟」が絡み合ったものです。ここでのアプローチは、「あなたは『わたしたちキリストの体』の一部分であって、一緒に信仰の道を歩もうね」と、道を示し、励ます、ひとりの先輩の兄弟です。また、集ってくる子どもたちどうしが互いに祈りあい、励ましあうことが、日曜学校の拡大に、何よりもその形成のためには不可欠です。日曜学校が（ここでは特に分級の交わり）、主キリストを中心にした交わりとなることを目指してまいります。

「イエスさまの体と僕たちの体」

今日のカテキズムは、先週と同じです。聖化の歩みについて学びました。イエスさまを信じている僕たち私たちは、神さまの子どもらしくイエスさまに似せられて、神さまに愛されている喜びのうちに神さまを愛して歩んでいるのです。そのとき、僕たち私たちは一人ぼっちでは歩いていないということ、神さまを信じている人たち、神さまの子どもたち、神さまの民としていただいた教会の仲間たちと一緒に歩いているのです。そして、教会と一緒に歩むことはイエスさまと一緒に歩くことです。皆さんと一緒に、今日もイエスさまを礼拝できることを心から感謝しています。

教会は、とても不思議なところですが、いくつも不思議がありますけれど、その一つは、イエスさまの教会は世界中に広がっているということです。僕たち私たちの〇〇教会だけではなく、隣の〇〇教会があって、今日も、日曜学校に通ってきています。日本中で、今、日曜学校が行われていると思います。しかも、日本だけではなく、肌の色の黒い人、白い人、黄色い人が集っています。しかもそのような人たちもイエスさまによって、一つにつながっているのです。世界中には、数え切れないほどの教会とイエスさまを信じるキリスト者

がいます。けれども、イエスさまによって、みんな一つの教会の仲間なのです。

僕たち私たちの教会には、赤ちゃんからおじいちゃん、おばあちゃんまでいます。日曜学校の分級では、学年別に分かれるけれど、教会には、男の人と女の人、赤ちゃんも年をめされた方も、皆一緒に、神さまを礼拝します。そして、皆が神の民です。神さまの家族なのです。血もつながっていないのですが、皆が家族なのです。

一番最初の教会は、ユダヤ人とそうでない人たち、つまり、僕たち私たちのような人たちが一緒に礼拝を始めました。これは、それまでのユダヤ人では考えられないことです。ユダヤ人は自分たちだけが神さまに選ばれている民と考えて、ユダヤ人以外を異邦人と言って、ずーと軽蔑して来たのです。ところが、ユダヤ人のイエスさまは、十字架にかかって、死んでお甦りになられたことによって、イエスさまを信じる人はユダヤ人でも異邦人でも誰でも皆、神さまの民として下さったのです。だから、今日の御言葉で「キリストはわたしたちの平和であります」とありました。イエスさまを信じる人どうしは同じ神の民なのです。

それなら、天のお父さまは、どのようにして僕

たち私たちが神さまの民にしてしまわれたのでしょうか。それは、今日の暗唱聖句にありました。「イエスさまの体なる教会」に加えることによつてです。イエスさまを信じる人はイエスさまの体である教会の一員になるのです。

教会がイエスさまの体だって言うのは何か不思議な感じですが。みんなの中には、赤ちゃんのときに洗礼を施されたお友達がいます。洗礼というのは、イエスさまと一つにさせていただいて、正式に教会の一員、メンバーとなることができる「礼典」です。洗礼を受けていないお友達も、お父さんやお母さんが理解してくれて、洗礼を受けられたらとても嬉しいです。その日が与えられるようにお祈りしましょう。でも、洗礼を受けていない今でも、イエスさまを信じているなら、イエスさまと一つに結ばれています。その人は、既にこの教会の仲間です。後になって、大きくなったら洗礼を受けることによって、今は目に見えないけれど、そのときがくれば、明らかになります。

イエスさまを信じている人は皆、イエスさまと一つに結ばれているのです。先生もちろんイエスさまを信じていますから、イエスさまの体に

よって、みんなと一つになっているわけです。イエスさまのおかげで、皆と一つになって、礼拝を捧げることができるのです。神の家族です。心から感謝しています。

最後に、今日の御言葉で、教会のことを「神殿」、建物と呼んでいます。その建物の一部分が僕たち私たちなのです。しかもイエスさまもその一部分であるというのです。その一部分は、一番大切な一部分で、それなしには、建物が崩れてしまう部分、アーチ型の天上の一番上の部分にたとえられています。イエスさまによって、お互いが支えられているのです。

イエスさまが一番大切な部分ですが、建物の一部分は、僕たち私たちなのです。ですから、皆で励ましあって、この建物を築いてゆきましょう。そのために、休まず、日曜日に礼拝を捧げてゆきましょう。休んだお友達のためには、お祈りしましょう。この中の一人でもいなくなったら、建物は崩れてしまうかもしれません。それほど、僕たち私たちは、イエスさまに必要とされています。お互いに必要なのです。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] エフェソの信徒への手紙 1 章 23 節

教会はキリストの体であり、

すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

〈ねらい〉

- ・教会は「体」や「建物」といわれる。わたしたちそれぞれが体や建物の一部としてイエス様やお友だちとつながっている。
- ・わたしたちはみんな神様の家族である。

〈展開例〉

先週も少し話しましたが、今日も「教会ってな〜んだ」をみんなで考えてみましょう。

教会には、イエスさまが好きで、イエスさまに愛されている人がいます。赤ちゃんからお年寄りまでいますね。教会は、みんなが神さまの家族なのです。

＊＊ちゃんは時々おじいちゃんの教会に行くことがありますね。何という名前の教会ですか？その教会の人たちも、同じ神さまの家族です。

では、外国はどうでしょうか？ イエスさまの教会は世界中に広がっていますから、神さまの家族もこの教会や日本だけではなく、世界中にいるのです。世界中にいるイエスさまを信じる人は、みんな一つの教会の仲間・神さまの家族なのです。

今生きている人だけでなく、昔生きていた人、これから生まれる人も同じ一つの教会の仲間・家

族なのです。面白いし、うれしいことですね。

もう一つ面白い話があります。教会は、私たち一人一人が、窓だったりとびらだったりするお家なのです。そのお家の一番大切なところ、無くなると、お家が分解してしまう一番大切なところがイエスさまです。教会というお家をイエスさまがしっかりとまとめてくださっているのです。

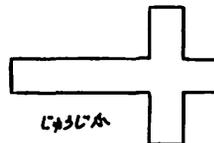
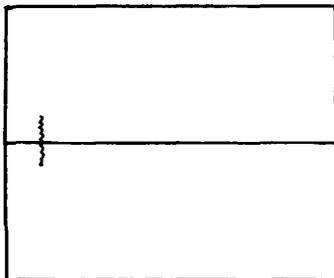
イエスさまは、僕たち私たち一人一人をととても大切にします。そして、「あなたはみんなにとって大切ですよ。みんなもあなたのことが大切ですよ」と教えています。ですから、休んだお友だちのためにお祈りしたり、けんかしたお友達と仲直りしたり、お友だちにイエス様のことを教えてあげたりしましょうね。それはイエス様にとても喜んでもらえることです。

〈お祈り〉

- ・わたしたちに教会学校のお友だちをくださってありがとうございます。
- ・神様の家族を守ってください。
- ・教会学校にもっとたくさんのお友だちが集まりますように。

☆きょうがいどうをつくってみよう！☆

屋根



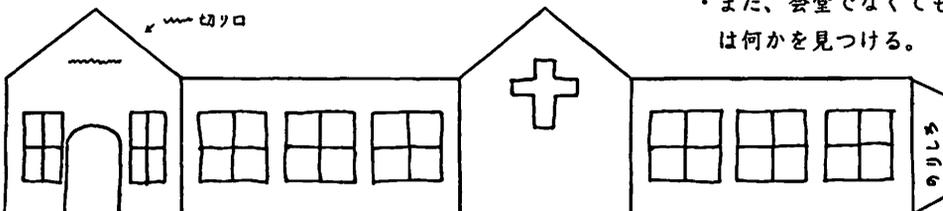
画用紙などに A4程度に拡大、外枠にそってカットし折り曲げ、屋根を載せます。

・この会堂でどんなことが出来るか話し合う。

(礼拝・祈り・交わりなど)

・また、会堂でなくても出来ることは何かを見つける。

切り口



〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① イエスさまが来られたとき、周りにいた人たちはみんな仲良くしていたでしょうか？（→していなかった）
- ② そのような人たちは、イエスさまのことをどうしましたか？（→十字架にかけた）
- ③ でも、イエスさまは十字架によって私たちに何をしてくれましたか？（→神さまとの和解・仲直りをさせてくださった）
- ④ それだけでしたか？（→周りの人たちとも仲直りでき、教会の一部にしてくださった）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

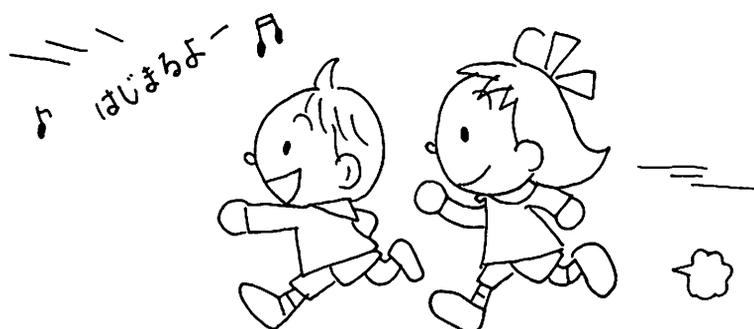
- ① イエスさまを信じる時、私たちはイエスさまとどのようになりました？（→一つに結ばれた）
- ② イエスさまと一つにされたなら、みんなの体は誰のものですか？（→イエスさま）
- ③ それではイエスさまの体は誰のものですか？（→私たち）
- ④ イエスさまを信じる教会は、何と呼ばれていますか？（→キリストの体）

〈考えてみよう〉

聖餐式を見たことがあるでしょうか。大人の人たちが食べているパンとぶどう酒は何のことだと言われていますか。キリストの体と血です。イエスさまを信じるということは、イエスさまの体を食べて、イエスさまと一つになるのです。早く食べてみたいでしょうか。そのために、しっかり聖書のお話を学びましょう。でも、まだパンを食べられなくても、もうイエスさまを信じて教会に来ている人は、イエスさまに食べられているということができます。教会はキリストの体だからです。信じて教会にいるということは、イエスさまのお腹の中にいて、イエスさまの体の一部になっているようなものです。礼拝のとき、私たちはイエスさまの中にいるのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまの体である教会に来ることができてありがとうございます。イエスさまがいつも一緒にいてくださってありがとうございます。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

- ・地上の教会がもつ世界的なつながり、成員の多様性（人種、民族、年齢、賜物の違い）がありながら、それらの違い・隔てを超えてキリストの体としてひとつとされていることに目を向けさせる。
- ・目の前にある各教会だけでなく、世界中の多様な人々が、キリストにおいてひとつとされているという広い視野を持つこと。特にキリスト者が少数である日本においてこの視野を持つことは励ましとなるはずである。
- ・キリストにおいてひとつとされたお互い（生徒同志、教師と生徒、教会員）が励ましあって、教会生活を生涯続けるように勧める。

〈展開例〉

考えてみよう。

- 教会はこの（ ）教会だけですか。ほかにもありますね。知っている教会の名前を挙げてみよう。それ以外にも、世界中に教会はありますね。私達が実際に会ったことのあるクリスチャンはそんなにたくさんではないかもしれませんが。みんなのクラスでも、教会に行っている人よりも、行っていない人の方が、ずっと多いでしょう。でも、世界中に教会があって、そこにクリスチャンがいるのですね。
- 世界の教会にはどんな人がいるでしょう。いろんな人がいますね。違いを考えてみよう。
（国、民族、年齢、職業、賜物等々）

- そんなに違いがあっても、共通することは？
（イエス様を信じること）。（教会）につながっていること。だから、（キリスト）につながっていること。

- 「教会」のことをほかに何といえますか。
（キリストの体）。

- 暗唱聖句を覚えよう。
エフェソの信徒への手紙1章23節。

- 私達も、教会につながっているから、同じ（イエス様）につながっていることがわかるのです。だから、ここにいる一人一人が（キリストの体）といわれる教会をつくっているのです。あなたも、大切な一人です。これからも、イエス様につながる教会に、ずっと一緒につながっているように、日曜日には礼拝をささげていきましょう。友達もさそいましょう。

〈祈り〉

神様、私達は世界中の教会の人たちと、イエス様を信じることによって結ばれています。どんなに違いがあっても、同じイエス様を信じる教会の仲間です。これからも私達が、キリストの体である教会につながり、世界中の教会の人たちと一緒に、イエス様に結ばれていきますようにお祈りします。

【目標】

自分自身がキリストの体である教会の大切な一部分であることを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→エフェソの信徒への手紙2章14節～22節を生徒と読む。

【ポイント】

すべてのものを良くお造りになった神様は、ただひとつ、「人がひとりであるのは良くない」と言われました。この神様を信じた人は、その人自身、神様のものであり、その人個人のものではありません。神様と結び付いた者は、キリストを頭とした器官になるのです。教会とは、救われて神様と結びついた信仰者が、互いにキリストにあって一つにされる場です。教会とは建物のことを指すのではなく、このキリストの体の交わりを指すのです。神の栄光をあらわすことが私たちの人生の目的であるならば、私たちはキリストの体の器官ですから、その体の一部として、その本体につながっている必要があります。体を離れて、切り

落とされてしまった指やつま先には、どんな働きも期待できません。教会の一員となる。教会につながって生きるということは、私たちキリスト者の生命に関わることなのです。そしてそのキリストの体である教会そのものも、その体の一つのかげがえの無い大事な器官である、あなたを必要としているのです。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとって「キリストの体なる教会」とは何か？それを生徒と分かち合う。

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 自分の体を見ながら、地味なところ、派手なところ、関節などのなくてはならないところを確認。また必要でないところはあるか？首から上の部分（つまり頭であるキリスト）が持つ意味、成長する、補い支え合うとはどういうことか？等を考えてみる。

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

私たちがキリストの大切な体の部分部分とされていることの感謝。体全体を生かすために自分に与えられている役割を知り、果たすことができるように。なお体に必要な部分としての新しい信仰の友や、体そのものの成長が与えられるように。

テキスト 使徒言行録1章6節～11節

1. 弟子たちの質問

この箇所は主イエスと弟子たちの最後の会話が記されている箇所です。その口火を切ったのが6節にある弟子たちの質問でした。弟子たちの質問はダビデ王のような統治者による、イスラエルの復興についてであったのです。つまり、イスラエルを回復してくれる地上的メシアが来ると思っていたのです。

2. 時間と空間を支配される神

弟子たちのこの思いに対して主イエスは二つの点で修正をし、新たな使命をお与えになります。

修正されるべき第一の点は時に対する弟子たちの関心です。時を支配するのは神様であって、神様だけがこの世の終わりまでの期間と最後の出来事が起こる「この時」を決定なさるのです。ですから人間がその最後の「時」を詮索したり、前もって知ろうとしたりすることは、単なる好奇心であり、まったく無意味なことなのです。

主イエスが修正なさった第二の点は、空間的な広がりについての視点です。弟子たちの視点はユダヤというひとつの民族に限定された非常に狭いものだったのです。その視野を世界に広げるのです。その広がりには宣教の広がりによって示されています。つまり、神様の御支配は時間的広がりと共に空間的な広がりを持っていることを明らかにしているのです。

この二点を明らかにして、主イエスは弟子たちにひとつの使命を与えておられます。それは神様から示された領域において、福音をあまねく述べ伝えるという使命なのです。この福音の前進こそ、神の国の到来に資する業なのです。

3. 昇天

主イエスは時間と空間に対する正しい理解を通

して、新しいひとつの使命をお与えになって、弟子たちから離れていかれます。その昇天の出来事は天に上げられ、雲に覆われて見えなくなるという仕方において起こりました。雲は聖書の中で神の臨在の象徴として用いられ、また天に属するものと地上のものから見えなくするものとして現れます。このようにして、弟子たちに主イエスが天に属するものであることを明らかに示したのです。

弟子たちが天を見上げていると天使が現れます。天使は天とこの世が接触する場所に現れ、特に救済の出来事の決定的なときに現れます。このときに神様の歴史への介入が明らかに語られるのです。

4. 再臨の予告

このとき弟子たちは、主イエスの昇天は最後の別れであると考えていたでしょう。ですから、主の昇天は彼らにとって、(天を見上げている時は)まだ希望ではなかったのです。しかし天使は弟子たちに、この昇天こそ、同じ有様で再び主が来られる主イエスの再臨への予告であると伝えるのです。つまり昇天は、永遠の別れではなく、主が再び来られることを待ち望むことのはじめであり、再臨につながる恵みのときであったのです。

この、昇天によって明らかにされた再臨の時期について早いか遅いか、まったく記されていません。しかし、確実に起こることとしてここに示されているのです。

この希望が示されたのですから、弟子たちは天を見上げ、悲しんでいるのをやめ、希望を持って、与えられている使命をなしていくべきなのです。そして、現在の教会は再臨に向かって力強く希望を持って歩み、弟子たちに与えられ、今私たちに与えられている使命を全うしなければならないのです。
(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問35

子どもカテキズム

問35 どこを目指して歩むのですか。

答 イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、
天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

ウェストミンスター小教理問答

問28 キリストの高い状態とはどの点にあるか。

答 キリストの高い状態とは、
彼が三日目に死人の中からよみがえられたこと、
天に昇られたこと、父なる神の右に座しておられること、
また終わりの日に世を裁くために来られることである。

参考教理問答 『ウ大教理』問56、『ハイデルベルク』問52

〈再臨〉

聖書はキリストの高い状態は復活・昇天・着座・再臨であると教えています。再臨はこの高い状態の頂点です。聖書は、一度救い主としてこの世に来られた主イエスが、同じこの世に来られると語ります。しかし、初臨の時、キリストは僕の姿をとって来られましたが、終わりの時には義を持って世を裁かれる裁き主として再びこの世に来られるのです。その裁きのために主イエスは御父よりすべての権能と裁きを与えられているのです。

〈再臨のときを目指す歩み〉

このすべての権能と裁きとを与えられた主イエスの再臨は、わたしたちにとって、最大の希望です。なぜなら、再臨の約束によって私たちは主の裁きを通して新天新地へと招きいられることを、信仰によって確証しているからです。その裁きの座でわたしたちは裁き主である主イエスによって、神様の御前に無罪を宣告されるのです。すべての人は、この再び来られる裁き主のみ前で、自らの思いと言葉と行いの申し開きをしなければならな

いのです。その時、主イエスを信じるわたしたちは、キリストにあって神様の御前に義と承認されるのです。このとき義とされる者たちは永遠の命に入れられ、主の御前から来る満ち足りた喜びと慰めを受けるのです。

わたしたちの地上の歩みは、罪の残りかすゆえに、不義に苦しめられ、罪に悩まされるものです。しかし、主イエスを信じるものとされ、神様の義を求めて生きてきた信仰者の歩みを主はかえりみてください、信仰者を祝福してくださるのです。このとき私たちの罪は完全に取り除かれ、神様の御前に正しいものとされるのです。わたしたち信仰者はこの最後の祝福のときを目指して歩いているのです。

わたしたちは主イエスが再び来られる再臨の日を目指して、そのときを待ち望みつつ喜びの希望を持って歩むことができるのです。ですから、この再臨への信仰こそ私たちの慰めとなり、励ましとなり、主に従う道を歩むことができるのです。

(春名義行)

テキスト 使徒言行録1章6節～11節
カテキズム 子どもカテキズム問35

〔単元のねらい〕

何の希望が持てないようなときにも、主が再び来てくださるという希望を持って歩むことができるように導く。

「主は再びこられる」

みんなのクラスで、お友達が転校して行ったとか、どこかから転校して来たっていうお友達はあるかな。先生は転校をしたことがあります。転校をすると、今まで仲の良かった友達と離れ離れになってしまいます。先生が転校をしたのは小学校4年生のときだったから、前の小学校にいた友達とはもう会うこともできません。転校して友達と別れ別れになってしまうのはとても悲しいことさびしいことでした。みんなはそんな経験をしているか分からないけど、もう二度と会えないと分かっているお別れをするのはとても悲しいことです。

でも学校で一日の授業が終わって、別れるときとか、一緒に遊んだりしたあと別れるときってどうかな？ 寂しいかな？ 「もう少し遊んでいたいな」とか、「もう少しおしゃべりをしていたいな」って思って寂しいなと感じることがあるかもしれません。でも、そのお友達ともう二度と会えなくなるとは思わないよね。また明日学校に行けば会えるって思うよね。そして、明日友達と何して遊ぼうかなとか、明日どんなおしゃべりをしようかな、なんて考えるんじゃないかな？ 明日、同じお友達と会えるって分かっていたら、明日になるのを楽しみに待てるんじゃないかな？

じゃあ、何で遠くに行ってもう二度と会えないお友達と別れるときは寂しかったり、悲しかったりするのにな、何で、明日会えるお友達と別れるときは、そんなに寂しくないんだらうね？ そう、それは、明日になればまた会えるからだよね。また会えるって分かっていたら、また会えるのを楽

しみにして待つことができるよね。

今日の聖書の箇所はイエス様が、弟子たちのところを離れて天国に上って行かれたときのお話です。

イエス様は私たちの罪のために十字架にかかって死んでくださり、墓に葬られて三日目によみがえられました。その後40日間弟子たちに何度も現れてくださいました。でも、復活のイエス様はずっとこの地上に弟子たちと一緒にいてくださるわけではありません。イエス様は天国に帰らなければいけないのです。

いよいよその日がやってきたのです。イエス様はその日、弟子たちに「イエス様が人間のために神様から送られた救い主であることを伝えなさい」と、弟子たちのこれからしなければならぬお仕事を与えて、天に昇っていかれました。イエス様は天に上げられて、雲に覆われて見えなくなりました。イエス様は父なる神様のみもとに帰って行ったのです。

弟子たちは、イエス様が上って行かれたところをじっと見つめています。きっと弟子たちはこのとき、イエス様とはもう二度と会うことはないだろうとがっくりと肩を落とし、悲しみの中で天を見上げていたのでしょう。

その時、突然天使が現れて「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に上げられるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と言ったのです。

〈ねらい〉

クリスマスにお生まれになり、十字架上で死なれ、三日目に生き返られて天に帰られたイエスさまは、必ずもう一度みんなのところに來られることを信じる。

〈展開例〉

三歳のヒロちゃんとおじいちゃんとはとても仲良しです。おじいちゃん大好き！というお友達いますか？ そうね、おじいちゃん好きよね。ヒロちゃんとおじいちゃんは少し離れた所に住んでいるので、時々しか会えません。

ママとスーパーに行き、ジュース買って！と言って、ママがダメって言うと、いつもなら「イヤダ、イヤダ」と泣くんですけど、「もうすぐおじいちゃんに会えるよ」と言うので泣き止んで我慢できます。それ位おじいちゃんが好きなんです。どうしてかと言うと、おじいちゃんもヒロちゃんのごとが大好きだと知っているし、ヒロちゃんのご

好きな物も知っていてお土産に持って来てくれるんです。ヒロちゃんのご好きな物は電車のおもちゃです。

イエスさまは、みんなのことをおじいちゃんよりももっともって大好きなご知ってる？ ほんとなのよ。イエスさまは、天にお帰りになるご、「また來ますよ」とおっしゃいました。イエスさまはお約束を必ず守られるお方です。だから必ずいらっしゃいます。そのご、〇〇ちゃん大好き！とご言ひて抱いてくださるでしょう。「イエスさまを信じていい子だったね」とご誉めて頭を撫でてくださいます。ずっとイエスさまを信じるごでいませうね。

〈お祈り〉

ちちなるかみさま、イエスさまがまたきてくださるご、ほんとにありがとうございます。みんなでごまっています。大好きなイエスさまのおなまえによって、アーメン。

☆折り紙で花を折ろう！☆

◀ お花 ▶

用意するもの：折り紙 はさみ のり
セロテープ モール



① 折り紙を2つ折りから4つ折りにする



② さらに半分に折る



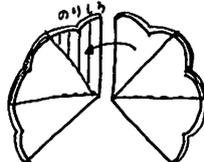
③ 切り取り線をかき



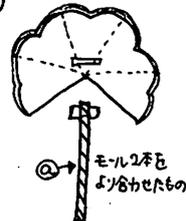
④ 袋を開き折りたたむ



⑤ 2組作って糊で貼り合わせます



⑥ 口にぬきテープをはる



○入園、年中・年長への進級と、それぞれに環境が変化している時期です。どういう心境でいるか、何か問題を抱えていないか、生徒のために祈るためにも一人一人に様子をさりげなく聞いてみましょう。そして自分への進級のお祝いにお花を作りましょう。ひとりにひとつでも何個でも自由に。

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ①弟子たちの前で、イエスさまは何に覆われた？
(→雲)
- ②雲に覆われて、どこに行かれた？(→天)
- ③もうイエスさまにお会いすることはできないのでしょうか？(→できる)
- ④どうして会うことができる？(→イエスさまがもう一度来てくださるから)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

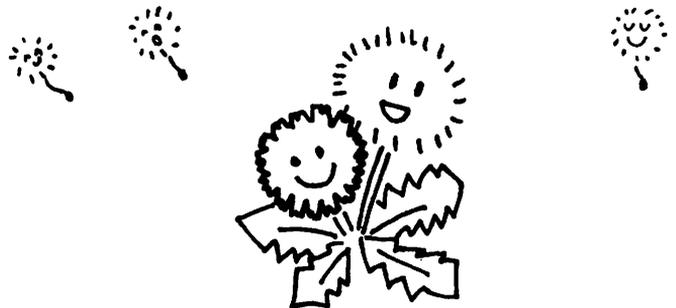
- ①イエスさまがもう一度地上に来られることを何という？(→再臨・さいりん)
- ②イエスさまは何をするために来られるのですか？(→さばくため。信じる者には救いを与えるため)
- ③イエスさまを信じる者にとっては、再臨はうれしいことですか？(→うれしいこと)

〈考えてみよう〉

お友達と一緒に会って遊ぶ約束をすることがあるでしょう。でも、その約束を破ってしまったことはないでしょうか。あるいは、約束を破られたことはないでしょうか。会えると思っていたのに会えないのはさびしいことです。でも、イエスさまは決して約束を破られないお方です。イエスさまは、もう一度私たちに会いに来ると約束してくださいました。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまが私たちのところに来てくださるという約束を感謝します。イエスさまにお会いできる日を楽しみにして過ごすことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

キリスト再臨が、救いの完成の時であること、従って期待して待つことのできる喜びの時であることを明示したい。主イエスに結ばれた者にとって、聖書の教える終末が、破壊的なイメージで考える終末とは違う事を生徒たちが知ることは重要なことであろう。そのためにもキリスト再臨の約束を心に刻むときとしたい。

〈展開例〉

考えてみよう。

- イエス様が天に昇られたとき、弟子たちは天を見上げていました。イエス様は見えなくなりましたね。そのとき、御使いが弟子たちに話した約束があります。どんな約束だったでしょう。

「あなたがたから離れて（天）に上げられたイエスは、（天に行かれるのを）あなたがたが見たのと（同じ）有様で、（またおいでになる）」。

- 暗唱聖句を覚えよう。

使徒言行録1章11節後半。

- 約束された日は、いつ来るのでしょうか？
（いつ来るかは私たちには知らされていないから分からない。）マタイ福音書25章13節。
- 私達にとってキリスト再臨は、どんな日になるのでしょうか。
- ①再臨は審判の時でもある。だから私達にとっ

て恐ろしい日。

- ②何も起こらないから意味のない日。

- ③私達の救いが完成する日。イエス様にお会いし祝福されて迎え入れられるとき。神様を直接見て喜ぶ。私達の考えが及ばないくらい大きな喜びを味わう。

（もちろん正解は③、ウエストミンスター大教理問答問90）。

- 私達は再臨をどのように待てば良いのでしょうか。

いつ来るかは分からない。でも神様が約束されたことだから必ず来る。再臨は、私達の救いが完成するときです。苦しみはなくなり、イエス様にお会いして祝福をいただくのだから、目を覚まして楽しみに待つ。神様を賛美し、礼拝し、神様に祈りながら、日々の生活をきちんとして期待して待つ。マタイによる福音書24章42節。

〈祈り〉

主イエス様、あなたが天にあげられたのを弟子たちが見たのと同じように、またおいでになることを信じます。そのとき私達は、イエス様から救われていることがもっとはっきり分かり、祝福していただくことを信じます。だからイエス様にお会いする再臨を期待して待ちます。主イエス様、どうぞ来て下さい。

【目標】

キリストの再臨がなぜ私たちの目標であり、希望であるのかを考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→再臨の祝福を先取りして掴んでおく。当該箇所に加えてヨハネの黙示録21章3節～4節を生徒と読む。

【ポイント】

再臨時に与えられる祝福を理解しておくことなしには、それを目標とすることは難しい。その時何が起こるのかを御言葉から聞き知ることが、それを目標、希望として生きる際に重要になる。再臨の時、今は姿が見えない主イエスと私たちは再会する。その時にはもう涙は必要ない。主イエスの指が涙をぬぐってくださる。悲しみも嘆きも労苦も、あの避けがたい死もそこにはない。永遠と思われる死は永遠ではなく、命こそが永遠に続く。私たちは刻一刻とその時に近づいている。新約聖書最後の言葉は、「主は近い」という言葉である。その日は確実に近い。しかし一日一日を将来

に向かって生きることは、一般には必ずしも希望のあることとは捉えられていない。それは不確定な未知の不安の中への突入であり、老人にとっては衰えの歴史である。子どもにも子どもなりの、明日に希望が持てない状況があるかもしれない。けれども聖書は、私たちが夕暮れに向かうのではなく、夜明けに向かっていると語っている。私たちが今まで経験したことのないような夜明けがキリストの再臨と共に今来ようとしているのである。朝は近い。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「再臨」とは？それを生徒と分かち合う。

Q. キリストの再臨が待ち遠しいですか？そうは思いませんか？それはなぜですか？

Q. もし再臨がなかったら、どうなってしまおうでしょうか？考えてみましょう。

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 再臨の時、あなたにはどんな素晴らしいことが起こると思いますか？何か楽しみに思えることがありますか？

⑤祈り

私たち一人一人に確かに与えられている再臨の約束への感謝。その日を楽しみに待ちながら歩めるように。

テキスト マタイによる福音書25章1～13節

主の再臨に備えるキリスト者に求められるのは、「忠実で賢い僕 (24:45)」の姿です。特に「賢い」準備について深めて語っているのが、この十人のおとめのたとえなのです。

1. 婚礼のたとえと再臨を待つ教会

当時の婚礼の祝宴についての譬えによってこの教えがなされています。当時のユダヤの婚礼は花婿がまず身支度を整えて、それから花嫁のところへ友人たちと共にいきます。その花婿をまず迎えるのが、花嫁の友人である「おとめ」なのです。彼女たちはいつ花婿が来ても良いように、備えて待っているのです。しかし、花婿がいつ来るかはわからないのです。

この花婿はキリストを示し、おとめは教会を示しているのでしょう。そして、神の国自体は祝宴にたとえられるでしょう。その花婿が到着して、祝宴が開かれるのを待っているのが、この譬えの十人のおとめなのです。言い換えれば、キリストの再臨と神の国の到来を待っているのが教会である十人のおとめなのです。

ここで十人を五人ずつに分けていますが、それを半分の信仰者は救いから落ちるなどという読みをしてはいけません。これは、誰もが緊張を持ってよく自己吟味をして備えるという意味で用いられている数字なのです。

2. 賢いものの備えと愚かな者

ここで問題とされる備えは、肉体的な意味で「目を覚ましている」ということではありません。このおとめたちは真夜中まで待たされていたのです。十人のおとめはいずれも花婿の到着があまりにも遅いために眠ってしまいます。

花嫁の友人たちが眠っているときに、不意に花婿が到着し、先ぶれの花婿の友人たちが「花婿だ。迎えに出なさい」との叫び声をあげます。この重大な瞬間を迎えたとき愚かなおとめたちは、油の用意をしてなかったのです。一方賢いおとめたちは、ともし火と共に予備の油を持っていたのです。賢いおとめたちは花婿が来るための、慎重な備えをしていたのです。これこそが、霊的な意味で「目を覚ましている」ことです。

3. ともし火と油

ともし火は、おとめたちに花嫁の代理として花婿を迎えるのに必要な資格を与えるものです。それが、他の女たちと出迎えるおとめたちを区別する徴となるのです。つまり、ともし火はキリスト者を他の人々から区別する徴としての信仰生活をさしているのでしょう。それに対して油はともし火を燃やす燃料です。信仰の火を燃やす力はともし火そのもの、つまり人間にはありません。信仰のともし火を燃やす油はいうまでもなく、聖霊なのです。

この信仰と聖霊はそれぞれ自分の分として与えられているものです。ですから聖霊は他者に貸したり、分けたりすることできるものではないのです。終わりのときが来てから油が切れていることに気がついてももう遅いのです。その時がいつ来るか分からないのですから、まだ十分に間に合う昼間の内に油を手に入れていなければいけないのです。つまり、今という時のうちに、教会生活と信仰生活に励む中で、聖霊という油をいただき、信仰の炎を消さないように備えることが勧められているのです。最後のとき、再臨のときではもう遅すぎるのです。 (春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム 問35

子どもカテキズム

問35 どこを目指して歩むのですか。

答 イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、
天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

ウェストミンスター小教理問答

問36 この世で義とすること、子とすること、聖とすることに伴い、
あるいはそれから出てくる祝福とはなんですか。

答 この世で義とすること、子とすること、聖とすることに伴い、
あるいはそれから出てくる祝福は、
神の愛の確信、良心の平和、聖霊による喜び、恵みの増加、
そして、それらの内にあって終わりまで堅く保たれることである。

参考教理問答 『ウ大教理』79～83、『ウ信仰告白』第17章、『ハイデルベルク』52

〈聖化の途上にある私たち〉

聖化の歩みについて『子どもカテキズム』問33
で学びました。しかし、聖化はこの世にある間は
未完成です。私たちのどの部分にも罪の残りがす
が残り続けるのです。ですから聖化は、その生涯
において追求し続けるべき問題であり、また、そ
の完成を目指すべき目標であるのです。この聖化
が完成される時は最後の時なのです。

〈堅忍の恵み〉

先回のところで、神様の義を求めて生きてきた
信仰者の歩みを主はかえりみてくださることを学び
ました。主が再び来られるとき、私たちは主のさ
ばきの前に立たせられ、一人一人神様の御前に申
し開きをしなければなりません。わたしたちは神
様から神様の義をよく求めて歩んだ信仰者として
認めていただかなければならないのです。

わたしたちの地上の歩みは、神様に義とされる
にふさわしいものでしょうか。神様の義をよく求
めたものと言いうるものでしょうか。私たちは神
様の御前に正しく歩むことができないのであり、
神様の義を十分に求めて生きてきたとは言いがた
いものです。神様から離れることなく、完全に神
様に従ったものとは言えません。もしこの裁きに
おいて、自分の行いが求められるのであれば、神
様の御前に義とされることはありえないのです。

私たちが最後まで主に結ばれて、神様に従った
ものとみなされるのは、私たちの力によるのでは
なく、神様の恵みによるのです。神様はキリスト
にあって救いに選ばれた聖徒らを、必ず終わりの
日まで堅く保たれるのです。

人間の救いの確かさは人間の行いによるのでは
なく、神様の一方的な選びと、主イエスの選びの
民のために成し遂げてくださった救いのみ業によ
るのです。サタンとこの世の誘惑、自分のうちに
残っている腐敗の優勢さのゆえに信仰の確信が弱
まる時もあります。しかし、神様の永遠の選び
の確かさは、私たち人間の弱さ、不十分さによ
って揺らぐものではありません。私たちの不十分
さがあってもなお、選びと恵みの契約ゆえに、私
たちには主によって堅忍が与えられ、その道を歩
み通すことができるようにされるのです。それゆ
えに、再臨のときは私たちにあって、喜びと待望
のときです。しかし、私たちはただ何もせずにそ
のときを待つのではなく、キリスト者としてふさ
わしく歩みをしなければなりません。

この再臨のときがいつ来るかは私たちに知ら
されていません。ですから、主の与えてくださ
る恵みと確信の中でただ安心してはならず、主
がいつ来てくださっても良いように忠実な僕と
していつも目を覚まして備えるのです。(春名義行)

テキスト マタイによる福音書25章1～13節
カテキズム 子どもカテキズム問35

〔単元のねらい〕

再臨のときを待ち望み、聖霊によって信仰の炎を燃やされて、常に備えることへと導く。

「主が来られる時に備える」

みんなは結婚式に出席したり、結婚式を見たりしたことがあるかな？ もしその結婚式に花嫁さんとか、花婿さんが来なかったら、結婚式はできないよね。だから、花嫁さんとか花婿さんが来るまで、待たないでだめだよ。

今日の聖書の箇所はそんな結婚式の話です。昔、イエス様がおられたユダヤの国の結婚式は、僕たちわたしたちが知っている結婚式とはちょっと違っていました。ユダヤの国の結婚式はたくさんの方が来れるように、普通夕方から始められたそうです。花婿さんが自分の家で結婚式のためにきれいな服を着て準備をします。その準備が終わったら、花婿さんの男の友達と一緒に花嫁さんのおうちに行きます。それは花嫁さんを迎えに行くためなんです。花嫁さんは花婿さんがいつ来てもいのようにやっぱりきれいな服を着て、準備をしまっています。その花嫁さんと一緒に待っているのが、花嫁さんの友達なのです。花婿さんが花嫁さんの家に着くと花婿さんの友達が大きな声で、「花婿が到着したぞ！」と叫びます。その声を聞いて花嫁さんの友達が灯し火を持って出て行って最初に花婿さんを迎えるのです。そして、花婿さんは花嫁さんを連れて自分の家に行って結婚のお祝いのパーティーをします。このとき花嫁さんの友達は自分の持っている灯し火で道を照らすのです。花嫁さんの友達はとても大事な役目を持っていたんです。そんな花嫁さんの友達が今日の聖書箇所の主人公です。

ここに「おとめ」と呼ばれている十人の花嫁さんの友達がいます。この花嫁さんの友達は花婿さ

んが到着するのを待っています。でも、待っても、待ってもぜんぜん来ません。最初はおしゃべりをしたりして楽しく待っていたかもしれませぬ。でも、花婿さんはいつ到着するかは分かりません。今だったら、携帯電話とかもあるから、電話やメールで、何時ごろになるよって連絡ができたかもしれません。でも今から二千年以上も前の話です。携帯どころか普通の電話すらなかった時代です。連絡もできないのですが、当時はこんなことは普通だったみたいです。でも、遅れても普通は一時間も待てば来るようなのですが、この花婿さんは一時間待っても二時間待っても着きません。花嫁さんの友達は待ちくたびれて、一人、また一人と眠っていき、とうとう十人とも眠ってしまったのです。

どれだけ眠っていたでしょうか、真夜中になって、ようやく花婿さんが到着しました。そして、「花婿が到着したぞ！」と叫び声が聞こえます。花嫁さんの友達は慌てて灯し火の準備をします。

夕方ごろから花婿さんは来るはずだったから、きっとみんな灯し火には油が入ってあったはずですが、でも、夕方ごろから待っていたから、灯し火をずっと点けていたことでしょう。花嫁さんの友達が持っていた灯し火の油はだいぶんと少なくなっていたのです。灯し火は消えてしまっていました。

でもそのうちの五人は灯し火の油の予備をちゃんと持っていました。でも残りの五人は油の予備を用意してなかったんです。そこで、油を用意していなかった五人はほかの五人の人に、「私たちの灯し火の油が少なくなつて、火が消えそうです。

油を少し分けてください」と言いました。でも油の用意をしていた五人は「分けてあげるほどはありません。自分の分を買ってきなさい」と言うのです。これは意地悪ではないんです。今みたいにコンビニなんてないから、この時代夜中にやっている店なんて普通はありません。でもこんなお祝いがあるときだけは夜中も店を開いてくれる、そんなお店があったそうです。だから、買いに行くことはできたのです。そこで、五人は油を買いに出かけます。でも油を買いに行っている間におうちの門は閉められてしまい、もう中に入れてもらえなかったのです。

これは、イエス様のなさったたとえ話です。たとえ話というのは、何かを説明するときに誰でも知っている出来事とかを使って説明するための話です。つまり、ここでもイエス様は何かを説明しようとしているのです。それは、イエス様がもう一度来られる再臨の時に説明しているのです。

このところで、花婿さんはもう一度この世に来てくださるイエス様を表しています。そして、花嫁さんは教会です。そして再臨を待っている姿が花嫁さんの友達です。

イエス様は「その日、その時は、誰も知らない」とおっしゃっておられます。つまり、イエス様がもう一度来られる日がいつなのか、わたしたちには分からないのです。ただ神様だけがご存知なのです。その神様がイエス様はもう一度この地上に来られますと約束してくださっています。ですから、わたしたちはイエス様がもう一度来てくださ

ることだけしか知らないのです。イエス様がもう一度来られるときは神様だけがご存知のことで、わたし達が知る必要のないことなのです。

でもイエス様がもう一度来られるとは言われているけれど、ちっとも来られないからといって安心してはいけません。イエス様は必ず来られるのです。それは明日かもしれないし、何十年、何百年先かもしれません。もし明日イエス様がもう一度来られるときがきたとして、みんなに準備ができてないから、もうちょっと待ってくださいなんてことは言えないのです。

イエス様が来られるときになって油を用意してももう手遅れなんです。灯し火をもっている人だけがイエス様をお迎えすることができるのです。この灯し火はイエス様を信じる信仰です。その信仰の火を燃やすには、本当に火を燃やすのに必要な燃料がいます。信仰の火を燃やす燃料は神様が与えてくださる聖霊です。わたしたちは聖霊をいつもいただき、信仰の炎を燃やし続けなければならないのです。この聖霊は人にあげたりできるものではありません。みんな神様から一人一人に与えられるものなのです。だから、そのときが来て慌てても、もう手に入れることはできないのです。

わたしたちはそのときがいつ来てもいいように御言葉を聴き、聖霊なる神様という燃料を与えられてイエス様がもう一度来てくださるときに備えましょう。

(春名義行)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書25章13節

だから、目を覚ましていなさい。

あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。

〈ねらい〉

主の再臨を待ち望む生活を励ます。

①CS への出席、②み旨を知り、従うことへ励まそう。

〈展開例〉

皆さんは、一人でお留守番をしたことがありますか？ お兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒になら、したことがあるお友達もいるかもしれませんね。そんな時お母さんが「帰って来るまでにおもちゃを片づけておくのよ」とか、「おやつを食べたあとコップやお皿を流しに運んでおいてね」とか言ってお出かけすることがあると思います。そのほかいろいろお約束をすることもあるかもしれませんね。でも遊んでいるうちにすっかり忘れちゃって、お母さんが帰って来た時、何にもしてなかったらどうでしょう？ 「お片づけだって、お約束だってできるのがっかり」とお母さんは思うにちが

いありません。

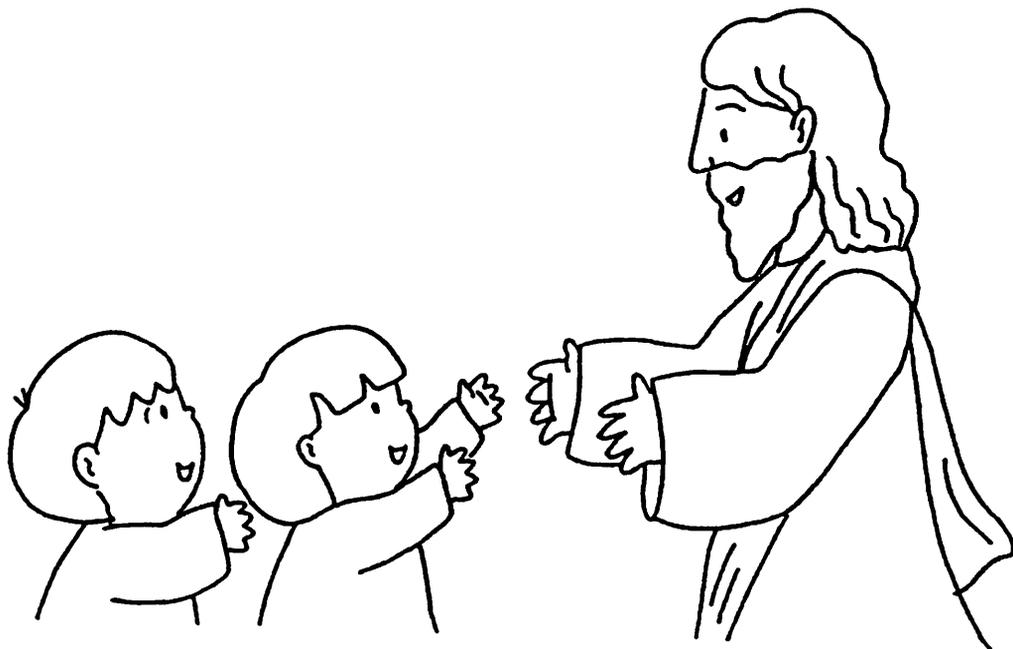
イエスさまは、またみんなの所に来られますよと、この前おはなし聞きましたね。必ずこられます。そのとき、「ちゃんとお約束守っていい子でしたか？」ってイエスさまにたずねられたらどうしましょう。「えっ、どんなお約束だったっけ？」、ということになったら、イエスさまはがっかりなさいます。教会にお休みしないで来て、聖書のおことばを聞きましょう。そしてお祈りをします。そうすれば、「はい、お約束を守ってイエスさまをお待ちしていました！」って言えますよ。

〈お祈り〉

ちちなるかみさま、イエスさまが来られる時まで、かみさまのこと大好きな子でいられますように。イエスさまのおなまえによっておいのりします。アーメン。

☆塗り絵をしよう！☆

○適当な大きさにコピーし、塗り絵をしましょう。



〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① ともし火を持った十人のおとめは誰を待っていますか？ (→花婿)
- ② 真夜中に花婿が来たとき、みんなともし火の用意ができましたか？ (→できない人がいた)
- ③ 何がなかったのですか？ (→油)
- ④ 油の用意をしていたおとめたちはどうなりましたか？ (→花婿と婚宴の席に入った)
- ⑤ 花婿、花嫁とおとめ、油とは何のことですか？ (→イエスさま、教会、聖霊)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① イエスさまがもう一度地上に来られることを何という？ (再臨・→さいりん)
- ② 私たちはそのときを何もしないで待っているだけ？ (→いいえ)
- ③ 再臨のときまで、どのようにして過ごす？ (→天の国を目指して、歌いつつ歩む)
- ④ それは例えばどういうこと？ (→神さまを礼拝すること)

〈考えてみよう〉

お友達がもうすぐ家に遊びに来るといとき、どうするでしょうか。何をして遊ぶか考える？ お菓子を用意しておく？ 部屋をきれいに片づけておく？ いろんな用意があります。それでは、イエスさまをお迎えするときの一番大切な用意は何でしょうか。それは、イエスさまを信じることで、そして、教会で神さまを礼拝しながら待つことです。

〈共に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまが来られるときを、私たちは楽しみに待っています。どうぞそのときまで、私たちが教会で神さまを礼拝することができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

キリスト再臨が、いつ来てもいいように、信仰のともし火をともし続けること。そのために教会生活を続けることを勧める。

〈展開例〉

考えてみよう。

- 花婿を迎えることができなかった五人の女の私たちは、何がいけなかったのでしょうか。

(花婿がいつ来てもよいように、予備の油を用意していなかったこと。2節。)

- このたとえで、花婿が来る時は、何を表していますか。

(キリスト再臨の時)

- イエス様はいつおいでになるのでしょうか。すぐ来るのでしょうか。それともずっと先なのでしょうか。あなたには分かりますか。

(わからない。13節)。

- 私達はイエス様がいつ来てもいいように、どうしたらよいのでしょうか。

- ①いつ来るかわからない。今すぐ来るかもしれない。だから今やっている事は意味がない。落ち着いている場合ではない。学校も、勉強も、習い事も、みんな止めてもかまわない。

- ②いつ来るかわからないのだから、考えても仕方がない。だから考えないことにする。今は楽しければよい。

- ③信仰の火を燃やす油は聖霊なる神様です。聖霊なる神様が、私達の信仰を守って下さるよう祈る。そして、日曜日には教会に来て礼拝し、お祈りや賛美をする。毎日の生活をきちんとしながら、イエス様の再臨のことをいつも忘れないようにする。

- ①でも②でもなく、③のように過ごしましょう。

- 暗唱聖句を覚えよう。声を出して読んで覚えよう。

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」マタイ福音書25章13節。

〈祈り〉

天の神様、イエス様がいつおいでになってもいいように、私達がイエス様のお約束を覚えていることができるようにして下さい。いつも主日礼拝を守り、教会のお友達と一緒に説教を聞き、お祈りをし、賛美をして、イエス様をお迎えする心でいることができるようにして下さい。聖霊なる神様、私達の信仰のともし火を、いつも燃やし続けて下さい。

【目標】

キリストの再臨をどのようにして待つべきなのかを考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書25章1節～13節を生徒と読む。

【ポイント】

目を覚ましているということ、ともし火をともし続けるとはということなのか？ おどめたちは、夜更けに皆眠り込んでしまった。目を覚ましていることとは、不眠不休でいることではない。そこには安心して眠れる平安もある。大切なのは、時が来た時に用意が整っているかどうかということである。用意すべき、ともし火を燃やす燃料としての油とは何か？ それは聖霊と解することもできるが、この御言葉は明言を避けている。ここで何より大切なのは、「用意」である。用意ができていないかが決定的な問題である。再臨への用意をもって、終わりの花婿との婚

宴の席での希望を臨みつつ今を歩むこと。そのように「待つ」というこの信仰的姿勢が私たちの信仰生活の根本的に重要なものとして存在することを覚えたい。

③生徒と一緒に考える

→嫌な事に対しては待つこともまた苦痛だが、楽しい事柄を待つことは嬉しいことであり喜びである。地震を待つのは嫌なことだが、婚宴を待つことは楽しいことであり、何日も前から服を用意したりして準備をするはずである。まず教師自身にとっての「主の再臨を待つ」とはどういうことなのか？ それを生徒と分かち合う。

Q. あなたが何かに対して備えていることはありますか？（例えば地震、受験など）

Q. 具体的にはどんな準備をしていますか？それはなぜですか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 主イエスを迎えるために必要な準備とは、あなたにとって何をすることですか？

⑤祈り

私たち一人一人に期待して待つべき恵みが確かに与えられていることへの感謝。主を待つことのできる力と支えとが豊かに与えられるように。

テキスト ルカによる福音書23章39～43節

〈十字架につけられるべき罪人の姿〉

主イエスと一緒に十字架につけられた犯罪人の姿は、たいへん印象的です。ルカ福音書を除く他の福音書は、犯罪人二人がともに主イエスをあざけりののしったと語っています。彼らは、「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と言って主イエスをののしったのであり、その姿が主イエスをあざけったユダヤ人またローマの兵士たちの姿に重ね合わせられています。

それは、ユダヤ人をはじめとするすべての人が自分の罪の報いを受けて十字架につけられるべきであるということです。十字架につけられた二人の犯罪人は、私たちすべての人間の代表だと言ってよいでしょう。主イエスをまことの神の子と認めず、救い主を拒否する私たち罪人です。ルカ福音書に登場するもう一人の犯罪人が、「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ」(41)と語ったとおりなのです。

〈もう一人の犯罪人の信仰〉

ルカ福音書は、犯罪人の一人を主イエスをあざける罪人として描き、もう一人を主イエスに希望を見いだした人物として描きます。後者の姿はすべての信仰者の代表であると言えるでしょう。彼は、罪を犯しながらも自らが罪人であることを自覚し、良心の責め苦にさいなまれていたのかもしれない。悔いる思いがあり、処刑されることを覚悟していたのでしょう。その悔いる心が与えられている中で、彼は、神の子・救い主と呼ばれる主イエスに希望を見いだしました。ここで彼が、どれほど主イエスのことをきちんと知っていたか、いや、ほとんど何も知らなかったでしょう。しかし、自分の罪を悟り、ただこのお方に希望を見いだしました。それも、「イエスよ、あなたの御国においてになる時には、わたしを思い出してください」と言ったように、主イエスの心に留めていただくことに希望を見いだしました。主イエスは、

その信仰を喜ばれたのでしょう。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」とおっしゃって、死に際して、豊かな祝福を約束されました。

〈主イエスと共にいる祝福〉

主題との関連でこの御言葉から学ぶべきことは、死においても、なお私たち、主イエスを信じる者には希望があるということです。

一つには、聖書においては、死が終わりではありません。死とは、地上の肉体の命が終わりを迎える時ではありますが、聖書においては復活が約束され、とりわけ信仰者は朽ちない体に、永遠の命に復活させられることが約束されています。

もう一つは、主イエスが「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」とおっしゃった通り、死の力は、決して主イエスと私たちの結びつきを断ち切ることはできないということです。主イエスは、死に勝利されて復活されたお方です。そうであるならば、死の力も決して私たち信仰者を主イエスから引き離すことはできません(ローマ8:37-39)。主イエスが御心に留めてくださるならば、たとえ死んだとしても、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」のです。そして、主イエス・キリストが共にいてくださることこそ、私たちの神の御国であり楽園(パラダイス)なのです。

「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにもいます」(詩編139:7-8)。私たちの「死」とは、決して肉体の死ばかりではありません。人生においては、陰府に投げ込まれるような嘆きと苦しみを味わうことがあるのです。「死」はその究極的なものと言えるでしょう。しかし、信仰者は、「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない」(詩編23:4)という祝福を与えられているのです。(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問36

子どもカテキズム

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。

私たちの体はイエスさまと共にあり、

イエスさまがよみがえられたように

再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。

死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。

救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができます。

証誦聖句 ルカ23：42-43、ローマ6：4、フィリピ1：21-23、黙示録14：13

参考教理問答 『ジュネーブ』63-64、『ハイデルベルク』1,42,57

『ウ告白』32：1、『ウ大教理』85-86、『ウ小教理』37

参考文献 「終末の希望についての信仰の宣言」(60周年宣言。現在、作成作業中)

第一部「人生の目的」に続く第二部「信仰の道」の最後を飾る本問答は、「信仰の道」のゴールともいうべき救いの完成を扱っています。内容豊かな問答ですので、死の時の祝福と復活の時の祝福と、二回に分けて学びます。

1. 死は終わりではない

死は終わりではない。聖書ははっきりと死後の世界の存在を指し示しています。そもそも、古今東西、死後の世界を前提しない宗教などないと言ええるかもしれません。なぜなら、人間という限られた存在を超えた世界や存在を信じる以上、人間が認知できない領域を前提するのは当然だからです。永遠から永遠におられる神によって造られた私たちは、死後においてもなお神の御支配のもとにおかれているのです。

逆に、もし死が終わりであるなら、私たちの生もまた無意味になるでしょう。ちょうど未来があるからこそ過去に意味があるように、死後の世界があるからこそこの世の生に意味が与えられるからです。問題は、そのようなひと続きの生と死が、神の御前にどのような意味を持っているかということです。もし神の呪いと刑罰にしか値しない人生だとしたら、何と悲惨なことでしょう。

2. イエスさまと私たちは一つ

しかし、神は私たちを愛してくださった！ 私たちが神を愛したのではありません。神が私たちを愛してくださって御自分の命と引き換えに、刑罰としての死を死んでくださいました(ヨハネ一4：10)。ですから、このキリストの内にある者を神の愛から引き離すことは、いかなる被造物にも許されていません(ローマ8：38-39)。

ひとたびキリストに結び合わされた者は、死の瞬間でさえキリストに結び合わされたままである。これが信仰者の死であり、これこそが私たちの慰めであり希望なのです。

3. 労苦を解かれて

主に愛され主を愛した魂は、死の時、地上の一切の罪や汚れ・痛みや苦しみから解放され、天上のものにふさわしく聖められます。そうして、直ちにキリストの御許へと受け入れられるのです。行く当てもなく彷徨うではありません。供養する必要もありません。キリスト者の死は、天国の栄光への門出また凱旋の時です。残された者は、しばしの別れを悲しみつつも、彼らが召されて行った天へと心を高く上げるのです。主に結ばれて死ぬ人は、何と幸いなことでしょう！(吉田 隆)

テキスト ルカによる福音書23章39～43節
カテキズム 子どもカテキズム問36

(単元のねらい)

死を恐れるのは、何より罪責感の問題でしょう。主イエスが私たちの死の恐れを取り除くために十字架に架かって下さったこと、そして、そこに込められている主の愛を覚えることを第一のねらいとしたい。第二に、どんな罪人も救っていただけること、信じる者は誰一人例外がないことも覚えたい。

「主に結ばれて死ぬ人は幸いである」

今日は、皆に一つの質問をすることから始めたいと思います。その質問とはこれです。生きている人が、必ず皆例外なしに迎えなくてはならない時があります。それはなんでしょうか？

そう、それは「死」の時です。いつかは分りません。しかし、主イエスの再臨が先でない限り、誰もが皆「死」の時を迎えます。どんなに威張っている人でも避けられません。

死の話なんか嫌だよ、悲しいし、恐ろしいし、不安になるじゃないか、と思っている人もいることでしょう。

実は、聖書には「人間にはただ一度死ぬことと、その後には裁きを受けることが定まっている」(ヘブライ9:27)、と書かれています。やがて、ごまかしのきかない最も正しい審判者である神様の御前に一人立ち、申し開きをしなくなりません。

その時、告発者は訴えるでしょう。「彼は、叱られることから逃げるため47回嘘をつきました。助ける力がありながら、困っている人を見捨てたことが35回あります。さらに……」。何時まで経っても終わりません。こちらは心臓が破裂してしまうような思いで聞かなくてはなりません。これでは、死ぬのが恐いのも無理はありません。

けれども、安心して下さい。誰であってもイエス様を信じるなら、死も恐ろしいものではなくなるからです。イエス様は、死の恐れから私たちに救い出すために来て下さったのです。今日の聖書の箇所はそれをはっきり教えています。

では、見てゆきましょう。

この時、イエス様は十字架に架けられています。釘打たれた両手から血が滴り落ち、気が遠くなるような激しい痛みを負っておられます。苦しみ悶えつつ数時間後には確実に死がやって来ます。イエス様は祈られました。けれども、自分自身のための祈りではありません。イエス様はこう祈られたのです。「父よ、彼らをお教し下さい。彼らは何をしているのか自分で分らないのです」(23:34)。まことの救い主に嘲りやののしりの言葉をぶつけ恥じることもない、どうしようもない罪人の私たちのために罪の赦しを祈っておられるのです。

ヘブル書に「血を流すことなしには罪の赦しはあり得ない」(9:22)とあります。まことの神様は完全なお方ですから、罪をうやむやにすることはおできになりません。犯された罪に対しては、その責任・償いをきっちり要求されます。それゆえ、罪が赦されるためには血が注ぎ出されなくてはなりません。聖書では、レビ記17章などにあるように、血は命を表します。それゆえ、血を流すことは命を与えることと同一のことなのです。傷も汚れもない完全な命が代価として支払われる時はじめて、完全な赦しをもたらされるのです。

イエス様は、この時ただ祈られただけではありません。血を流し命を削りつつ祈られました。「父よ、わたしは彼らの罪の償いのため、わたしの命を捧げます。ですから、御約束の通り、わたしの

流す血のゆえに、どうぞ彼らを赦して下さい!」。どこに、他人を救うために身代わりになって死のうと考える人がいるのでしょうか。しかし、イエス様はあなたを救うために十字架に架かって死んで下さったのです(ローマ5:6-11)。そして復活によって、この祈りが成就していることを証して下さいなのです。

さてこの時、二人の犯罪人も十字架につけられました。一人は、主をののしり「我々を救え」と命じます。彼はへりくだって懇願するということを知りません。

しかし、もう一方の犯罪人は、これとは対照的でした。彼はへりくだって懇願して言います「イエス様、あなたの御国においでになる時には、わたしを思い出して下さい。」

彼は主イエスに思い出してもらえるような善いことをして生きて来たのでしょうか。いいえ違います。彼は自ら告白しています。「我々は自分のやったことの報いを受けているのだから当然だ」。十字架につけられる程の極悪人ですから相当の悪事を重ねて来たのです。彼のせいで私の人生は滅茶苦茶にされた、あいつだけは絶対に赦せないと思っている人が何人もいます。さらにまた、彼はこれから先、生きて何か善いことをするという事も出来ません。地上の生涯に残された時は、もう後わずかです。そして、そのわずかの時を十字架の上で苦しみ悶えつつ死を待つという以外に使いようがありません。どんなに恐れ、どんなに悔やんだとしても、神の怒りと罰以外与えられるはずのものは何もありません。

しかし、生涯の最期、彼は祈られている自分、見捨てられていない自分を発見したのです。イエス様が「父よ、彼らを赦し給え」と祈って下さったその祈りは、私のためでもあることが分かった

のです。それゆえ、彼は憐れみを請い求めました。何も差し出せるものはありません。しかし、どうか私を思い出して欲しいと彼は願いました。

イエス様は何と答えられたのでしょうか。「君はダメだよ」ではありません。「まことにあなたに告げよう。あなたは今日わたしと共に樂園にいます。」と答えられたのです。何と信じがたい、そして何と赦しと恵みに溢れる約束でしょうか。彼は見捨てられるべき罪人ではありません。彼はイエス様を信じて、その赦しと憐れみにすがったゆえに、罪赦された義人、誉れある天の御国の一員となったのです。主は恐れと絶望に代えて慰めと永遠の希望を与えて下さったのです。彼は十字架の上で苦しみ悶えつつも魂は喜びで踊っていたに違いありません。

このように、主イエス様に結ばれた者は幸いです。死の時、彼の魂は全く聖められてイエス様のもとに招き入れてもらえるからです。

さて、やがて天の法廷に立つ時、十字架につけられていた彼は山と積まれた罪状書きを見るのかも知れません。しかし、彼は幸いです。なぜなら、彼は一人ではなくイエス様が共に立って、こう言って下さるからです。「神よ、わたしの釘跡の残る手を御覧下さい。わたしはこの友のために十字架に架かりました。彼の罪の償いは全部わたしが済ませました。彼が負うべき咎は一つもありません」。こうして、イエス様を信じる者は公に無罪と宣言され、義の衣を着せていただけるのです(ローマ8:34)。

ちょうど、羊飼いに見つけ出された、あの99匹にまさる迷い出た一匹の羊のように、大喜びで御国に迎えてもらえるのです(ルカ15:1-7)。この週も、イエス様と共に進みましょう。(小野田雄二)

[今週の暗唱聖句]

ルカによる福音書23章43節

するとイエスは、「はっきり言っておくが、
あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。

〈ねらい〉

主イエスを信じることにより、どんな時（死の時）にも、イエス様が共にいて下さるといふ確信と希望が与えられる。

〈展開例〉

私も小さい時から教会学校に行っていました。そのころ聞いたお話を、50年もたった今でも忘れられません。

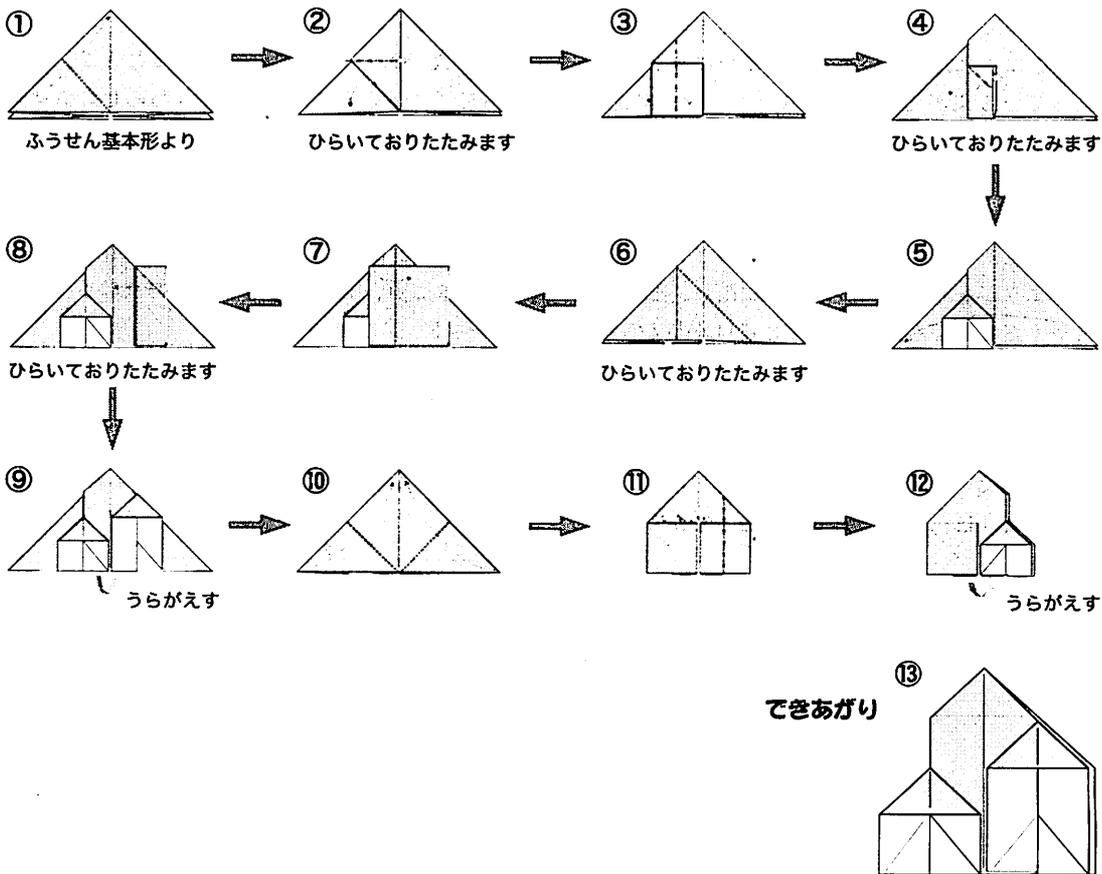
一人の男の子がおりました。元気だった時は休まず教会学校に通っていました。でもその男の子は重い病氣にかかってしまいました。両親はいろんな病院に連れて行き、偉いお医者さんにかかり、できるかぎりの治療をしましたが、直りません。

そして、とうとう死の時が来ました。男の子は苦しい息の中から「お父さん、お母さん、僕は死ぬことは怖くないよ。イエス様がいつも一緒にいて守って下さるから。教会学校でイエス様のお話を聞いてから僕はイエス様が大好きになったよ。」

男の子の最期の言葉に両親は驚き、大きななぐさめを与えられました。男の子が熱心に教会学校へ行っていた理由がわかり、「息子は本当にイエス様を信じていたのだ。またそれ以上にイエス様が息子を愛して下さったのだ。」

その後、両親も教会へ導かれ、子供を失った悲しみ以上に主イエスの愛を知り、大きな喜びを得ることができました。

☆折り紙で建物をつくろう☆



〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① イエスさまと一緒に十字架にかけられたのは誰でしたか？（→二人の犯罪人）
- ② 二人ともイエスさまをののしりましたか？（→いいえ。ひとりだけ）
- ③ もう一人はどうしましたか？（→自分の報いを認め、イエスさまにお願いした）
- ④ イエスさまは、その犯罪人の願いにどのように答えてくださいましたか？（→一緒に楽園にいると約束してくださった）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 人は死んで終わりですか？（→いいえ）
- ② イエスさまを信じる人は死んだ後はどうなりますか？（→魂は滑められ、天国に行く）
- ③ でも体はなくなってしまうのではないですか？（→いいえ。体もイエスさまと結ばれたまま、復活のときを待つ）

〈考えてみよう〉

誰かのお葬式に行ったことはあるでしょうか。人が死んでしまうのは悲しいことです。でも、教会のお葬式では讃美歌を歌います。神さまをほめたたえるのです。それは、死は終わりではなく、神さまのところにいく入り口だからです。そして、その入り口を通るときも、私たちはイエスさまと一緒にです。今も、そして死んだ後も、私たちはイエスさまと一緒になのです。

〈共に祈ろう〉

天の神さま。死ぬということは、怖いこと、何かよく分からないことのように思うことがあります。でも、私たちのために死んでよみがえってくださったイエスさまがいつも一緒にいてくださいますからありがとうございます。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

人は死を免れない。しかし死んだら何も無いのではない。その後のことに何の保証もないなら、死の恐怖が迫ってくる。絶望しかない。しかし主イエスを信じる人は、主イエスに結ばれている。その人は例外なく死とともに、主のみもとに憩う。すなわち今日、パラダイスにいる。そして復活のときを待つ。そこに私達の平安がある。このことを伝える。

ところで、小学生が見るアニメなどでも、「霊がとりつく」、「幽体離脱」などと言った言葉が出てくる。子ども達はこうした迷信的な話に触れる環境で生活している。このことを考えると、今回と次回の二回を用いて、人間が靈魂と肉体から成ること、信者において死のとき、復活のときどうなるかを順序立てて説明するのも有益ではないだろうか。(子どもカテキズム問36、ウエストミンスター小教理問答問37、38、同告白第32章から信者についての記述)。

〈展開例〉

考えてみよう。

○人は必ず死にます。では、その後は何も無いのでしょうか？

○十字架の上で一人の犯罪人はイエス様をのしました。もう一人の犯罪人について考えよう。この人は自分が十字架につけられていることについてどう考えたでしょうか？

自分の(罪)を認めた(ルカ23章41節前半)。

○それに対して、イエス様の事をどう思ったのでしょうか？

この方は何も(悪いこと)をしていない(ルカ23章41節後半)。

この人は、イエス様のことを、何も(悪い事)をしていないと思っただけではありません。42節を読んでみよう。「イエスよ、あなたの御国においでになるとき」。神の御国の主である方と認めました。つまりイエス様を(救い主)と信じたのです。イエス様の祈り(34節)、人を氣遣う愛から、イエス様の、人間を超えた愛が分かったのですね。

○そこで犯罪人は、イエス様に何をお願いしたでしょうか。

「(御国においでになるとき)ときには、わたしを(思い出してください)。(42節)。

○この犯罪人にイエス様はどんな約束をしてくださったでしょうか。

世の終わりを待つまでもなく、(今日)イエス様と一緒に(楽園)にいること(43節)。

○イエス様の言葉(43節)から何が分かりますか。

- ・死んだら(終わり)ではないこと
- ・イエス様を信じた人は(死んだ)後も、イエス様と(一緒に)いることができる。

〈祈り〉

この世を離れても、イエス様が楽園で一緒にいてくださると約束して下さってありがとうございます。イエス様を信じて生き、そしてこの世を去るときも、イエス様がこれからも一緒にいて下さることを信じることができますようにしてください。

【目標】

主を信じる者にとっては、死は恐ろしい終わりではないことを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→ルカによる福音書23章39節～43節を生徒と読む。

【ポイント】

主イエスは十字架に架かれた。それは私たちを死から救い出し、命を得るための身代わりの死だった。神様は私たちが死ぬことを求めてはおられない。主イエスの十字架を見れば分かるように、また救われた犯罪人への約束にも語られているように、神様は私たちが死によっても死なないこと、つまり救われて生きることを求めておられる。たとえどんな犯罪者であっても、神様はこの私たちを生かすということを望んでおられて、そのためにあらゆる手を尽くしてくださる。主イエスの十字架によって罪の赦しを得させ、復活によって死の力に打ち勝ち、死を無効にしてくださった。死は逃れることの不可能な、全ての者に必然的な恐ろしい終わりなのではなく、主を信じる者にとって

は、命の入口、さらなる祝福の始まりなのである。その祝福の命に私たちが入ることこそ、神様の何よりの願いである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「死後への思い、キリストの命の恵み」を生徒と分かち合う。

Q. 死んだあとのことを考えたことがありますか？そこには何があると思いますか？

Q. 死ぬことは当たり前なこと、しょうがないことで、私たちはそれを前にしてがっかりして諦めてしまったり、死から逃げることでしかないのでしょうか？

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたに命を願ってくださっている神様に、今あなたができることは何ですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

主イエス・キリストの十字架が、私たちの死を滅ぼして大きな祝福にあずかる時としてくださったことの感謝。自分自身の命の重さを大切にできるように。

テキスト ヨハネの手紙一3章1～3節

救い主イエス・キリストは、ただお一人の神の御子であります。そして、信仰者とは、神の御子イエス・キリストに結び合わせられて「神の子」とされています。御言葉は、恵みにより「神の子」とされて復活する祝福について教えています。

〈すでに神の子とされている〉

信仰者は、肉においてはアダムの子孫として罪の中に生まれ、しかし、霊において新しく「神から生まれ」(2:29)しました。それ故、「神の子」と呼ばれます。この「神の子」とされている事実は、目で見ても確認することができる事柄ではありません。この世の人々に知られている事柄でもありません。霊において新しく生まれたことは、霊において知ることができるばかりです。それは、「御子が正しい方だ」(2:29)と認めることと結びついています。御子が正しい方であり、まことの救い主であると認め受け入れる信仰のあるところで、信仰者が神から生まれた「神の子」とであると信じてすることができます。救い主を信じる信仰と私たち自身についての認識は、一つのことです。

そして、信仰が確かなことであるならば、私たち自身についての認識、「信仰者が神の子とされていること」もまた確かなことであり、「事実」です(1)。私たちは、信仰の認識を、「事実」、「現実のこと」、「リアルな事柄」として受け入れて生きる者とされています。

〈「すでに」と「いまだ」〉

しかし、「神の子」である現実には緊張感があります。「すでに」と「いまだ」の緊張関係です。すなわち、信仰の認識においては「すでに」神の子と確信されますが、「いまだ」神の子にふさわしいとは言いがたい自らの姿があるからです。信仰者の悩みとは、窮極的には、自らについての、信仰の認識とリアルな実際の姿との乖離、ギャップによるものと言えるでしょう。私たちは、神の子とされながら、地上にとどまる限りなお罪の

りこであり、神の御心になう善を行うことができません。このギャップのために、「わたしは何と惨めな人間なのでしょう」(ローマ7:24)と叫ばずにはおれないのです。

このことは、主イエスが、今、天の御父の右に座しておられることに対応しています。すでに私たちはこのお方と結び合わせられて「神の子」とされています。しかし、このお方がなお天にとどまられている限り、このお方と私たちが一つであることは目には見えないままです。この世もこのお方の勝利を知らないままであり、私たち地上の信仰者の叫びも途絶えることはありません。

〈聖化の完成〉

しかし、幸いなるかな。その時代はやがて終わりを告げます。聖書は、このお方が再び来られて、勝利が完成することを語っています。主イエス・キリストはやがて確かに来られて、御自身の勝利をすべての人に明らかにされ、救いの御業を完成されます。そのときには、信仰者、神の子が、まことに主イエスと一つであったこと、神の子とされていたことが明らかになります。また私たちは、おほろげにではなく、顔と顔を合わせるように、神を仰ぐことになります。御子をありのままに見て、御子に似た者に造りかえられます(2)。きよめられて、聖化の完成を与えられるのです。ここに信仰者の復活の祝福があります。

ですから、私たちは、「主よ、来てください」と祈って再臨を待ち望みます。しかし、地上の人生がただ嘆きと苦しみであり、意味がないというわけではありません。私たちは、地上においてすでに「神の子」なのであり、御子がきよいように、自らもきよくあることを志して歩みます(3)。そのところでこそ、私たちは、信仰の訓練を受けるのです。また、再臨までの期間は、福音宣教のために与えられた猶予でもあります。信仰者の自らをきよくする歩みこそ、福音のよき証しなのです。

(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問36

子どもカテキズム

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。

私たちの体はイエスさまと共にあり、

イエスさまがよみがえられたように

再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。

死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。

救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができます。

証換聖句 ヨブ19：25-27、ローマ6：4、コリント一15：42-43、

テサロニケ一4：13-17、テモテニ4：7-8、ヨハネ一3：1-3

参考教理問答 『ジュネーヴ』84-85,106-110、『ハイデルベルク』57-58,6、

『ウ告白』32：2-3,33：2、『ウ大教理』87-88,90,1、『ウ小教理』38,1

参考文献 「終末の希望についての信仰の宣言」(60周年宣言。現在、作成作業中)

本問答における「死の時の祝福」を扱った前回に引き続き、今回は「復活の時の祝福」について学びます。これには、体の復活と永遠の命という二つの事柄が含まれます。

1. イエスさまがよみがえられたように

イエス様と結び合わされているのは、私たちの魂だけではありません。信仰者の体もまた、キリストに愛されキリストに仕えた体です。たとえ地上での役割を終え塵埃になろうとも、キリストに結び合わされたまま休めます。キリスト教の葬儀で遺体を丁重に葬るのは、そのためです。

ちょうど私たちの主が、肉体をもって苦しみ死なれた後に、肉体をもって復活なさったように、私たちもまたこの体のゆえに苦しみ死んで葬られますが、やがて復活の日を迎えます。

2. 朽ちない体に

私たちの命であるキリストが再び現れなさる時、すなわち世の終わりの再臨の日、私たちもまたキリストと共に栄光に包まれて現れます(コロサイ3：4)。キリストに結び合わされていた私たちの復活の時です。

神が初めにお造りになった人の体は、土でできた土の器でした(コリント一1：47、コリント二4：7)。しかし、復活の体は、決して朽ちることのない栄光の体です。もはや死もなく痛みや病もありません。キリストの命が宿る新しい体として造りかえられるからです。キリストのもとで安らいでいた私たちの魂は、この新しい体と再び結び合われます。私たちは、天上のしかも確かに自分自身の体をもって、審判者の前に立つのです。

3. 永遠に神を喜ぶ

最後の審判は、私たちにとって、恐怖の日でも嘆きの日でもありません。それは、私たちがひたすら待ち焦がれた歓喜の時です。なぜなら、その審判者こそ、私たちの愛する主イエスに他ならないからです。私たちは主御自身の口から教しの宣言を受け、御国へと招き入れられます。

私たちはこの目で主の栄光を見、顔と顔とを合わせて主とお会いします。私たちの一切の労苦は報われ、義の栄冠をいただくのです。こうして、神の救いは完成し、私たちもまたゴールへと到達します。ただ神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶというゴールへ。(吉田 隆)

テキスト ヨハネの手紙一3章1～3節
 カテキズム 子どもカテキズム問36

(単元のねらい)

まず、終わりの日になされる事柄をよく理解しておきましょう。そのためにも、引用聖書箇所を丹念に一つ一つ聞いていただきたいと思います。天国への希望、それはこの地上で主イエスを深く知ることと堅く結びついています。それゆえ、主イエスを深く知るとつれ御国への希望が大きくなります。このことを共に覚えましょう。

「見よ、最初のもは過ぎ去った」

今日は、神様が約束して下さっている御国の完成ということについて学んでいこうと思います。

さてそこで、一つ質問です。イエス様は今どこにおられるのでしょうか？ そう、イエス様は今、御霊においては私たち一人一人と共にいて下さり、そして天におられます。イエス様は、およそ2000年前にこの地上に来られ、十字架の上で私たちの身代わりとなって死んで下さいました。そして三日後によみがえられ、天に昇り栄光の神の右の座に着かれたのでした。

今、イエス様は天におられて私たち一人一人と全世界を守り治めて、御国の進展のために御業を進めて下さっておられます。

では、イエス様はずっと天におられるままなのでしょうか。そうではありません。やがてイエス様は再びこの地上に来て下さいます。一度目は、罪の赦しを与えるよう十字架に架かれるために僕となって来て下さいました。こうして、御国の土台がすえられました。そして、二度目は、大いなる力と栄光を持つ王として世界を裁き、御国を完成させるために来られます（使徒17：30～31、ヘブライ9：28）。

主イエス様が再び来られるその日、天の万象は揺り動かされます。その凄まじさは人々が恐ろしさの余り気を失うほどのものとなり、産みの苦しみが頂点に達します（ルカ21：26）。

その日、主イエス様は御使いたちに命じて、御民を一人残らず集めて下さいます。たとえ、天の

果てに追いやられていたとしても、悔い改める者が忘れられることはありません（マルコ13：27、申命記30：1～4）。

その日、主イエス様は全ての死人をよみがえらせられ、そして、最後の審判を行われます（ヨハネ5：28～29）。この時、主を信じる者たちは無罪と宣言され、御国の一員であると公に受け入れられます（マタイ25：31～34）。

その日、主イエス様は滅びのなわめのもとにある被造物全体を、そのうめきのもとから解き放たれ、新しい天と新しい地に全く変えて下さいます（ローマ8：18～23、ペトロニ3：1～14）。

主イエス様によって受け入れられた者たちは、この義の宿る新しい天と新しい地に招き入れられ、豊かな住まいを得ます（ヨハネ14：1～3）。この新天新地には、もはや罪も病も死もありません。一人一人それぞれ朽ちることのない復活の新しい体を着せてもいただけるのです（コリント一15：35～49）。もちろん、一人ではありません。主を喜ぶことにおいて心一つにされた数え切れない程の多くの聖徒たちと一緒にです。共に捧げる礼拝はどんなにか感動的なことでしょう。こうして新天新地において完全に聖く幸いにしていただけるのです。

これが、聖書を通して神様が約束して下さっている御国の完成であるのです。

ずっと以前のこと、私は、ふとこんなことを思

い付きました。「新天新地に入れてもらった時、もしも、そこが気に入らなかったならどうしようか」と。ちょっとビクッとしてしまうような思い付きです。

天にいる無数の聖徒たち。そこには懐かしい兄弟たちもいます。皆、新しい天新しい地が大のお気に入り。喜びでいつも顔が輝き、賛美が溢れます。ところが、どうしたことでしょう、私だけは肩を落とし、うつむいたままです。仲間の励ましの声も虚ろに響きます。そんな光景が、ふと目に浮かんだのです。集団生活に馴染めずにいた気持ちの投影だったのかもしれませんが。しかし、天国は永遠に続くのですから深刻な状況です。

けれども、数日後に心の霧は晴れました。天の御国が何よりどういうところであるかを知ったからです。実は、聖書には天国の環境的描写がほとんどありません。具体的に、どういう所であるかあまり記されてはいないのです。しかし、繰り返し繰り返し言われていることがあります。それは、天国にはイエス様がおられるということです。天国では、何の隔たりもなく主イエス様と相まみえることが出来ます。ずっと身近に主が共にいて下さるところ、そこが御国です（ルカ23:43、ヨハネ14:3）。

私は思いました「そうだ、たとえ天の御国で一人肩を落としていてもイエス様は私を拒んだり決してなさらない。かえって心から心配して御声を掛けて下さるだろう。なぜなら、今この地上でも、主はずっとそうして下さっているのだから！」。共にいて下さるイエス様に気付いた時、心の霧は晴れたのです。

皆に、大好きなお友達がいるとしましょう。そのお友達はあなたを決して裏切りません。こちらが悲しい時には共に悲しんでくれ、喜ぶ時には共に喜んでくれます。自分の持っている物を「何でも使っていいよ」と信頼して言ってもくれます。

そのお友達が「今度、僕の家に遊びにおいでよ」と誘ってくれたらどうでしょうか。その家がどんな家かは、まだ行ったことがないので分かりません。それでもきっと大喜びで返事をするでしょう「もちろん行くよ！」。

その家がどんなに素晴らしい家であるのかの説明はそんなに必要ではありません。その友達がいることさえ分れば、もう十分に行きたくてしかたない気持ちになります。そのように、この地上で、慈しみ深い主イエス様を知れば知る程、主が共にいて下さることの喜びが大きくなればなる程、天の御国への希望は大きくなります。なぜなら、完成された御国においてこそ、私たちはイエス様との十分に満ち足りた深く豊かな交わりを持つことが出来るからです。

ヨハネの黙示録に、新しい天新しい地での光景が次のように記されています。天の御国の描写の数少ない中の一つです。「その時、私は玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取って下さる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである』」（21:3-4）。

この地上にあっては、悲しみがあります。孤独感や余りの辛さに嘆き叫ぶことがあります。祈りつつ労苦しているのですが、一つも突らぬ年を迎えることもあるでしょう。一人声を潜めて涙した夜も一度ではありません。しかし、その日、主イエス様が一人一人と向き合って溢れる涙をことごとく、ことごとくぬぐい取って下さるのです。何と幸いな日でしょうか。こうして私たちは共に永遠に神様を喜ぶものとされるのです。

感謝を捧げ、この地上にある間、主に従って参りましょう。
（小野田雄二）

【今週の暗唱聖句】 ヨハネの手紙一3章2節

愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、
自分がどのようなになるかは、まだ示されていません。

しかし、御子が現れる時、御子に似た者となるということを知っています。
なぜなら、その時御子をありのままに見るからです。

〈ねらい〉

復活の時にキリストの命が宿り、新しい体に生まれ変わり、キリストと結びあわされる。

〈展開例〉

みなさんは、自分が死んでしまったらどうなってしまうのか考えたことがありますか？

もしかしたら死んでしまうことはとても悲しい、怖いと思うことかもしれませんね。誰でも必ず死ぬ時がやってきます。どんなに立派な生活をしている人でも、神様を心から信じている人でも、悪いことをしている人でも必ず死がおとずれます。でも、聖書の中には、「神様を信じる人は死んでも生きる」と書いてあります。では、どうやったら死んでも生きることが出来るのでしょうか。

それは、イエス様が私たちの罪のために十字架にかかり死んで下さってよみがえられたこと。そして、天に昇り神様のお働きを今もなされ、私たちは「神様の子」とされています。神様はこの世を裁くためにもう一度この世に来られます。この

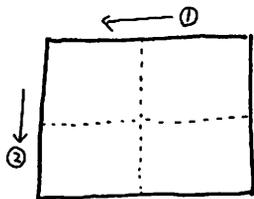
日には、神様を信じる人たちを復活させて下さいます。怖い日でも、悲しい日でもありません。しかも、神様と似た姿として復活させて下さるのです。私たちは、それまで生きていた姿とは全く違う姿でよみがえるのです。神様が私たちに新しい住む場所、新しい命を与えて下さり、悲しいこと、怖いこと、病気ももう死ぬこともない素晴らしい世界を与えて下さるのです。イエス様が十字架で復活なさったように、私達も神様の裁きを終えて、素晴らしい姿に生き返り、神様とずっと結ばれて、いつまでも喜びにあふれて生きていくようになるのです。

〈お祈り〉

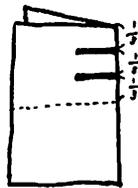
天のお父様。私達を本当に愛して下さりありがとうございます。神様の素晴らしい約束を知ることが出来て感謝します。どうか、み国がきますように。イエス様のお名前によってお祈ります。アーメン。

☆バクバクカード☆

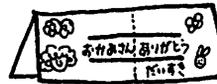
『バクバクカード』(飛び出すカード) 用意するもの: 紙・書くもの・はさみのり



①画用紙を4つ折りにして
もどします



②切り込みを
入れます

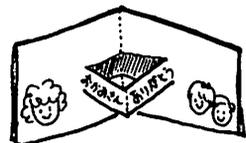


③広げて折り直し
切り込みに文字を書く



④切り込み以外の
のりをつけて張りあわせ

⑤まわりに絵や
コールを張って
表紙も飾れば
完成です



○母の日のカードとしてどうぞ。

○カードを作らない場合は、127ページの工作をどうぞ。

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① 神さまに愛され、神さまを信じる人は、神さまの何と呼ばれますか？（→子）
- ② いつ神の子となれるのですか？（信じている人はもうすでに）
- ③ 神の子にはこれからはもう何の変化もないのですか？（→イエスさまが来られるとき、イエスさまのようになれる）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 死んだ人も、イエスさまの再臨の日にはどうなりますか？（→よみがえる）
- ② それは、生きていたときと同じようにまた死んでしまう体ですか？（→いいえ。朽ちない体）
- ③ よみがえった後は、何をするのですか？（→イエスさまと一つとなって、永遠に神さまを喜ぶ）

〈考えてみよう〉

天国とはどのようなところでしょうか。持っているイメージを話し合ってみましょう。誤ったイメージのゆえに、あまり天国に行くことが楽しみではないということがあるかもしれません。しかし、何よりもそこは、イエスさまが共にいてくださる場所です。そして、そこは、今この世の中で自分が一番好きな場所よりももっとすばらしいところなのです。

〈共に祈ろう〉

天の神さま。私たちには、死んだ後にも復活の希望があり、いつまでもイエスさまと、そして大好きな人たちと一緒にいられることを感謝します。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

主イエスを信じる者が復活の時受ける祝福を知り、復活の希望を持つこと。復活においては、主イエスに結ばれた者の魂（死の直後全く聖くされている）と、体（キリストの栄光の体に似たものとされる）とが結合する。復活の後、審判を受けるが、そこで公に無罪を宣言され、天に受け入れられる。そこではすべての罪や悲惨から解放され、考えもおよばない喜びに満たされる。体と魂の両方において、そこにはもはや悲しみも苦しみもない。その望みを持つように勧める。（ウエストミンスター大教理問答問86、87、88、90参照）。

〈展開例〉

考えてみよう。

○イエス様は父なる神様のおられるところ（天）におられますが、やがて再びおいでになります（使徒言行録1章11節）。

○そのとき私達はどのようなのでしょうか。
そのときすでに死んでいる人は（復活）します。コロサイ3章4節。

○私達の魂は、死のときから復活までどうなっているのでしょうか。
全く聖くされ（ヘブライ12章23節）、神様のところにやすらいでいます（コリント一13章12節）。ちゃんと（イエス様）に結ばれて（復活）の時を待つのです。

○では体は？

見た目には、骨になってしまい、ちりになってしまいますね。ではなくなってしまうのでしょうか。

いいえ、体もイエス様に愛され、イエス様に仕えた大切な体です。目には見えなくても、ちゃ

んとイエス様に結ばれたまま（休む）のです。

○イエス様が肉体をもって苦しみ、死なれ、復活なさいました。ちょうどそのように、（わたしたち）も、肉体をもって死んで葬られますが、やがて（復活の日）を迎えます（カテキズム研究）。

○復活の時、魂と体はどうなりますか。
（結合）する。それから（審判）で、神様から（無罪）を宣言されて天に受け入れられます。

○このときの魂と体はあなたの魂と体ですが、今と違うことがあります。それは何でしょうか。
今はまだ（罪）があるし、体もやがて（死ぬ）体です。だから今はどんなことがあるかかんがえよう。（悪い考えや行い、争い、憎しみ、悲しみ、体の病、など）。魂は死の直後聖くされ、体は壊れることのない体に復活します。だから、復活後、天ではもうこれら（罪や死）はなくなるのです（ヨハネ黙示録21章3、4節）。

○天で私達は何をするのでしょうか。
今どう言ってもいいか分からないくらい大きな（喜び）で一杯になります。神様にお会いし、神様を（喜び）、（賛美し）、神様にお仕えするのです。

〈祈り〉

天の父なる神様。私たちが神の子にして下さってありがとうございます。今はまだ罪があります。悲しんだり争ったりすることもあります。この体も、病になったり、弱ったりします。けれども、イエス様がおいでになるとき、私たちは天の御国に神の子として入れられます。今からしっかりと信じていることができるようにして下さい。

【目標】

死のあとにはどこに行くのか？ 天国への希望を知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→ヨハネの手紙一3章1節～3節を生徒と読む。

【ポイント】

「御子が現れるとき、御子に似た者となる」ということは、どのようなことなのか？ 主イエスの滑さにあずかる（ヨハネ一3:3）。義の栄冠を受ける（テモテ二4:8）。朽ちず、輝かしい霊の体に復活する（コリント一15:42～44）。新しい命に生きる（ローマ6:4）。そしてその時には、「わたしたちはいつまでも主と共にいることになります」（テサロニケ一4:17）。死のあとには、誰もおらず、行き先も分からないのではなく、主がそこにちゃんといてくださるということ。新しい体、義の栄冠、想像にまさる祝福がそこに待っているということを感じたい。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「復活があることによる希望」を生徒と分かち合う。

Q. 復活のことを考えたことがありますか？

Q. 主イエスは十字架で死なれたあと、復活されました。主イエスの復活はあなたとどんな関係がありますか？（ヨハネによる福音書5:24, 11:25）

Q. もし仮に主イエスが復活されなかったとしたら、どうなってしまうのでしょうか？考えてみましょう。

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 死はいつやってくるか分かりません。死を迎える前に必要なことを今日学べましたか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤折り

死のあとにも神様がさらに大きな祝福をもって待っていてくださることへの感謝。復活の希望を知り、励まされて、安心して人生を歩めるように。

テキスト エゼキエル書37章1～14節

〈枯れ骨の復活の幻〉

エゼキエル書37章1節以下は、預言者エゼキエルに神がお見せになった幻です。

主のみ霊はエゼキエルを、かつて激しいたたかいの舞台となった谷に連れていかれます。そこには戦死者の骨がいちめん散らばっていました。それらの骨はもう長く放置されていたため、枯れていました。

もう決して生き返ることはない枯れ骨は、死と絶望の象徴です。そして、神の民イスラエルはこのときまさしく枯れ骨のようであったのです。エゼキエルは補囚に立ち会った預言者です。彼自身もバビロンに移され、イスラエルの民と苦難をともにしました。

補囚はイスラエルの背きに対する神の審判です。神はご自身に従う民を祝福される一方で、ご自身に背く民をみ手をもって打たれます。

パウロは罪の支払う報酬は死であると語っています（ローマの信徒への手紙6章23節）。イスラエルにとって、補囚は文字通りみずからの背きの罪の報酬としての死の経験であったのです。枯れ骨の幻は決して誇張ではなかったのです。

しかし、神は枯れ骨を生き返らせたまいます。エゼキエルが神に命じられたとおりに、枯れ骨に向かって「お前たちは生き返る」と語ると、まず筋と肉と皮膚とによって体が造り上げられます。

さらに主のみ霊が体の中に吹き込まれると、体は生き返って自分の足で立ち、非常に大きな集団となったのです。このように全能の主のみ言葉とみ霊には、枯れ骨を生き返らせる命の力があるのです。

〈主のみ霊によって生かされる〉

枯れ骨が生き返り、自分の足で立ち、非常に大きな集団となるこの幻は、イスラエルの回復の預言です。今しばらくの苦しみを経て、イスラエルは補囚からときはなたれ、祖国に帰り、荒らされた都と神殿とを再建し、礼拝をととのえ、主にある新しい歩みへとうながされていくであろうことを、神はこの幻によってあらかじめお告げになったのです。罪の赦しの恵みは、このように瀕死の民さえも新しい命に生き返らせるのです。いまだ補囚の苦しみと悲惨のただ中に置かれていたイスラエルに向けて語られたこの預言は、希望なき民に大きな希望と慰めを与えたのです。

枯れ骨を生き返らせた神のみ霊は、新しいイスラエルである新約の教会をも生み出したまいました。墓を破って復活したもうたイエス・キリストのみ霊によって、ペンテコステのみわざが起こされました。神はひとり子イエス・キリストを十字架につけてよみがえらせたもうことにより、おのが罪ゆえに死んでいた私たちをキリストとともによみがえらせ、キリストのみ霊によって生きる新しい人としてくださいました。枯れ骨を生き返らせる全能のみわざを私たちのうちにも起こしてくださいました。

この神のみ霊のみわざはペンテコステの日以後も継続されています。今も生きて働きたもうキリストのみ霊はご自身の体なる教会とそこに生きるひとりひとりに、日々新しい命の力と希望を与えてくださるのです。

(木下裕也)

テキスト エゼキエル書37章1～14節

〔単元のねらい〕

聖霊降臨祭を祝うテキストとして、エゼキエル書から選ばれました。聖霊の注ぎが神の民を集め、生かします。しかもそこで神の言葉の説教が伴います。キリストの教会の誕生は、まさにこの物語の成就なのです。また、これはただ一度限りの御業なのではなく、神の民は常に、この神の霊によって、命を受け、新しくされ、満たされます。主の日のたびごとに正しい説教とその聴聞によって起こっているのです。教会に連なる者は、すべて、この霊の働きにあずかる者とされていることを信じたいと思います。子どもの礼拝式の説教が祝福され、分級では、特に、上級や中学生には、聖霊の働きへの飢え渴きと自覚的な信仰体験を求めるよう励ましてください。『子どもカテキズム』問22を参照のこと。

「動き出した骸骨!？」

今日は、教会の特別の記念日です。世界中の教会で同じお祝いをしています。2000年前のこの日、エルサレムに集まって、お祈りしていたイエスさまの弟子たちにお約束通りに、イエスさまの霊である聖霊なる神さまが注がれました。そのとき、教会は誕生したのです。

さて、今一緒に読んだ聖書の御言葉、すごいですね。エゼキエルという神さまの御言葉を語る「預言者」が、神さまの霊によって一つの幻を見ました。谷の真ん中に、とても多くの人間の骨を見ました。干からびている骨です。それを見せられた神さまは、おっしゃいました。「この骨は生き返ることができると思うか。」エゼキエルは、このときとても困ってしまったと思います。もしかするとすぐに心の中でこんな考えがよぎったかもしれません。「こんなからからの骸骨が、生き返って人間になるなんて、それはいくらなんでもできないよなあ。」そこで、エゼキエルさんは、やっとの思いでこうお答えしました。「神さま、それは、あなただけがご存知です。」すると、神さまはエゼキエルにこのような神さまの言葉を告げられます。「枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神さまはあなたがたの上に神さまの霊を吹き込む。するとあなたたちは生き返る。そして、あなたたちはわたしが主であることを知るようになる。」エ

ゼキエルは、神さまの預言者です。ですから、衆直に命じられるままそっくり神さまの御言葉を語ります。するとどうでしょう。音が聞こえてきました。「カタカタ、カタカタ。」骨と骨がぶつかり合う音です。ばらばらになったその骨が人間のもの体のままにつながってゆきます。それだけではありません。骨に筋肉がついて行くのです。そして、皮がついて人間になったのです。

まるで、創世記のなかの神さまが土のちりから人間を創造されたように、神さまの力は、死んで骨になった人間を復活させられるのです。でも、それだけではまだ、本当の人間らしい人間になりませんでした。つまり、神さまを信じて従う人間、神さまを礼拝する人間のことです。神さまは次にこのように仰いました。「霊に預言しなさい。神さまの霊がこの人間に注がれるように、このように言いなさい。」エゼキエルは、今度も言われたとおりに語りました。するとどうでしょう。本当に、この骸骨で満ちていた谷で死んでいた人たちが生き返って自分の足で立ち上がったのです。それは、とても大勢の人々でした。

このお話は、昔、イスラエルの人たちが神さまに従わないせいで、バビロンという国に滅ぼされ、生き残った人たちも奴隷となって連れて行かれたときに、神さまが見せて下さった幻です。もしも、

イスラエルの人たちが、神さまに立ち返って、神さまの御言葉を聴き、それに従うなら、もう一度、神さまの民として生き返るという約束なのです。

この幻は、そのおよそ600年後、実現します。それが、教会の誕生、聖霊降臨の出来事です。そのとき、エゼキエルではなく、聖霊を受けたイエスさまのお弟子さんたちの中からペトロが立ち上がって、このように神さまの言葉を説教し始めたのです。「あなたがたは神さまの独り子を十字架で殺してしまいました。けれども、天のお父さまは、イエスさまを墓の中から甦らされました。誰でも、この罪を悔い改めて、イエスさまを信じるなら、罪が赦されます。神さまの民となれます。」すると、この説教を聴いていた3千人もの人たちが、イエスさまを信じて洗礼を受けました。これが、僕たち私たちの教会の誕生の物語です。今日は、世界中で、聖霊が注がれて教会が誕生したことをお祝いするのです。

でも、一番大切なことは、2000年の昔に聖霊なる神さまが注がれて教会が誕生したことを覚えることだけではありません。皆の前に立っている先生は、神さまの聖霊を注がれています。先生だけ

ではありません。ここにいる僕たち私たち一人ひとりにも神さまは聖霊を注いでいて下さっています。神さまの約束通り、この礼拝式の真ん中に聖霊なる神さま、目には見えませんがイエスさまは共におられます。でも確かに、聖霊なる神さまは目には見えません。ですから、本当にここにおられるのか、本当に僕のところに来ておられるのか分からないって考えるお友達もいるでしょう。でもそれは本当です。目に見えない聖霊なる神さまは、確実に、イエスさまの説教がされ、これを聴いているとき、僕たち私たちに注がれているのです。目には見えなくても、聖書の言葉、神さまの言葉は説教を通して耳に聞こえるでしょう。この説教を聴いて、イエスさまは、どんな人間でも生まれ変わらせ、生き返らせることができるんだと信じることができたら、もうあなたは、聖霊を受けています。イエスさまを信じて行こう、お祈りして行こうと心に思っているお友達は、すでに聖霊を受けているのです。教会に通っている僕たち私たちは聖霊のお働きを受け始めています。もっともっと、聖霊を受けて、神さまと教会の役に立ちたいと思います。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、
“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。

〈ねらい〉

聖霊の大きな働きを知り、聖霊の力を信じて生きる。聖霊は、み言葉を宣べ伝える勇気と力を与えて下さる。

〈展開例〉

みなさんにお誕生日がありますね。教会にもお誕生日があります。今日は教会のお誕生日です。教会がどうやって誕生したのでしょうか？

イエス様が天に昇られた後、残されたお弟子さんたちは、一つの部屋に集まっていた。そこに神様が約束して下さった、「聖霊の力」が降り、お弟子さんたち一人一人は神様の言葉を語る勇気と力が与えられました。もうだれ一人イエス様が十字架にかかる時に逃げ出したお弟子さんのようではありませんでした。そして、本当の力と勇気を与えられたお弟子さんたちは、自分がお話している言葉ではなくてもお話をしたり、たくさんの人たちにイエス様の事を語りました。遠くの地まで。その言葉を信じた人たちが、また神様の言葉を伝えて世界中に神様の言葉が伝えられていきました。驚くことは、2000年も前の出来事を、日本にいる私たちも知り、信じていること、今も世界

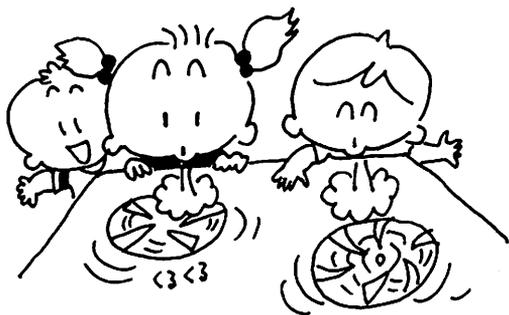
中に神様の言葉が伝えられていることです。教会は、このような神様を信じる人たちが集まったものですが、その中に、神様の特別な力が働いていて、今も昔もそしてこれからもずっと変わらず伝えられていくのです。

私たちも教会学校で神様のお話を聞いています。難しいな、分からないなって事がたくさんあると思います。そんなとき、聖霊の力が働いて、聖書の言葉が分かるように私たちに力を与えてくれます。また、お友達に神様のお話を教えてあげたいと思うときに聖霊の力が与えられて、お友達にお話しする勇気を与えられます。聖霊は、お化けでも怖いものでもありません。目には見えませんが、神様が私たちに与えてくれる本当の力と勇気だと思います。

〈お祈り〉

神様。神様の力が働いて世界中に聖書の言葉が伝えられた事を感謝します。私たちも聖霊の力を信じて歩んでいくことが出来ますように。お友達にも神様の言葉を伝えていくことが出来ますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

☆ふーふーごまをつくらう☆



○遊び方

床や机の上に置き、円の中心に息を吹きかけ、くるくる回して遊びます。

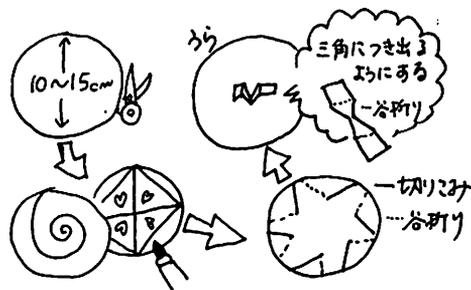
☆どんな模様をかくと、回ったときにきれいか、工夫してみましょう。

○用意するもの

画用紙、油性ペン、のり

○作り方

- ①画用紙を円形に切ります。
- ②両面に好きな模様を油性ペンでかきます。
- ③図のように切り込みを入れ、折ります。
- ④画用紙を図のように切り、円の裏につけます。



〈聖書のお話を確認してみよう〉

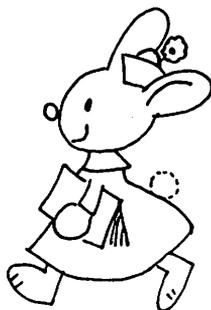
- ①今日は何の日？（→ペンテコステ）
- ②ペンテコステは、何が注がれた日？（→聖霊）
- ③そのとき何が誕生した？（→教会）
- ④今日の聖書のお話には何という預言者が出てきた？（→エゼキエル）
- ⑤エゼキエルが見たのは、どのような光景だった？（→枯れた骨の復活）
- ⑥骨に肉がついただけ？（→霊が吹き入れられた）
- ⑦この骨とは、誰のことだった？（→罪を犯したイスラエル）
- ⑧罪を犯すことがある私たちは、どうすれば聖霊を受けられる？（→御言葉を聞き、イエスさまを信じる）

〈考えてみよう〉

息をとめるとどうなるでしょうか。もちろん苦しくなって、死んでしまいます。私たちは息をしないと生きていけません。しかし、息はしていても、心が苦しくなるということはないでしょうか。お友達とけんかをしてしまったとき、ずるいことをしてしまったとき、なんだか嫌な気持ちになり、心が苦しくなります。私たちには、罪があり、それが苦しみの原因です。その苦しさを取り除くためには、聖霊という空気を吸って呼吸をしなければなりません。それは、イエスさまを信じる人に与えられる特別な空気のようなものです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまを信じる私たちの罪をゆるしてください。聖霊を与えてください。そして、いつも教会に喜んで行くことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

聖霊なる神様が働くとき、枯れた骨も生き返る。私達がイエス様を信じていること、教会に信じる人達がいること、これは聖霊が私達、教会の人達に働いているからであることを知る。自分たちが現に聖霊の注ぎを受けていることを信じること。これが教会の始まり。

〈展開例〉

考えてみよう。

- 預言者エゼキエルが見たものは？
(枯れた骨)が(生き返る)幻。
- 神様からエゼキエルに、枯れた骨に向かって語るように命じられた言葉を読んでみよう。37章4～6節。
- この言葉から、霊がどんな働きをしたことがわかりますか。
骨と骨を近づけ、それらの上に(肉)と(筋)を生じさせ、(皮膚)がその上を(覆う)ようにした(8節)。
- この後、霊が彼らの中に入ると、どうなったでしょうか。
(生き返って)(自分)の(足)で(立った)。それから非常に(大きな集団)になった(9～10節)。
- この霊は、(聖霊)なる(神様)です。今日は、聖霊降臨を記念する日です。これは、弟子達に霊がくだって、弟子達がいろいろな国の言葉でイエス様のことを語ったことを記念する日です。このときから、世界中にイエス様の福音が伝えられるようになりました。だから、イエス様の

復活後の教会の誕生日なのです(使徒2章)。このとき弟子たちにくだられたのは、エゼキエル書37章で出てくるのと同じ霊でしょうか。それとも違うのでしょうか。(同じ)霊です。だから(聖霊)なる(神様)です。

- 聖霊なる神様が注がれる時、どんなことが起こるのでしょうか。
 - ・エゼキエル37章では、(枯れた骨)を(生き返らせ)、(大きな集団)にしました(10節)。
 - ・使徒言行録では、弟子達が、(いろいろな国の言葉)で、(イエス様)のことを(話す)ようになりました(使徒言行録2章4節、14～40)。
 - ・さらに大勢の人たちが(イエス様)を(信じる)ようになりました。(キリストの教会)が生まれたのです(使徒言行録2章41～42節)。
- 聖霊なる神様は今も私達に注がれています。それはどうしてわかりますか。考えてみよう。
 - ①私がイエス様を信じるようになること、信じているのは、聖霊なる神様のお働きです。
 - ②イエス様を信じる人たちの集団(教会)があること。

〈祈り〉

天の父なる神様、あなたは、聖霊なる神様を私達のところに送って下さり、イエス様を信じて、永遠の命に生き返るようにして下さいました。私達をもっとあなたのことが分かるように、聖霊なる神様をお送り下さい。そしてこの教会に、さらに大勢の人たちが来て、エゼキエルが見たように、新しい命に生き返り、教会が、大きな集団になる

ことができるようにしてください。

【目標】

霊によって生きるということはどういうことか考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→エゼキエル書37章1～14節を生徒と読む。

【ポイント】

枯れた骨が生き返ったのは、筋と肉を与えられたからではなく、最後に霊を与えられたからであった。ただ骨と筋と肉があるだけでは、その状態を生きていると聖書は語らない。神様から吹き入れられる霊によってこそ「お前たちは生き返る」（5節）と言われる。霊を吹き込まれるということは命を得ることを意味し、それは神様に場所を得るということ、主を知ることにつながる（14節）。その実現がペンテコステに起こった。そこに教会が誕生し、何よりそこに主を知り、主に対して新たな命を得て生き返った新しい主の民の歴史が誕生した。私たちの教会、私たち一人一人も、霊を受け、神様を知り、枯れた骨が生き返るほどの力強い命を吹き込まれた者たちなのである。

③生徒と一緒に考える

→聖霊なる神は霊であられるので目に見えないが、しかし確かに私たちに働いて私たちを神様に結び付けてくださる。見えない霊の働きは、しかしそれが具体的に働いた教師自身の人格、経験、その信仰、その証しを通して見えるのである。まず教師自身にとっての「霊によって生かされている」ことの証しを生徒と分かち合う。

Q. 特に牧師先生などは聖霊の働きを熱心に求めて祈っていますが、あれはなぜだと思いませんか？

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あれは聖霊の働きだったのかも？と思えるような経験はありますか？

（例えば、なかなか分からなかった聖書の言葉、十字架の意味、自分の罪についてのことが理解できた経験など）

Q. 聖霊の働きを求めて祈ったことはありますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

私たち一人一人に神様の御霊が与えられていることの感謝。今後も神様が命の霊を豊かに注いで、私たちを支え、神様との結ぶつきの中に保ってくださいるように。

テキスト ルカによる福音書17章11～19節

本教案誌のカリキュラムは、主の苦難と復活・教会・終末と進み、いよいよハイデルベルグ信仰問答という第三部「感謝について」にはいる。この感謝の生活はたえず十字架のキリストを仰ぐことから始まる。今日のテキストからもこの道筋を見ることができる。テキストの節を追って瞑想しつつその意味を考えていこう。

11節：何のためにエルサレムへ。これからイエスは異邦巡回を終え、十字架の苦難が待ち受けるエルサレムへ。18：31～33参照。

12節：「重い皮膚病」。新共同訳の初版、カトリックのドン・ポスコ社訳、以前の新改訳、1955年改訳口語訳はみな「らい病」。この不快語・差別語からの訂正は重要。この病気は肉体的な病人というだけでなく、宗教的・社会的にも汚れた者とされ、イスラエル社会から隔離・除外されていた。「遠くの方に立ち止まったまま」近づくことも許されていない。この汚れた者もイエスの来臨によって、まったく新しい憐れみと恵みの世界へと引き入れられた。宣教の初期から、イエスは「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ」（マルコ1：40）てまでして清められた。彼らの清めと癒しはイエスの宣教目的であった（マタイ11：5）。

13節：主に対する「憐れんでください」（エレイソン）という叫びはキリスト教信仰の本質的なものである。カトリックなどの「キリエ（主よ）・エレイソン」唱和の伝統の見直しを。

14節：清めの判定は祭司の仕事であった。レビ13章参照。「見て」は、遠くからご覧になったのか、主がすぐ近くまで行かれたのかは不明。マルコ1：40のように、患者たちに触れるということはなかったと思われる。しかも10人が癒されたのは、祭司のところへいく途中であった。彼らの中に「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する」（ヘブライ11：1）という信仰、イエスによって清められ癒されるという信頼を見ることができる。

15,16節：しかし「その中の一人、サマリア人」

だけが、癒されたあと神に賛美をささげながらイエスに感謝をするために戻って来た。他の9人はユダヤ人だったのだろうか。サマリア人は「この外国人」（18節）と言われているように異邦人との混血人で、ユダヤ人からは軽蔑と敵対意識の対象となっていた。彼らサマリア人にイエスの福音の光があてられ、彼らのなかに恵みの世界が広がった。良きサマリア人のたとえ（ルカ10：25～37）や、シカルの井戸辺でのサマリアの女の話（ヨハネ4：1～42）は、この個所と合わせて味わうとよい。かれがイエスのところへ「戻って来た」のはいつか。レビ13章によると、祭司のところでの清めの判定ができるまでには、一週間以上もかかった。そんなに時間がたてば、エルサレムに向かっておられるイエスの一行を見失ってしまう。そこでこのサマリア人は、祭司に見せることなく、癒されるとすぐ、真の大祭司であられるイエスのもとに引き返したのである。

17節：「ほかの9人」の信仰が問われる。神のみもとに来ようとしめないアダムの墮落以来の人間の姿（創世記3：9）が、「どこにいるのか」というイエスの御言葉に込められている。神の恵み、私たちが心底作り替えるイエスの癒しに対して、私たちの応答いかに。

18,19節：病気が癒されるという恵みには10人すべてがあずかった。しかしこの一人のサマリア人の信仰のみが、「あなたを救った」のである。その信仰ゆえに彼はこれから後、自分の人生に「立ち上がって、行」くことができる。しかし彼はまず、「神を賛美するために」イエスのもとへ「戻って来た」のである。

「重い皮膚病」は私たちの罪、清くされ癒されるのは罪の赦し・義認と、聖化の恵み。そして私自身を主の日の礼拝で主イエスにお見せする。神にまみえ神への賛美とイエスへの感謝のために、この喜びの礼拝に毎週、戻ってくるのである。第三部「感謝について」の生活はここから始まる。

（中根汎信）

カテキズム 子どもカテキズム問37

子どもカテキズム

問37 神さまが人に求めておられることは何ですか。

答 神さまが私たちに求めておられることは、感謝することです。

証契聖句 ルカ17:11-19、テサロニケ一5:18、エフェソ5:20、コロサイ1:12、
ペトロ一2:9-10

参考教理問答 『ジュネーブ』128,130、『ハイデルベルク』2,86,90、
『ウ信仰告白』16:2、『ウ大教理』97

本問から第三部「生活の道」について学びます。
聖書は、人が信ずべき事柄と共に、生きるべき道をも教えています（問6参照）。信仰のない生活が虚しいように、行いの伴わない信仰もまた死んでも同然です（ヤコブ2:26）。なぜなら、信仰は人に新しく生きる命を与えるものだからです。

神は人を心と体を持つものとしてお造りになりました。それは、人が心と体をもって神の栄光を現すことをお望みになったからでありましょう。

1. 救われるためではなく

第一部「人生の目的」の問4で、私たちは「神が私たちに望んでおられること」を学びました。これは、神が人間に望んでおられる究極の規準についてであり、この後問39以下でもう一度学んで行くことになります。

けれども、人はその規準に従わなかったばかりか、従い得ない者へと墮落してしまったのでした（問17-18）。ですから、いくらこの規準を学んでも、そこで見出すのはただそれを為し得ない自分の惨めな姿だけです。何とかそこから救われるために自力で違えようとするのは、もはや不可能なのです（問28）。

2. 救いへの応答として

しかし、神はそのような私たちを一方的に愛して、救ってくださったのでした（問29-31）。そこには、何の条件も求められていません。ただ、神

が御自分の独り子イエス・キリストを犠牲にして私たちをお救いくださったということ、そこまでしてこのような私たちを御自分の子どもとなさろうとしたその愛を信じることでした。

ですから、神がなおも私たちから求めておられることは、私たちが救われるために何かをすることではありません。むしろ、その救いに対する私たちの応答です。別の言い方をすれば、その救いを大喜びする私たちの心です。神に愛され神の子とされていることを素直に喜んで「ありがとう」と言う、その心なのです。

3. ただ感謝のみ！

したがって、“ただ恵みのみ”の救い（問28）に対する最もふさわしい応答は、“ただ感謝のみ”です。『カテキズム』がくり返し「心を込めて」とか「喜びと感謝をもって」と私たちの姿勢を表現してきたのは、そのためです（問23,25他）。

神の救いの恵みに対して、いつでも感謝できることはキリスト者の特権です（コリント一1:4、エフェソ1:16、フィレモン1:4他）。自分のことであれ他人のことであれ、感謝する材料に事欠くことはありません（テサロニケ一5:18）。祈りによって（コロサイ4:2）、讃美によって（問3:16）、また献げ物を通して（コリント二9:11）私たちは感謝を捧げます。感謝することは、様々な思い煩い（フィリピ4:6）や悪い思い（エフェソ5:4）に打ち勝つ力とさえなるのです。（吉田 隆）

テキスト ルカによる福音書17章11～19節
カテキズム 子どもカテキズム問37

〔単元のねらい〕

信仰は、様々な側面をもっています。アブラハムは、不可能を可能に変える神様の全能の御力を信じました。また、信仰は、祈る熱心さを表す場合もあります。しかし、今日の聖書箇所がはっきり教えていることは、「信仰とは感謝することである」という理解です。また、この感謝は、律法主義的な信仰によっては引き起こされません。また、感謝する信仰は、御利益信仰の対局にあるものです。イエス様は、感謝を生み出す信仰を求められます。

「感謝する私たち」

この世には、御利益信仰と呼ばれる信仰があります。例えば、九州の福岡にいたとき、多くの車のリアバンパーの辺りに宗像大社のシールが貼ってあるのを見かけました。何かしらの加護の御利益を期待しているのでしょう。また、幾つかの新興宗教では、信じることで病気が癒やされることを宣伝しています。治ると信じることできたなら、本当に治る病気もあるでしょうから、全くの嘘ではないかもしれません。そのような宗教は、信じることから結果する御利益を人に期待させ、信者を獲得しようとしています。

福音書には多くの癒やしの物語が記されています。その意味では、イエス様を信じて多くの病気の人が癒やされたのですから、イエス様を信じる信仰は、信じた人に病気を癒やすという益をもたらしました。イエス様は、病気を癒やすことで、病気に苦しむ人に、神の憐れみ深さを表し、また、ご自身が病気を癒やすことができる救い主であることを明らかにされました。イエス様を信じた人は、確かに、様々な多くの益を受けることができました。しかし、福音書において、イエス様から癒やしの益を受けた人がすべて救われたわけではありません。

今日の聖書箇所において、イエス様から癒やされた人は10人です。そして、この10人は、イエス様の御言葉を信じました。イエス様から「重い皮膚病は癒やされる」というお言葉を頂いただけで、

この御言葉を信じて、その場を立ち去ったからです。そして、まだ重い皮膚病が癒やされていないにもかかわらず、癒やされることを信じて、自分の身体を祭司に見せるための旅に出かけたからです。普通なら、自分で治ったのを確認してから、その証明を受ける為に祭司のもとに行くのですが、自分では治ったことが確認できないときに、イエス様が治るといつてくださったという御言葉だけを信じて旅に出るのですから、強い信仰といえるかもしれません。そして、イエス様は、このように信じて去った10人全員を癒やしてくださいました。

10人ともに、祭司に見せる旅の途中で自分の皮膚が綺麗になったことに気付きました。皮膚は敏感ですから、蚊に刺されてもすぐ赤く腫れます。蚊に刺されたぐらいなら、すぐに綺麗な肌に戻りますが、重い皮膚病で悩んでいた人は、自分ではもう治らないと思われるほど皮膚が痛んでいました。ですから、イエス様からお言葉を頂いて、その皮膚が綺麗になっていくことに驚いたことでしょう。みんな本当に嬉しかったと思います。そして、祭司から治ったことの証明を受けるために、旅を急ぎました。その証明さえあれば、家族のもとに帰ることができます。町の人の輪のなかにも入り、共に礼拝を守ることができます。

ところで、その10人のなかで一人だけが、祭司から証明を受ける旅から引き返して来ました。ル

カは、彼のことを15～16節でこのように記しています。「その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。」彼は、自分の病気が癒やされたのは、神様の御業であることを知っていました。イエス様を通して、神様が働かれたのです。そして、大声で神様の御名を賛美し、イエス様に感謝を献げました。イエス様が、お言葉を与えて癒やして下さったからです。

その彼に対して、イエス様は、19節でのように語られました。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」ここで、「救った」というお言葉に着目してください。10人はすべて癒やされました。しかし、救われたのは感謝を表しに来た彼一人です。10人は、イエス様と出会って癒やしの御利益を受けました。しかし、イエス様と出会って、「救い」の恵みを受けたのは彼一人です。

この物語は、救いとは何かを改めて問い掛けるものです。癒やしと同じ意味ではありません。この物語における「救い」とは、イエス様に感謝を表す者に与えられる祝福です。イエス様から「あなたの信仰があなたを救った」と言って頂ける以上の信仰的な祝福はありません。感謝を表しに帰ってきた彼は、何よりも先にイエス様に感謝を表すことが、祭司に自分の身体を見せること以上に大事なことになりました。癒やしを与えて下さったイエスとの出会いが、ある意味で、自分が癒やされたことよりも重大な意味を持ち始めています。イエス様に感謝したいという思いが、彼を突き動かしています。この信仰が、彼が救われていることを表しています。「救い」とは、イエス様との深い交わりに入れられていることです。彼は、これから、イエス様の御前を離れて祭司に見せるために旅立つのですが、彼は永遠にイエス様との交わりに生きることになります。

御利益信仰は、御利益を喜ぶ信仰です。それに

対してキリスト教信仰は、御利益を与えて下さったイエス様を、御利益よりも喜ぶ信仰です。ユダヤ人の9人は、イエス様から重い皮膚病を癒やされるというご利益を受けたのですが、イエス様の霊的な結びつきという救いを受けることはできませんでした。多くの人は、困ったときに教会に来て助けを得ると、もう来なくなります。これは、本当に残念なことです。御利益以上の救いを目の前にして、受けずに終わるのであります。一度受けた特別な恵みから出発して、神を喜ぶことが自分の人生の中心出来事となるところまで、イエス様は出会う者を導こうとしておられます。

また、ルカは、彼がサマリヤ人であること伝えています。イエス様は、「この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか（18節）」と問い質しておられます。この言葉から、他の9人はユダヤ人であったことが分かります。通常、神礼拝に熱心であると自負している者が、神を賛美することよりも、自分の癒やしを喜ぶことを優先したのです。そして、純粋な信仰を失ったとユダヤ人から蔑まれていた一人のサマリヤ人が、9人のユダヤ人よりも豊かな神賛美へと進んでいきました。この物語は、律法主義的に救いを求め、感謝することを忘れたキリスト者への警告を含んでいます。

今日の物語は、信仰の質を鋭く問い掛けています。他の9人のユダヤ人もイエス様の御言葉を信じて、病気が癒やされました。救いをもたらす信仰とは、彼らの信じかたと区別されるべきです。その際、イエス様が「信仰」と呼んでくださるのは、イエス様に感謝する心です。イエス様は、私たちが自分の為に御利益を求めて信じる信仰よりも、どんな些細なことであってもイエス様へ感謝する信仰を尊んでくださいます。私たちは、この礼拝に集い、もう既に、イエス様を喜ぶ者に変えられていることを何よりも心から感謝致しましょう。礼拝における感謝の祈りを、イエス様は喜んでくださいます。 (岩崎 謙)

〔今週の暗唱聖句〕 ルカによる福音書17章19節

イエスはその人に言われた。

「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

〈ねらい〉

全てのことが神様から与えられた恵みであることを覚え、感謝する気持ちを持つ。

〈展開例〉

みなさんは、誰かから「ありがとう」と言われて嬉しくなったことがありますか？

よく、お家のお手伝いをした時やお友達を助けてあげた時などに、「ありがとう」と言われたことがあると思います。また、お買い物に行ってお店の人が「ありがとうございます」と言われたこともあるでしょう。「ありがとう」という一言を言われて嬉しくなったり、とても気分が良くなったりすると思います。「ありがとう」という言葉でどちらもとても良い気持ちになります。

「ありがとう」の中で、もう一つ大切なことがあります。それは、「神様ありがとう」です。神

様に私たちはお祈りの中で「ありがとう」と言いますね。どうして、「神様ありがとう」と言うのでしょうか。

神様は、私たちの真っ黒な心の中をイエス様を通して真っ白な心に変えて下さるからです。私たちのためにイエス様を与えて下さり、十字架で私たちのために死んで下さったのからです。そして、私たち一人一人を愛し、神様の子どもとして守って下さっています。私たちは「神様ありがとう」といつも言える子どもになりましょうね。

〈お祈り〉

神様、イエス様を私たちのために送って下さりありがとうございます。神様がいつも私たちを守って下さることを心から感謝します。イエス様のお名前によっておいのりします。アーメン。

☆魔法のクレヨン☆

○用意するもの

画用紙、クレヨン、先のとがったもの（ツマヨウジ、粘土ペラなど）

○遊び方

- ①画用紙全体を黒色以外のクレヨンで8か所ぐらいに分けて、白い部分が残らないようにぬります。
- ②その上から黒色のクレヨンを、下の色が見えなくなるまでぬります。
- ③ツマヨウジの裏や粘土ペラで削るように絵をかくと、いろいろな色の絵が浮き出てきます。

☆余白がなくなるまで色を塗ることは、かなり根気が要ります。年齢によって紙の大きさを調整しましょう。また、最後までぬることができるよう、声をかけて励ましましょう。



〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① イエスさまのところに何人の人が来た？ (→10人)
- ② 彼らはどういう病気だった？ (→重い皮膚病)
- ③ その病気を癒されたのは何人？ イエスさまのところに帰ってきたのは何人？ (→10人、一人)
- ④ 帰ってきた人は何をしに戻ってきた？ (→イエスさまに感謝するため)
- ⑤ イエスさまによって本当に救われた人は何人？ それは誰？ (→一人、帰ってきたサマリア人)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 自分で自分を救うことはできる？ (→できない)
- ② 誰が自分を救ってくれる？ (→神さま、イエスさま)
- ③ それでは、自分はもう何もしなくていい？ (→いいえ)
- ④ 何をすべき？ (→神さま、イエスさまに感謝をする)

〈考えてみよう〉

先週は何かいいいことがあったでしょうか。そのことで自分はどう思ったでしょう。自分はすごいと思った？ 自分は運がいいと思った？ あるいは、そのことでお友達に自慢した？ でも、まずは神さまに感謝しましょう。すべてのことは神さまがしてくださったことです。そして、いいことは何もなかったというお友達も、よく考えてみましょう。今、こうして教会に来ていることなど、当たり前のようにしていることも、神さまが恵みをもってそうしてくださっていることなのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。たくさんのよいことを私たちに与えてくださってありがとうございます。何よりもイエスさまを与えてくださってありがとうございます。いつもイエスさまに感謝することができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

主イエスに癒されて、神への感謝と賛美に至った人の物語を通して、信仰が、主の恵みに対して感謝することであるということを伝える。十戒の学びに入る前に、十戒を守る生活の源泉は、神の恵みへの感謝であることを伝える。

〈展開例〉

考えてみよう。

- 重い皮膚病を治められた人たちはどこへ行ったのでしょうか。
- ・10人の内9人は：(治められた) 証明のため(祭司)の所へ行った。
 - ・10人の内の1人は：(祭司)の所へ行く途中から(イエス様)の所へ(戻ってきた)。
- ルカ福音書17章15節。

- イエス様の所へ戻ってきた人は、なぜ戻ってきたのでしょうか。

(イエス様)に(感謝)したから、(神様)を(賛美)しながら戻って来た(15～16節)。

- 残りの9人はどうして戻ってこなかったのでしょうか。

9人の人達になく、戻ってきた人にあつたものは？(イエス様への感謝)。

- 戻って来た人はイエス様から「あなたの信仰があなたを救った」(19節)という御言葉をいただきました。この人の信仰はどんな信仰だったのでしょうか。

- ①イエス様に救われるためには重い皮膚病を自分で治さなければならぬ。
- ②イエス様が治してくださった。だからもうイ

エス様には用はない。イエス様とは関係なく生きていけばいい。

- ③イエス様は私を治めて下さった。だからうれしくて、感謝せずにはいられない。イエス様の所へ行って感謝を表したい。神様は素晴らしいって賛美せずにはいられない。

(もちろん③が正解。①は律法主義、②は無律法主義の考え方。)

- 私達がイエス様からいただいている恵みには、どんなことがありますか。挙げてみよう。

- ・(命が与えられていること、日々の糧が与えられていることなど、さまざまあるでしょう)。
- ・(そして何と云ってもイエス様に救われた事。罪の赦し、復活の希望)

- 私達がイエス様から救われていることを感謝しよう。ではその感謝をどんなふうにあらわしたらよいのでしょうか。私達にもできることがあるでしょう。考えてみよう。

(いつでもイエス様の所に戻る事、礼拝、賛美、祈りの生活。これから十戒を学んで守ること、その他子ども達が考えるように導く)。

〈祈り〉

天の父なる神様、私達はあなたから大きな恵みをいただいています。何よりも、主イエス・キリストが私達のために、救いのお働きをなして下さいました。私達は罪を赦され、天の御国に入らせていただく救いを与えられています。神様ありがとうございます。心から感謝します。私達が神様の言葉に従い、あなたを愛し、人を愛して感謝を表したいと思います。どうか私達が神様に感謝を表すことができるようにして下さい。

【目標】

誰のために信仰を持ち、生活をし、礼拝をするのか、その向かう先を考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→ルカによる福音書17章11～19節を生徒と読む。

【ポイント】

皮膚病を患っていた10人は皆、主イエスに憐れみを求めたが、癒された後に戻って来て主に感謝をささげたのは一人だけだった。自分の願いがかなえられたらそれで終わりなのか、それとも自分が受けたものを神様にお返しする、神様に栄光を帰するというところまで神様から目を離さずに進むのかという点が問われている。これは結局、誰のために生きるのか、誰のために世界は回っているのかという問題に行きつく。御自身のために世界を回す力と権威をお持ちの主イエスが、全く私たちのために、生まれて、生きて、そして死んでくださった。そして今こうして私たちを生かしてくださっている。この事実を知るならば、自分自身の事に思い煩うよりも、振り返って主に感謝を

捧げる心が先行するはずである。その至極当然のことをしただけの一人に、主は救いを約束してくださった。そこに感謝はさらに豊かなものとされるのである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「神様に感謝した経験」を生徒と分かち合う。

Q. 教師が神様に感謝できた時、けれどもとらえ方によっては、それを自分の力だと考えるなどして感謝しないということもできる。聖書では10人中、9人が主イエスに感謝しなかった。原因を考えてみよう。

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 神様に感謝した経験はありますか？

Q. 今あなたにできる神様に喜んでいただける感謝のあらわし方とは何だと思いますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤折り

全てのことを感謝すべき恵みとして送ってくださる神様への賛美。感謝し切れないほどの恵みで私たちを包んでくださっている神様に感謝して。

テキスト ヨハネによる福音書21章15～19節

十二使徒のなかでもシモン・ペトロほど、私たちに親近感を与える人はいないだろう。ガリラヤ湖の漁師で「無学な普通の人」（使徒4:13）、婁帯もしていた（マルコ1:30）。しばしばその言動は、イエスの叱責を招いている。誤ったメシア観（マルコ8:33）、の変貌の山での無知（マルコ9:6）など。使徒として活動を始めてからも、その信仰の姿勢についてパウロから非難を受けている（ガラテヤ2:11～14）。失態とともに朴訥とした誠実さも窺われる。ペトロの失態のなかでも特筆すべきは、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と豪語したあと、捕らえられたイエスを見捨てて逃げ去り（マルコ14:50）、イエスの予告どおり、大祭司の中庭で3度も主を知らないと言ったことである（マルコ14:30, 66～72）。ペトロの再召命を記す今回のテキストの背後には、この悲しみと悔悟がある。節を追いつつ御言葉を学び瞑想しよう。

ペトロはいま深い心の傷を負いつつ神妙な面持ちでイエスの前に立つ。「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」との最初の召命（ルカ5:10）から三年間、主とともに歩み訓練を受けてきた。その一切が水泡に帰する思いである。「わたしを愛しているか」という三度の問いかけに、三度の主に対する否認という拭い去ることのできない苦い経験がオーバーラップした。「愛する」というイエスとペトロの言葉が七回繰り返される。アガバオー（イエスの第一、第二の問い）と、フィレオー（その他の五回）という二種類の「愛する」という言葉が使われている。しかしこの二つの語義の相違を論じること、ここでは瑣末なことであろう。むしろ愛についての七回の繰り返しかえしと二つの語彙によって、多様で豊かな概念を持つ愛の再構築がイエスとペトロの間でなされていると考えたほうが良い。しかもそれはペトロの側から人間的に考えるなら、絶望的にみえた。ただ一方

的にイエスのほうから教しと再召命の恵みとしてペトロに迫るものである。ペトロ自身は「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです」というほかなかった。自分のすべては主に知られているので、主の恵みに訴える以外にすべはない。しかしそれで十分である。主の恩寵の勝利は、失態の後の再召命にこそ豊かに示されるものであった。ペトロの言葉に続いて、イエスは「わたしの（小）羊を飼いなさい、世話をしなさい」と言われる。「飼いなさい」は餌を食べさせ養う、「世話をしなさい」は群れを牧する・群れに餌を与えて世話をするという意味がある。牧者が羊に与えるものは良質の餌でなければならない。問題の餌は天からの命のパンであり神の御言葉である（ヨハネ6:22～71参照）。

ところで今まで大失態を犯し、一度はイエスを見捨てて逃げ去ったような人物が、このような大きな務めにつくことができるだろうか。これは今日も牧師・長老・執事や教会学校教師など、教会の働き人に投げかけられている問いである。考えるべきことは、ペトロ自身、迷える羊（ルカ15:1～7）であり、良い羊飼いに命をかけて救われた羊である（ヨハネ10:11）ということである。ここから主に対する感謝と献身が生まれてくる。多く教されたものは多く愛する。多く愛されたものは多くをささげる。これは献身にも献金にも様々な奉仕にもあてはまる。忠実な献身者に求められることは何か。第一にはおのが罪の深さを悲しみ悔い改めること。第二はキリストの教しと救いの恵みがどんなに大きいことか、そして教しの世界に入れられている幸いを十分に味わい知ることである。第三は他の羊を飼うという働きのためには、自分自身が良き羊飼いイエスに養われていることを知るということである。このようにしてペトロ自身も、同じことを後世の人々に伝えたのである（ペトロの手紙一5:1～4）。（中根汎信）

子どもカテキズム

問38 あなたはその感謝をどのようにしてあらわしますか。

答 神さまが聖書を通して明らかにしておられる御心に従うことです。

証拠聖句 サムエル上15:22、ミカ6:8、ローマ3:31,12:2,14:1-10

参考教理問答 『ジュネーブ』129、『ハイデルベルク』91、『ウ信仰告白』16:1,2,
『ウ大教理』91,97、『ウ小教理』2,39

1. 感謝のかたち

どんなにヘタクソな絵でも、かえって後片付けが大変になるようなことでも、幼い子どもたちの感謝のかたちは嬉しいものです。神が、御自分の子どもとなさった私たちからお求めになっていることもまた、同様です。主は、何よりも感謝する心を求めておられます。

神の救いに対する感謝のかたちは、多様です。それは具体的に、教会における様々な奉仕や、信者としての日々の生活のかたちとなって表されます。その際、人によって賜物の違いや置かれた状況の違い、あるいはまたその人の信仰の度合いによって、多様な表現を取ることでしょう。神の救いそのものが、その人にふさわしい多様な恵みをもたらすからです。

ですから、互いの奉仕や信仰生活の優劣を比較したり、ましてそれらを侮るべきではありません(ローマ14:1-10)。キリストは、どのように弱く理解の足りない者のためにも、死んでくださいました(同14:15)。神の国は平和と喜びの国です(同14:17)。大切なのは、皆の感謝を寄せ集め、互いに建て上げられて行くことです。

2. 聖書に現わされた御心

成長するとともに、子どもも次第に頭を使うようになってきます。相手が喜びそうなことをいろいろと思い巡らします。主を愛するようになった私たちもまた、主がお喜びになることを考えるべきです(ローマ12:2)。

幸い、神は、御自分の御心を自ら明らかにしてくださっています。それが、神の言葉である聖書です。しかし、聖書は、神が欲するプレゼントのリストを書き連ねているような書物ではありません。ある箇所にははっきりと神の御旨が記されていますが、理解しにくい所も多々あります。祈りつつ読みまた思い巡らして行く中で、神の御性質とお考えの全体が次第に分かるようになる、そのような書物なのです。

別の言い方をすれば、神様を知りたい、神様のお喜びになることを学びたいと願うたち者に、聖書は自らを開く(啓示する)書物だということです。神の御旨を知ることと神を愛することは、一つのことなのです。

3. キリスト者の服従

ちょうど時を正しく刻ませるために時計が作られたように、人もまた創造者の御意志に従う時のみ、本来の目的に合うものとなります。その意味では、御言葉への服従はすべての人の義務です。

しかし、キリスト者の服従は、それ以上です。そこには感謝があるからです。墮落以前の人間もまた、自ら進んで神の御心を行なっていたことでしょう。しかし、神がどんなに忍耐強く、またどんなに深く私たちを愛しておられたことか、どれほど分かっていたのでしょうか。キリストの救いの愛を知った私たちは、主への感謝に満ちた愛によって従います。多くを教された者は、多く愛するのです(ルカ7:47)。 (吉田 隆)

テキスト ヨハネによる福音書21章15～19節
カテキズム 子どもカテキズム問38

(単元のねらい)

この聖書箇所には、物語そのものに感動が宿っているので、教師がまず感動し、付け足しをせずそのまま語り、聖書の感動を子供たちに伝えて頂きたい。今回の説教を、何故自分が教師をしているのかを考えながら、教師に自分の為に続んでもらいたい。復活のイエス様とペトロとの会話をどう説明しようかと考えるまえに、その二人の会話に自分が巻き込まれていく経験を説教準備においてして頂きたい。その備えがあれば、聖書を単純に語っても届く言葉となることを信じている。

「感謝して、イエス様に従う」

ペトロは、イエス様が十字架に架けられる直前にイエス様を知らないとして三度否みました。自分では、死んでもイエス様に従う覚悟を固めていたのですが、イエス様を否んでいる自分と出会いました。イエス様が逮捕された時、ペトロは、イエス様を案じているつもりでしたが、気付いてみれば、死んでもしたくなかったことをしていたのです。それも、自分の口と言葉で誓うかの如くにしっかりと否んでいたのですから、弁解の余地はありません。また、ペトロのこの失態は、イエス様の目に留まらぬ、隠れたところでなされたものではありません。イエス様によって預言され、予め知られていました。そして、イエス様は、否んでいるペトロを見ておられました。ペトロは、一番見られたくない場面で、イエス様と目と目が合いました。

復活されたイエス様は、ペトロと再会されました。そこで、イエス様は、三度「わたしを愛するか」とペトロに問い掛けられました。ペトロは、三度「愛します」と答えます。この三度のやり取りは、ペトロの三度の否みと対応していると思われる。ペトロは、三度も同じ問いをイエス様から受けて、悲しくなりました。「愛しています」と一度言ったら、それで自分の愛が伝わるかと思っていたのに、三度も同じ問いに答えねばならなかったからです。

ところで、ペトロの答えを丁寧に読みますと、ペトロはイエス様の問い掛けに、「ハイ、愛しま

す」と直接、答えていません。ペトロの答えを直訳すれば、強調点は、自分が愛しているということよりも、そのことをあなたご自身がご存知であるという点にあります。ペトロの悲しみを表すなら、「あなたは、あなたを愛している私の心を知りながら、何故、三度も問い続けるのですか」となるでしょう。

ここにおいて、大きな信仰的な進歩をペトロに見ることができます。以前のペトロなら、必死で断言して、「私は、何があってもあなたを愛します」と叫んでいたことでしょう。しかし、ペトロは、今は自分の弱さも知り、また、自分が三度否むことを、イエス様は否む前からご存知であったことを体験的に知りました。そして、復活の主イエスとの出会いのなかで、イエス様は三度否んだペトロを赦しておられることを知りました。ペトロはそのようなイエス様を、今、以前にも増して、悔い改めをもって愛しています。そして、ここで大切なことは、否むであろうことをご存知であった主イエス・キリストが、今度は、イエス様を愛してペトロをもよくご存知であるという確信が、ペトロの中に宿っていることです。

では、何故、イエス様は三度も同じ質問をされたのでしょうか。ペトロの「あなたを愛します」という答えを引き出し、そのうえで、「わたしの羊を飼いなさい」と語り出すためではなかったかと思われ。イエス様は、ペトロが深く傷つき、

自分はもはや教会の指導者にはなれないと言い出す程、落ち込んでいることを心配されたのです。ペトロは、個人的には身を引いて、隠れたところで、イエス様を愛して生きようと思っていたのかもしれません。

しかし、イエス様は、「わたしを愛していることが確かであるなら、わたしの羊の世話をしなさい」とペトロを召し出してくださいました。このように解釈するなら、三度の問い掛けは、ペトロは、一回「わたしの羊を飼いなさい」と言われただけでは、まだ、対応できない弱さを抱えていたからだと思われる。「あなたを愛していますが、わたしのような者に、あなたの羊は飼えません」という応答がペトロの心から消えるために、イエス様は繰り返し促されました。イエス様を愛していることとイエス様の羊の世話をすることが、一つの事柄となるのに、三回のやり取りが必要だったのです。

ペトロは、このやり取りを通して、直接イエス様を愛するのではなく、イエス様が愛しておられたイエス様の羊の世話をすることによって、イエス様への愛を表すように召し出されました。このことは、教会の教師や指導者がどのような器であるかを、明確に指し示しています。教師になるとは、決して名誉職に就くことではありません。教会の教師・指導者に求められる資質は、イエス様を愛していることです。ここで、自分こそイエス様を誰よりも愛しているという自意識をもつとすれば、かえって奉仕の妨げとなります。自分がどれ程イエス様を愛しているかを自分で吟味するのではなく、「あなたをご存知です」とイエス様に委ねることが大切です。すべてを知ってくださる主イエス・キリストが、イエス様の羊を飼うように託してくださるのです。そして、私たちは、イエス様の羊を愛することによって、私たちはイエス様をどれ程愛しているかを、日々、証しするように招かれています。

この物語は、更に展開します。イエス様は、三度の問いかけの後、急にペトロの晩年の働きに言及されます。帯を締めるとは、神様から託された仕事に取り組むときの洋服の備えです。それは、心の身支度をも表しています。ペトロは、若いときは自分で帯をして自由に行動できますが、晩年には人の手を借りることになります。ここで、イエス様は、死に方を示しておられます。両手を広げるとは、初代教会では、十字架の徴でした。ペトロは、晩年において、十字架で死ぬという預言を受けたのです。

この殉教の預言を、ペトロは悲しい思いで聞いたでしょうか。そうではないと思われます。ペトロは、感激して聞いたのではないのでしょうか。以前、たとえ死んでも従いますと語ったとき、イエス様から本当は従えないことを見抜かれていました。今回は、イエス様が、ペトロは人生をかけてイエス様に従いきる人物であることを語ってくださいました。イエス様に知られていることを知っているペトロは、殉教の死の預言を聞いて、今回はイエス様の見守りの内に最後までお従いできることを、確信したことでしょう。

この物語の締め括りの言葉は、「わたしに従いなさい」です。ペトロは、最初にバプテスマのヨハネの紹介でイエス様にお会いしたとき、すぐに従う者となりました。ですが、イエスに従う道は、十字架によって中断されました。しかし、イエス様の復活を契機に、改めて、イエス様のほうから、イエス様に従う道を再度開いてくださいました。今回は、イエス様とペトロとの個人的な関係における服従ではなく、イエス様の羊を飼うことによって、イエス様に従う道です。これは、ペトロ個人の物語ではありません。イエス様に罪赦された者は、その感謝を兄弟姉妹との関わりにおいて表すべく召されています。イエス様への感謝は、必ず、イエス様から与えられる職務への服従となって表されます。(岩崎 謙)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書21章19節

ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、

イエスはこう言われたのである。

このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

〈ねらい〉

主イエスへの感謝と献身に生きることに、喜びに生きる道があることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、今日、「ありがとう」を言いましたか？ 誰に言いましたか？ 思い出してみてください。お父さんやお母さん？ 兄弟？ お友達や先生に言ったかもしれませんね？ では、どうして「ありがとう」を言ったのでしょうか？ 何かをもらったから？ 親切にしてくれたから？

あなたのために何かしてくれたから・・・？
「ありがとう」は感謝の言葉です。あなたがうれしくなるようなことをしてくれた人に対して自然に出てくる言葉ですね。でも、わたしたちの感謝の気持ちは「ありがとう」というだけでは足りないと感じる時がありませんか？ 私をこんなにうれしい気持ちにさせてくれた人に今度は私が何かをしてあげたい、喜ばせてあげたいと思うことがありますね。

天の父なる神さまは、私たちをいつも守ってくださり、食べるものや着るもの必要なもの全てを備えてくださいます。私たち一人一人を深く愛してくださって、私たちの悪い心「罪」を赦してくださるのです。そんな神さまに「ありがとう」を言いたいですね。そして、神さまを喜ばせてあげるために何かしたくなりますね。どうしたら神さまは喜んでくれるのでしょうか。それは、神さまの「御心に従う」ことです。「御心」とは神さまのお考えです。神さまが考えておられることは、聖書に書かれています。みなさんはまだ聖書を読むのは難しいですから、教会学校にきて先生のお話を聞くことが、神さまの御心を知ることになるのです。

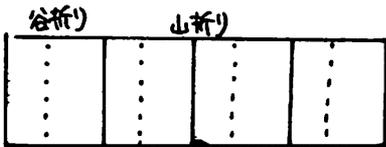
〈お祈り〉

天の父なる神さま、神さまのお恵みに感謝して、喜んで神さまに従うことができますように。イエス様のとうといお名前によっておいのりします。アーメン。

☆聖句（絵）カード☆

○用意するもの
画用紙、はさみ

♪作ってみよう 「聖句（絵カード）」 用意するもの：紙 はさみ



長い紙をジャバラ折りにする



表に人型を描き切る



顔や洋服を書いたり
聖句を書き入れたりとよいですね

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ①ペトロはこれまで失敗することなくイエスさまに従ってきた？（→十字架のときに裏切ってしまった）
- ②そのときイエスさまのことを何回知らないと言った？（→三回）
- ③ここで復活されたイエスさまは、ペトロに何回「愛しているか」と聞いた？（→三回）
- ④ペトロはイエスさまを愛している？（→愛している）
- ⑤「わたしの羊を飼いなさい」とはどういう意味？（→イエスさまを信じる人たちを守ること）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①神様の御心は何に書いてある？（→聖書）
- ②私たちは聖書を読むだけでいい？（→読んで従う）
- ③ただ従えばいい？（→感謝して従う）

〈考えてみよう〉

大きな失敗をしてしまったペトロが、ここでもう一度イエスさまに声をかけられ、しかも大切な仕事を与えられました。ペトロはどんな気持ちだったのでしょうか。考えてみましょう。私たちも失敗することがあります。でも、イエスさまは私たちをいつまでも深く愛してくれます。感謝してイエスさまを信じて従いましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。ペトロを赦してくださったように、私たちの罪も赦してください。そして、感謝してイエスさまに従えるようにしてください。私たちに何ができるか、聖書を通して教えてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。



〈ねらい〉

主イエスを否定するという、主を裏切る罪を犯したペトロが、復活の主に教され、しかも教会の指導者として召される。罪の赦しと召しに、ペトロは感謝して従った。生徒達自身が、主に教され、主に従うよう招かれていることを知ること。そこには主のあわれみに対する感謝の応答がある。

〈展開例〉

考えてみよう。

- ペトロはイエス様から「あなたがたは皆わたしにつまずく。」といわれたとき、どんなふうに答えましたか。マルコ福音書14章29節を読んでみよう。
- ここから、ペトロがイエス様に従うことについて、絶対（大丈夫）って、（自信）をもっていたことが分かりますね。
- イエス様が捕らえられたとき、弟子達は怎么样了でしょうか。
イエス様を（見捨て）て（逃げてしまった）（マルコ福音書14章50節）。
- イエス様は大祭司の所へ連れて行かれましたそのときペトロはどこへ行ったでしょうか。（マルコ福音書14章53～54節）。
- その後、ペトロは自分でも思いもよらなかった事をしてしまいます。どんなことだったでしょうか（マルコ福音書14章66～72節）。
- 十字架にかけられ、死んで復活された主イエスがペトロに会って下さいました。今日の説教の場面です。このときのペトロの気持ちを考えて見ましょう。（まだ他の人はつまずいても、自

分は大丈夫と自信をもっていたでしょうか。もう言えなくなっていましたね。それどころかペトロは、自分はもうイエス様の弟子として失格だと思っていたかもしれませんね。）

- 主イエスはペトロをどうなさったでしょうか。ペトロを赦さず、弟子として失格であると言われてたでしょうか。
（ペトロを赦し、教会の働きをする人に立てて下さった。ペトロをもう一度イエス様の弟子として立ち直るようにして下さい。イエス様の教会の働きをするようにされたのでした）。ヨハネ福音書21章15～19節。
- ペトロがこの後教会で働くことができたのはどれのおかげでしょうか。ペトロがイエス様にお詫びして償ったからでしょうか。自分で立ち直るためにがんばったからでしょうか。そうではありません。イエス様が大きな罪を犯したペトロを赦し、主の働きのために召されたからです。
- 赦されたペトロに求められたことは、イエス様の言葉に従っていくことでした（ヨハネ福音書21章19節）。
- イエス様に救われた私達に求められていることは感謝してイエス様の言葉に従っていくこと。

〈祈り〉

天の父なる神様、あなたはイエス様を3度も否定したペトロを赦し、あなたの御用のために立てられました。あなたは私達の罪を赦し、あなたの言葉に従うように求めておられます。罪深い私達を見捨てることなく、あなたの御用に立てて下さいます。ありがとうございます。どうか私達を、あなたに感謝して御言葉に従う人にして下さい。

【目標】

主への感謝は主への愛を生み、それは具体的な服従を伴うことを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→ヨハネによる福音書21章15～19節を生徒と読む。

【ポイント】

ペトロの感謝と愛と服従のあり方に目を留める時に、それらは捉え易くなる。まずペトロの感謝は、自分が主イエスを裏切ったにもかかわらず、主が彼に再び目を留めて下さっていること、愛についての問いかけによって彼の主への愛を呼び覚ましておられることから生じる。主イエスを愛せなかった者、裏切った者、失敗した者を、しかし主は見放されないのである。ペトロは感謝した。それと同時に主は彼に従う道を示された。しかも御自身の羊を飼うというとても重要な務めを任せてくださった。ペトロは主から信頼を受け、愛された。その時には自然にペトロからも愛が生じる。愛は信頼に答えようとペトロを動かし、主に服従してゆくことをこの上ない喜びとするのである。感謝は、それが具体的に相手に伝わった時に相手

を喜ばすが、それは神様との関係においても同じである。神様はいつも私たちを見ていてくださり、たとえ言葉にならない私たちの感謝にさえも目を留めて喜んでくださる。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「ペトロと同じような経験」を生徒と分かち合う。そして教師自身にとっての神様への感謝の捧げ方とは何か？

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 好きな人、愛する人、大切な人に感謝を伝えたい時、どうしますか？

Q. では神様に感謝を伝えるにはどうすれば良いですか？

その時聖書は役に立ちますか？（次週への伏線）

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

主がペトロに目を留められたように、私たちにも目を留めてくださること、それぞれに素晴らしい感謝の道を備えてくださっていることへの感謝。この御言葉を受けて歩み出す私たちの一週間を主が喜んでくださるように。

テキスト 申命記6章16～25節

〔人間の罪の本質〕

主なる神様は、エジプトにあって奴隷の状態にあったイスラエルの民を解放し、救い出して下さいました。しかし、エジプトを脱出し荒れ野に入ったイスラエルの民は、食料が十分に食べられないため、エジプトの国で奴隷のまま、死んだ方が良かったと、モーセとアロンに向かって不平を述べ始めました（出エジプト16：1-3）。すると主は、イスラエルの民に対してマナとうずらをお与え下さいました（同16：4-5, 13, 31）。しかしイスラエルの民は、続けて「我々に飲み水を与えよ」と不平を言い始めました（同17：2）。すると主はモーセを通して、イスラエルに水をお与え下さったのです（同17：5, 6）。そして、モーセはこの場所をマサ（試し）と名付けました（同17：7）。主が全てをお与え下さることを信じることなく、主を試そう（マサ）とすることは、罪を有する人間の本质そのものです。

〔すでに与えられた救いとこれから与えられる約束〕

しかし主は、イスラエルに対して「主を試して（マサ）はならない」と命じておられます（16）。そしてさらに、「主が命じられた戒めと定めと掟を守」るよう、求めておられます。これは約束の地カナンに入る直前に改めてモーセによってイスラエルの民に語られた十戒を忠実に守ることです（申命記5：1-21）。

十戒は、序文で語られているように、すでに、主がイスラエルをエジプトの国、奴隷の状態から救い出して下さった事実に基づいています。そしてその事実を受け入れ、主への信仰を言い表して、感謝を持って主に聞き従うことにより、これから与えられようとしている約束の地カナンに入ることもまた、主がお与え下さる約束の成就として受け入れることが出来るのです（18）。それは、カナンに住んでいる先住民である他の民たちを、主

が追い払って下さることによって成し遂げられることを信じることをも意味します（19）。

つまり、イスラエルの救いを私たちに重ね合わせてみますと、私たちが主なる神様のお語り下さる命令に服従するのは、すでに与えられた救い（主イエスによる十字架の贖い）に対する感謝の思いと共に、やがて与えられる約束（神の国）を確信しているからです。

〔子どもへの伝達〕

そして続けて、この主が命じられた戒めと定めと掟をなぜ守らなければならないかを、子どもたちに教えるように語ります。聖書はこの命令を、繰り返し語って来ています（出エジプト記10：2, 12：26, 13：8, 14, 申命記4：9, 6：7, 11：18-20, 詩編78：4-6）。人間は、与えられた恵みや豊かさを、その時は喜んだとしても、時が過ぎれば忘れてしまいます。そして、欲望が出て、不平・不満ばかりを持つようになります。

だからこそ、主なる神様がお与え下さった救いと恵みと喜びを、さらに約束されている神の国の確信を、子どもたちに対して、繰り返し語り伝えることが求められるのです。繰り返し教えられることにより、主なる神様への信仰と、その主がお語り下さる戒めと定めと掟を感謝をもって聞き従うものとなるようにされていくのです。しかしながら、ここで既に与えられた救いと恵み、約束されている神の国の祝福を語ることなく、戒めと定めと掟のみを教えることは、主なる神様を信じるのが、苦しみと重荷となり、信仰の本質を歪めてしまいます。そして律法学者やファリサイ人たちがそうであったように、戒めと定めと掟を守ることによって、神様が救いを与えて下さるといって、誤った信仰を伝えていくこととなります。

（辻 幸宏）

カテキズム 子どもカテキズム問39

子どもカテキズム

問39 神さまの御心の、明らかにされた規準はどこにありますか。

答 十戒の中にあります。

参考教理問答 『ウ小教理』40,41、『ウ大教理』93-98、『ハイデルベルク』92

問37から第三部「生活の道」に入りました。これまでの第二部「信仰の道」で、「福音」つまり「罪からの救い」を見てきたわたしたちは、これからはこの神の恵みに対して、どのように応えていくかが求められていきます。神の恵みに対する感謝の応答、それが信仰生活です。ですから、それは律法でも義務でもない、わたしたち自身からほとばしり出てくる神への感謝と賛美なのです。ここでいわゆる律法（その中心が十戒）が、福音（それは使徒信条に要約される）の「後」に置かれていることに注意してください。ここに改革派信仰が顕著にされています。改革派信仰によれば、「律法から福音」なのではなくて、「福音から律法」なのです。ここでは律法の位置づけが変わります。それは人間を断罪し、恐怖と混乱におとしめるものではなくて、人間の生きる道筋です。律法によって罪に絶望して人間が、キリスト（福音）へと追いたてられていく（律法の第二用法、ウ信条の区分による）というだけなのではなくて、福音によって生きる者とされ、神の恵みによって救われた者が、どのようにして神への感謝を表わすかという、神への感謝の捧げものとして生きていく生き方の道筋として与えられたということです（第三用法）。

ここにわたしたちの「善い行い」があります。それは、この善い行いを功績として、その報いとして自分の救いを勝ち取るということではなくて、先に神の救いがあり、救われた者として、神への感謝と賛美のうちに、神の御心に応えていこうと

するあり方です。「それは、わたしたちがその恵みに対して、全生活にわたって神に感謝を表わし、この方がわたしたちによって賛美される」ということです（ハイデルベルク問86）。わたしたちが喜び感謝して救いの人生を歩むこと、それが神の栄光を表わすことに他なりません。そしてそこでこそ、「わたしたちの隣人をもキリストへと導く」ことができるのです（同）。これからの第三部で語られていく「感謝」とは、具体的には「十戒」と「主の祈り」に生きることでありますが、それによって、わたしたちは心からの感謝と賛美を神へと捧げ、その喜びの中で生きることによってその祝福にあずかりながら、恵みの中で生きていくことができるのです。

ですから、これから学んでいく「十戒」とは、「神さまが聖書を通して明らかにしておられる御心」（問38）であり、そこで明らかにされた「規準」でした。そして「神さまがわたしたちに求めておられる」ことのすべては、ここに示されています。その「御心」とは、わたしたちが「感謝して生きる」ということですが、その具体的な姿を示したのが、「十戒」なのです。そしてこの「十戒」は、神の一方的な恵みと憐れみによって救われたわたしたちが、神への感謝の捧げ物として果たす『善き業』の指針として与えられたものでした。神への感謝の捧げもの、神の恵みに対する感謝の応答の指針として与えられた「律法」の中心、本質こそ、「十戒」なのでした。（三川栄二）

テキスト 申命記6章16～25節
カテキズム 子どもカテキズム問39

(単元のねらい)

キリストを信じる者は、神の救いの恵みへの感謝の応答に生きる。その感謝の生活の指標として十の戒めが授けられていることを確かめたい。

「神の恵みを覚え続ける」

みなさんは十戒を知っているでしょう。教会学校の礼拝のたびに唱えている教会もあります。『子どもカテキズム』にも十戒は記してあります。昔々のイスラエルの民に神さまが授けてくださった十の戒めですね。ちなみに、イスラエルの民を代表してこれを神さまから受け取ったのが、皆さんもよく知っているモーセさんです。

ところで、十の戒めに先立って、神さまのみ言葉の語りかけがあることに気づいていましたか。こういう語りかけです。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」

ここには、神さまがイスラエルの民にしてくださいましたすばらしい救いのみわがが語られているのです。昔イスラエルの人々は故郷を遠く離れたエジプトという国の奴隷となっていました。奴隷ですから、がんじがらめにしばられて、自由がありません。毎日過酷な労働を強いられて、イスラエルの民からは苦しみの叫びがあがっていました。

しかし憐れみ深い神さまは、くすしいみ手を伸ばしてイスラエルをエジプトから救い出してくださいました。奴隷となっていたイスラエルを自由の身としてくださったのです。それは神さまの愛によることでした。

つまり神さまは十戒の最初のところで、イスラエルの人々に、ご自分がなされた救いのみわが—エジプトの国、奴隷の家からときはなつて自由の身としてくださったそのみわがを、あらためてたからかに宣言なされたのです。これは愛の宣言です。イスラエルよ、わたしはあなたを愛している、

だからこそあなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出したのだ—神さまはまずそのようにお語りになったのです。

その愛の宣言の後に、十戒のひとつひとつの戒めが続くのです。それはどういうことでしょうか。神さまがまずイスラエルの民を愛してくださいました。だから、イスラエルの民も神さまの愛にこたえて生きるのだということです。神さまから与えられた十の戒めに聞き従って生きることで、イスラエルは神さまの愛にこたえ、神さまへの愛をあらわすのです。

イスラエルの人々はこのエジプトでの救いのみわがを、その後いつまでも覚え続けました。わたしの恵みを忘れずに覚えていなさいと神さまがおっしゃったからです。時がたって、子どもや孫たちの時代になると、イスラエルのなかにもあのエジプトでの出来事を知らない人々が増えてきます。神さまが恵み深いお方だということを忘れてしまって、神さまから離れてしまう人々も出てくるかもしれません。

だから、礼拝をささげるたびに、十戒を唱えるたびに、このみわがを思い起こす必要があったのです。それから、子どもたちが十戒の意味について尋ねてくることがあるかもしれません。そのときにはお父さんやお母さんが、あのすばらしい恵みのみわがについて、そこに示された神さまの愛について、また十の戒めを守り行つて生きることこそが神さまの愛におこたえることで、そうするときに人は命を得るのだということをきちんと教えなければならなかったのです。

十戒は昔のイスラエルの民たちだけに与えられている戒めではありません。私たちのひとりひとりにも与えられている愛の戒めです。

神さまがイスラエルをエジプトからときはなされたことは、イエスさまが私たちのためにしてくださったすばらしい救いのみわざを先取りするものでした。神さまは小羊の血を目印にして、奴隷となっていたイスラエルの民を自由の身とされました。同じように、神さまはひとり子イエスさまを私たちの罪を贖う犠牲の小羊として十字架に死

なせることによって、罪と死の奴隷となっていた私たちをときはなち、自由の身としてくださったのです。

十戒の序文を読むたびに、私たちはイエスさまの十字架の贖いと、よみがえりの命のみわざを思い起こします。そして昔も今も、永遠にかわることのない神さまの私たちへの愛を確かめるのです。そして私たちも十の戒めのひとつひとつに聞き従うことによって、神さまの愛と恵みにこたえて生きるのです。
(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 詩編103編2節

わたしの魂よ、主をたたえよ。

わたしの内にあるものはこそって聖なる御名をたたえよ。

〈ねらい〉

十戒は神から神の民への愛の贈り物、愛の言葉である。神の愛にこたえて生きることを教える。

〈展開例〉

みなさんは「交通ルール」というのを知っていますか？ 赤信号では止まりましょう、とか、自動車は左側を走ります、とか他にも色々ありますね。もしも交通ルールがなくなってしまうらどうなるでしょう？ 交差点で車がぶつかってしまったり、みんなが好きなように猛スピードで車を運転したり、安心して道路も歩けなくなってしまうですね。みんなが困ってしまうでしょう。「交通ルール」だけではありません。幼稚園やみんなのおうちでも、「きまり」や「約束事」がありますね。みんなが仲良く、安心して暮らせるように作られたのが「ルール」や「きまり」です。

人間が自分たちのために作ったきまりやルールは、昔も今も、ものすごくたくさんありますが、そのどれよりも大切なきまりがあります。それは神さまが私たちのために与えてくださった十の戒

め、「十戒」といわれるものです。

私たちは皆、心の中に悪い思い「罪」を持っています。そのため全ての人は、希望もなく、まるで真っ暗闇の中をさまよっているようでした。しかし、神さまは私たちを愛してください、私たちの「罪」をなかったことにしてくださいました。その上、永遠の命を約束してくださいました。真っ暗闇の中でどうすることもできなかった私たちに、神さまの大きな愛の光が照らされたのです。なんてうれしいことでしょう。さあ、神さまの愛の光に照らされた私たちは、どのように生きていくのでしょうか。それを示してくれるのが、「十戒」です。神さまのお恵みに感謝して、神さまの子どもとして生きていく生き方を教えてくれるのが「十戒」なのです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、十戒によって、神さまにしたがっていく生き方を教えてくださいありがとうございます。イエス様のとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

☆バクバク人形☆

◀ バクバク人形 ▶

用意するもの：紙コップ、書くもの、はさみ

① 白い紙コップに、2ヶ所切り込みを入れる

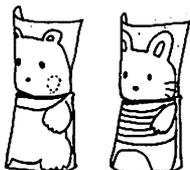


※底に穴をあけたいよう
下までいかに
切りましょう♡

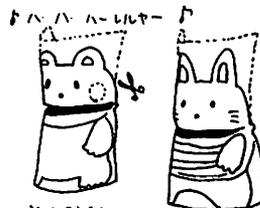
② 中央から折りまげる。



③ コップの底が口になります。顔やキョウマ-も書きます。



④ 裏側から手で持ってバクバクと動かしてね♡



♪ 一緒にさんぽると
楽しいね ♪

☆ 上側だけ
切り落としてもいい。
☆ 切らなくても大丈夫

☆ 手ペリやさい時は
コップを子持ちとしたいよ

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ①神さまがイスラエルに与えてくださった十の戒めを何と言う？(→十戒)
- ②それは、どういう出来事の後で与えられた？(→出エジプト)
- ③イスラエルの民をエジプトから脱出させた指導者は誰？(→モーセ)
- ④イスラエルの民は、神さまの戒めをきちんと守った？(→守れなかった)
- ⑤それはどうして？(→出エジプトの感謝を忘れたから)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①私たちが従うべき神さまの御心は何に書いてある？(→聖書)
- ②その中で、特に行うべき大切な戒めとして与えられているのは何？(→十戒)
- ③十戒は聖書のどこに出てくるか知っている？(→出エジプト記20章、申命記5章)

〈考えてみよう〉

イスラエルの人たちは、どうして神さまへの感謝を忘れてしまったのか、考えてみましょう。その後の旅が辛いものだったからではないでしょうか。うれしいことがあっても、その後にいやなことがあると、そのいやなことばかりが心に残ってしまい、感謝を忘れることがないでしょうか。先週、どんなことがあったか思い出し、話し合ってみましょう。そして、すべてのことを神さまに感謝し、神さまに従っていきましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちがいつも神さまに感謝をすることができますように。そして、私たちを愛してくださる神さまを、私たちも愛して、心から感謝して従うことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

主の言葉に従う（主の御心に従う）ことの具体的な指針として十戒が与えられている。十戒が与えられたいきさつを理解すること。十戒はエジプトの奴隷の家からの解放という救済の事実に基づいている。従って十戒を守ることは救済の事実を覚え続けることになる。このことを理解する。私達にとっては主イエス・キリストによる救いの恵みを覚え、感謝を表すことである。

〈展開例〉

考えてみよう。

○十戒には十の戒めがあります。でもその前に大切な言葉があります。どんな言葉でしょうか。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」
（序文）（出エジプト20章2節）。

○ここには、どんな風にして十戒が与えられたかが書かれています。それはどんな物語だったでしょうか。

（エジプト）で（奴隷）として苦しめられていた（イスラエル）の民が、神様によって助け出されてエジプトから（脱出）し、途中の（シナイ山）で神様から与えられたのが十戒。

○神様はこの十戒を守るようにイスラエルの人々にお求めになりました。では何のためにイスラエルの人達は十戒を守るのでしょうか。

①エジプトから救われるため

②神様から愛されるようになるため

③神様から愛され、神の民とされたこと、エジプトから救われたことの感謝をあらわすため。
（もちろん③が正解）

○十戒はイスラエルの人達だけでなく、私達にも守るように求められています。では、どうして私達は、十戒を守るのでしょうか。

①イエス様に罪を赦していただいて救われるため。

②イエス様に救われたから、神様へのありがとうという感謝を表すため。

②ですね。これから十戒を学んで神様に感謝を表しましょう。

〈祈り〉

天の父なる神様、あなたはイスラエルの人達をエジプトでの奴隷の苦しみから救い出し、十戒をお与えになりました。ちょうどそのように、私達のために、イエス様をお送り下さり、私達を罪と、永遠の刑罰から救い出して下さいました。そして天の御国に入れていただくようにされています。ありがとうございます。このうれしい気持ちをあなたに表したいと願っています。この感謝をどうやってあらわしたらよいのでしょうか。あなたはそのため十戒を与えて下さいました。私達はこれから十戒を学び、これを守る事を通して、救われたことを忘れず、あなたに感謝をしていきたいと思えます。どうか私達が、十戒を守るように励ましてください。

【目標】

神様への感謝の道筋は、神様からの愛の証しである序文を含む十戒に具体的に示されていることを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→申命記6章16～25節を生徒と読む。

【ポイント】

24節で「今日」という言葉が語られるが、ここで、イスラエルの民に「今」という時が与えられているという事実は奇跡であった。40年間という期間、膨大な数の民、砂埃の舞う荒野での放浪、様々な国民との衝突にも関わらず、この民は全ての困難を乗り越えてここまで来た。モーセはこのことを忘れるなど語る。この「今日」という言葉は私たちにも当てはまる。私たちが「今日」生かされているということ。この事実は、私達が一瞬の間も、主から切り離されることなく、守られ、支えられ続けてきたことの奇跡を証している。またこの私たちに今後があるならば、それはこの「今日」を与えてくださった神様の掟と法に従って生きることとひとつである。神様の掟と法は十

戒に明示された。いつも肌身離さずその教えを守り自分自身に注意すること。これが神様が喜んでくださる感謝の道、希望の将来を開く道しるべ、また悪から遠ざかるための防御壁であると教えられている。

他人に迷惑をかけないため、秩序維持の目的で設けられている校則や法律などの他の定めと、十戒の本質的な相違を考えてみるのも興味深いことかもしれない。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「十戒」とは何かを生徒と分かち合う。

Q. 十戒と聞いた時どんなイメージを持ちますか？

Q. あなたにとって十戒とは、それを守ることとは、校則を守ることと同じですか？

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. この御言葉を聞いた者として、これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤折り

感謝と服従の素晴らしい道である十戒が与えられたこと。この十戒に従って、今週も神様に守られて歩むことができるように。

テキスト マルコによる福音書12章28～34節

〔律法学者〕

主イエスの時代、旧約聖書において本来教えられていた律法以外にも、多くのものが付け加えられ、膨大な量の戒律が存在し、その研究と解釈が重要な仕事となり、律法学者たちは、その働きを行っていました。そして彼らの多くは、戒律を守ることににより、救いが与えられるとの信仰を持っていました。

そのような状況の中、一人の律法学者は、主イエスの復活に関する適切な答えを聞いて、主イエスに「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」(28)と質問します。彼のこの質問により、当時の律法学者たちが、旧約の時代に主がお語り下さった律法の中心的事柄を、すっかり忘れていた事実を知ることができます。しかし同時に彼の探求心は、律法の専門家として、律法を学び続けている律法学者の姿を映し出しています。

〔二つの掟〕

律法学者の問いに対して、主イエスは二つの答えを語られます。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない」(29-31)。前者は申命記6:4,5の引用であり、後者はレビ記19:18の引用です。

しかしながら、この二つの掟を貫いているものは、同一であることを忘れてはなりません。それは、唯一の主なる神様がおられことです。そして、その神様が私たち人間を愛して下さっていることです。そして神様が、罪人である私たち人間を救いに導いて下さるお方であることです。

このことを私たちが理解した上で、私たちは救

いをもたらして下さる唯一の主なる神様に対してどの様な行いをとるべきであるのか、また主の愛に満たされている全ての隣人との間で、どの様に交わりを行えばよいのか、その根本的な答えが、主イエスによってなされたのです。

〔十戒の要約〕

そしてこの二つの掟は、同時に十戒の要約でもあると言われます(子どもカテキズム問40)。つまり第一の掟が十戒の第一の板の要約であり(参照:ウェストミンスター大教理問答問102)、第二の掟が十戒の第二の板の要約(同122)となります。

つまり、第一の掟である「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」を實踐していこうとすれば、十戒の第一戒から第四戒の言葉を心から實踐していく者とされていくのです。そして、第二の戒めである「隣人を自分のように愛しなさい」を實踐しようとするならば、第五戒から第十戒までの言葉に心から従う者とされていくのです。

従って、この二つの掟を覚えることにより、十戒を単に形だけでも守れば救われると言った形式的な信仰・律法主義に陥ることを防ぎ、行いと言葉と思いをもって主なる神様を愛し、隣人を愛して、行動するものへとされて行きます。

〔律法学者の態度〕

律法学者は、「先生……」(32)と語ります。初めに質問した時には、主イエスに対して試そうとしているようでしたが、ここでは主としての権威を受け入れています。また彼は「……どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」と語るにより、形式的な律法の服従が誤りであることを認める者とされているのです。

(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問40

子どもカテキズム

問40 イエスさまが教えてくださった十戒の要約は何ですか。

答 「わたしたちの神である主は、唯一の主である。

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、

あなたの神である主を愛しなさい」と、

「隣人を自分のように愛しなさい」です。

神と人への愛、二つで一つの愛に生きることです。

参考教理問答 『ウ小教理』42、『ウ大教理』98、『ハイデルベルク』93

「十戒」は、二枚の板に記されました。ですからそれは、神に対する二重の義務として分類することが出来ます。主イエスは、十戒のみならずそれに代表される律法全体を、「二つの愛の戒め」に要約されました。「律法と預言者」、つまり旧約聖書全体は、この神への愛と隣人への愛の「二つの愛の戒め」にまとめられると共に、それこそが全律法の本質であり中心であることを明らかにされました。ここで大事なのは、神が人間に求められた義務とは、かくあるべしとか、何々をしてはならないといった事柄ではなく、「愛する」ということだということです。「神を愛し、隣人を愛する」、それが神がわたしたちに求めておられることの全てだということです。

しかしさらに、この二つの愛の戒めは「ただ一つの戒め」に要約されていきます。「永遠の命」について尋ねた若者に向かって、主は「掟を守る」ことを求められ、それを「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また隣人を自分のように愛しなさい」という掟に要約されました(マタイ19:18,19)。つまり「神への愛」は、「隣人への愛」において具体化され、具現されていく。それを受けてパウロもこう勧めることができました。「互いに愛し合うことのほがは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほか

どんな掟があつても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです(ローマ13:8-10)と。つまり「神を愛する」と「隣人を愛する」という二つの愛の戒めは、結局「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されるということです。

だからヨハネは、「『神を愛している』と言いながら、兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛するべきです。これが神から受けた掟です」と語りました(ヨハネ4:20,21)。だから、主がわたしたちに求められることも同じでした。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(ヨハネ13:34,35)。主の弟子であることは、主の教を熟知しているとか、信仰年数が長いとか、熱心に奉仕しているということではなく、「互いに愛し合う」ことだと言われました。互いに愛し合っていることが、主の弟子のしるしであり、それによって周りの人々はわたしたちが主の弟子であることを知るに至ると言われたのです。(三川栄二)

テキスト マルコによる福音書12章28～34節
カテキズム 子どもカテキズム問40

(単元のねらい)

十戒の十の戒めが、神への愛と人への愛の戒めに要約されることをあらためて覚えたい。そして、このふたつの愛の戒めに生き通された主イエスを仰ぎたい。

「神と人とを愛する」

先週に続いて、今週も十戒について学びましょう。

十戒は旧約聖書の昔に、神さまがイスラエルの民に授けてくださった十の戒めです。けれども先週も言いましたように、十戒は昔のイスラエルの人々にだけ語られた戒めではなく、私たちのひとりひとりにも語られている愛の戒めです。神さまはイエスさまを十字架につけてよみがえらせたもうことによって、私たちを罪と死の支配からときはなち、永遠の命を与えてくださいました。私たちを愛されたからこそ、このような大きな恵みをくださったのです。私たちもこの神さまの愛にこたえて生きるのです。十の戒めを守り行うことによって、神さまへの愛を身をもってあらわして生きるのです。

ところで、十の戒めは二枚の石の板に刻まれていました。その一枚にははじめの四つの戒めが、もう一枚にはあとの六つの戒めが記されていました。

つまり、一枚目の板に刻まれた四つの戒めは、一言で要約するなら神さまを愛しなさいという戒めです。たとえば神さまはそこで、わたしのほかに神があってはならない(第一戒)、偶像、偽りの神を造ってはならない(第二戒)、とお命じになります。神さまは私たちを愛してくださいました。ひとり子イエスさまを十字架につけるほどに愛してくださいました。この愛を知るなら、私たちは当然、ただ神さまだけをお愛しますね。偽りの神さまをこしらえて、これを礼拝して、神さまの

愛を裏切ったりはしないはずで、神さまを悲しませるようなことはしないはずで。

一方、二枚目の板に刻まれた六つの戒めは、一言で要約するなら隣り人を愛しなさいという戒めです。神さまはこの私と同じように、私の隣り人をも愛してくださいました。そして、人間どうしがたがいに愛し合って生きることを喜ばれ、また望んでおられます。私たちがそのような愛に生きるために、あとの六つの戒めをも授けてくださったのです。たとえば、殺してはならないという戒め(第六戒)は、ただ人の命を奪わなければよいというのではなく、どんなに弱く小さな命をもたいせつにしなさいという意味をもふくんでいます。盗んではならないという戒め(第八戒)は、盗まなければよいというのではなく、貧しい人々に分け与えなさいという意味をもふくんでいます。偽証してはならないという戒め(第九戒)は、うそを言わなければよいというのではなく、おたがいに真実をつくして生きなさいという意味をもふくんでいます。

このように、十戒の十の戒めは、ふたつの戒めに要約することができるのです。神を愛しなさいという戒めと、人を愛しなさいという戒めです。イエスさまも、十戒はこのふたつの戒めに要約できるとおおせになりました。『子どもカテキズム』にもそう書いてありますね(問40)。

さて、このふたつの愛の戒めを完全に守り抜いて生きられたお方はイエスさまです。イエスさまは父なる神さまを、そのご生涯において愛し通さ

れました。それは、神さまのみ言葉の戒めを完全に守り抜かれたということです。イエスさまは父なる神さまのご命令に完全に従い通されました。十字架への道は、イエスさまにとっても苦しくおそろしい道でした。しかしそれが私たち罪人を救うための神さまのただひとつのご計画でしたから、イエスさまはひたすらにその道を歩まれたのです。そのようにして、神さまのご栄光をあらわされたのです。

イエスさまはまた、私たち罪人を愛し通されました。神さまのひとり子であられたのに、人々に僕のようにお仕えになりました。そしてご自分の

命をも私たちにお与えくださったのです。

神さまは私たちにも、神を愛し人を愛して生きなさいとおおせになります。このふたつの愛の戒めに生きるとき、私たちは永遠の命にあずかるのです。

そして、私たちのそのような歩みの目当てはイエスさまです。イエスさまが生きられたように、私たちも生きるのです。イエスさまは私たちを愛していただきます。イエスさまの愛をいただくことによって、私たちもこのふたつの愛の戒めに生きることができるのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] レビ記19章18節後半

自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

《ねらい》

神様を愛することと人を愛すること。この二つの戒めを覚え、この戒めに生きられたイエス様を仰ぎ見よう。

《展開例》

※あらかじめダンボールか発泡スチロールの板を二枚用意し、十戒が書かれていた石板をイメージしたものを作っておくと話しやすいかも知れません。

みなさんは、おうちでお父さんやお母さんに「〇〇してはいけません」とか「〇〇しないで」と言われることがありますか？「うそをついてはいけません。」「すききらいをしてはいけません。」「ご飯を食べる前に手を洗いなさい。」「お友達と仲良くしなさい。」きっと、こんなことを言われたことがあるでしょう。お父さんやお母さんはみなさんが元気な良い子に育つようにと願ってそういうことを言うのですね。

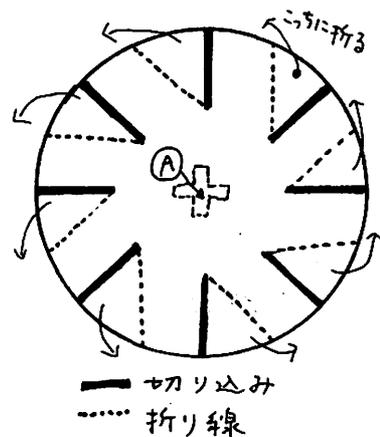
では、神さまは私たちにどんなことをおっしゃっているのでしょうか？ 聖書の中に「十戒」が書かれていることは先週のお話でも聞きましたね。神さまが私たちのために書いてくださった十のおことばでしたね。「本当の神さま以外の神さまを信じてはいけません」とか「他の人の物をとっては

いけません」など十このおことばを神さまは二枚の板に書かれたのですよ。(二枚の板を見せる)。一枚目の板には四つのおことばが書かれていたのですが、この四つのおことばを一言で言うと「神さまを愛しなさい」という意味でした。そして、二枚目の板には六つのおことば書かれていたのですが、一言で言うと「みなさんのまわりにいる人たちを愛しなさい」という意味だったんですよ。神さまは私たちみんなが神さまのことを大切に思うように、そして、まわりの人たちのことも大切に思うようにと願っておられます。みなさんの大好きなイエス様は、いつも神さまのことを愛しておられるし、私たちみんなのこともいつも愛してくださるのです。イエス様は神さまのお言葉をいつも守っておられるのですね。みなさんもイエス様のようにいつも「神さま大好き！ お友達もみんな大好き！」って言えるといいですね。

《お祈り》

天の父なる神さま、私たちがいつも神さまのことを愛することができますように。また、まわりにいる人たちのことも愛することができますように守っててください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

☆くるくるパラシュート☆



用意するもの：紙皿 ストロー 洗たくバスマ

- ① 紙皿に模様を描き切り込みを入れて折る
- ② ストローの先に切り込みを入れて割る



- ③ 紙皿のうちのAにストローをテープで張る
- ④ 重いに洗たくバスマをストローの下につける

くるくる回リながら落下!!

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① イエスさまのところに来たのは誰？（→律法学者）
- ② 旧約聖書にはたくさんの掟が書いてあるけれど、一番大切なことは何？（→神さまを愛すること）
- ③ それだけ？（→隣人を愛すること）
- ④ でも、どうしたらそのように生きることができる？（→本当に神を愛し、隣人を愛して下さったイエスさまを信じる）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 十戒は、大きくどこで分けられる？（→第一戒から第四戒と第五戒から第十戒）
- ② 前半にはどういう意味がある？（→神を愛するということ）
- ③ 後半にはどういう意味がある？（→隣人を愛するということ）
- ④ 二つのうちどちらかが守れたらいいの？（→どちらも守らなければいけない）

〈考えてみよう〉

神を愛するということと、隣人を愛するということは、具体的にどういうところから始められるか、考えてみましょう。毎日お祈りをする。日曜日には教会で礼拝すること。これからも続けていきましょう。お父さんお母さんの言うことをよく聞くこと、お友達と仲良くすること、また教えてあげることは、隣人を愛するということです。そして、まだ知らないお友達にイエスさまのことを教えてあげるといことはどうでしょうか。それこそ、神さまを愛し、隣人を愛するということです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。一番大切な神さまの教えを守ることができるよう。神さまを愛して、周りの人も愛することができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。



〈ねらい〉

ここから十戒の内容に入る。十戒の内容はまず神を愛すること、そして人を愛することである。この十戒の二つの内容を覚えるよう教えたい。これが神の救いへの感謝をあらわすことである。子どもたちには、自分を愛して下さった神様に感謝し、神と人を愛するよう勧めたい。

〈展開例〉

考えてみよう。

- (十戒の文章を見ながら)十戒を読んでみよう。十あるけれど、大きく二つに分けることが出来ます。どこで分けられるでしょうか。

(前半四つと後半六つ、出エジプト20章3～11節、12～17節)。

- 二つに分けられる理由は？

前半(四つ)が(神)を愛すること、後半(六つ)が(人)を愛することが求められていますね。

- 神様は私達を愛して下さいました。どんな風に愛して下さいましたでしょうか。もう一度思い出してみよう。

私達の(罪)の刑罰をイエス様が(身代わり)に受けて下さった。(天の御国)に入れるようにして下さいました。そして今も(一緒にいて)下さる。とても(うれしい)ことですね。だから私達も(神様)を愛しましょう。本当の(神様)だけを(神様)として礼拝しましょう。それが最初の四つです。

イエス様は(人)を愛して下さいました。そして十戒の後半は(人を愛する)ように求めます。神様が愛され、私達と一緒に生きるようにされた人を愛することが第二に求められることです。神様がおおせになることですから、隣人を愛することは、(神様を愛する)ことでもあるのです。

- ところで、「自分自身を愛するように」って書いてありますね。これどういう意味でしょうか。考えてみよう。自分を愛することはいけないこと？人のことを大切にすればよいので、自分のことなんかどうでもよいのでしょうか。そうではありませんね。自分も(神様)から(愛されて)いる(大切な)人間です。だから、自分を(粗末)にしてはいけません。大切に愛さなければなりません。そして、自分を愛するように、(隣人)を愛しなさいといわれるのです。

- 覚えよう。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」(マルコ福音書12章30、31節より)。

〈祈り〉

天の神様、あなたは、私達を愛して下さいました。イエス様は私を愛し、また他の人々をも愛されました。だから、私達も十戒にしたがって、あなたを愛し、人を愛する者となりますようにして下さい。

【目標】

十戒の要約、その目的は愛であることを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→マルコによる福音書12章28～34節を生徒と読む。

【ポイント】

十戒の要約と共に32～33節の律法学者の反応にも注目したい。彼は恐らく感動を持ってこう答えた。彼は何を発見したのだろうか。彼は十の戒めはよく知っていたと思われるが、それらが目指す目的については、それを捉え切れていなかった。それは明文化や規定を超えた神と人への愛であった。クリスチャンとして生きるということの本質は、決まりや義務に縛られて生きるのではなく、それらを超えて愛に生きるということである。主は、十戒を通して私たちをこの愛へと向かわせて

おられる。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての「神を愛し、人を愛すること」とは何かを生徒と分かち合う。

Q. 御言葉を語られたイエス様御自身は神を愛し、人を愛して歩まれたのでしょうか？

Q. クリスチャンとして生きるとは、どういうことでしょうか？

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたにとっての「神を愛し、人を愛すること」とは何だと思えますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

神様が私たちを愛してくださったこと。主が神と人への愛に生きるという素晴らしい道を私たちの前に開いてくださっていること、それぞれがその道を歩んでゆけるように。

テキスト 出エジプト記12章21～27節

(最後の災い)

主なる神様は、モーセによって、ファラオとエジプトに九つの災いをもたらしました（出エジプト7:14-10:29）。それはファラオが主の御前で頑なになって、イスラエルの民を去らせなかったためです。そして主なる神様は、最後に、「エジプトの国中の初子が皆、死ぬ」災いをもたらすことを約束されました（11:5）。

(すべてが裁かれる)

この災いにおける主の裁きを、自分の力で逃れることが出来る者はありません。ここには、ファラオが頑なになっていたための裁きの意味のみならず、主の御前に立つ時、誰一人として例外なく、主の裁き与えられる頑なな罪があることを示しています。「そのとき、エジプトの国中の初子は皆、死ぬ。王座に座しているファラオの初子から、石臼をひく女奴隷の初子まで。また家畜の初子もすべて死ぬ」（11:5）のです。

(主の憐れみ)

もし主の御手が、イスラエルにもたらされていなければ、イスラエルの民の上にも、エジプト人と同じように、すべての初子の死がもたらされていたことでしょう。しかし、愛そのものであられ、憐れみ深い主なる神様は、イスラエルの上に災いを通り過ぎ、災いから逃れる手段をお与え下さいました。これが過越の犠牲を献げることです。これは「鴨居と二本の柱に塗られた血」というしる

しが飾られることにより、イスラエルがエジプトから区別され、主が裁きを行うことなく過ぎ去って下さるのです。これは主なる神様の一方的な憐れみによって与えられた救いの御業です。

(子孫のための定め)

そして主なる神様は、この過ぎ越しにより、イスラエルが贖われ、エジプトから救い出されたことを覚えるために、毎年、この儀式を守り（25）、子供に教えて教育していかなければならないことを命じています（26-27）。それはエジプトの初子の死と過ぎ越しの御業自体は、一回限りの出来事ですが、過去の出来事として、忘れ去られないために、必要なことなのです。儀式が毎年行われ、繰り返し繰り返し教育されていくことにより、時間と共に、そして世代が代わることにより、主なる神様がお与え下さった恵みは忘れ去られ、主への信仰は失われていくことをくい止めることが求められているのです。それは、人間の思ひは、持っていないもの、与えられていないものに対する不平・不満を語り、要求はするものの、すでに主なる神様から与えられている恵みに対して感謝することが出来ないからであり、恵みを忘れ去るからです。

しかし、主なる神様による贖いが自分たちに与えられたのだという事実が、儀式と教育によって伝えられていく時、主なる神様による救いにあることを喜び、感謝して、主を「ひれ伏して礼拝」（27）する者へとされていくのです。（辻 幸宏）

カテキズム 子どもカテキズム問41,42

子どもカテキズム

問41 十戒の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、
奴隷の家から導き出した神である」です。

参考教理問答 『ウ小教理』43,44、『ウ大教理』101

十戒の最初には「わたしは主、あなたの神」との序文が付けられています。神は「わたしは主」だと言われました。「主」とはヤーウェという神ご自身の名で、「わたしはある、わたしはあるという者」（出エジプト3:14）という言葉に由来しています。この「わたしはある、わたしはあるという者」（わたしは在らんとして在るもの）とは、単に孤立して存在するというのではなく、自分の以外のすべてを「在らしめ」て、存在へと呼び出し、存在せしめる、あらゆる存在の根拠ということです。別言すれば、「共に在る」ということで、ヤーウェなる神とは、イスラエルを存在へと呼び出して在らしめるだけではなく、そのイスラエルと「共に在る」神であり、「あなたがたと共に、いつも在る」神だということです。だからここで神はこう約束されました。「わたしは必ずあなたと共にいる」と。共在する神、それがヤーウェという意味なのです。

この「わたしはある」という神は、それによって神に在らしめられているわたしたち自身が、自分に向き合い、神へと向き合う者となるように呼び掛けられます。わたしたちに呼び掛けられる神と向き合い、その方が「わたしはある」という方であることを知るとき、わたしたちはそこで初めて自分というものの存在を自覚させられます。人は神と出会わせられ、その出会いによって自己を知るようになるのです。「わたしはある」という神との出会いは、わたしたちを真実にわたしたらしめていくのです。「わたしはある」という神は、その呼び掛けによってわたしたちを真実な存在へ

と呼び出し、存在せしめていく生ける神なのです。そしてその神が、わたしと共にいてくださる神として、この神との出会いと交わりの中で生きる者へとわたしたちを呼び出された、それが十戒だといえます。十戒とは、この生ける神によるわたしたちへの生きた語りかけであり、「生きよ」と呼び出して下さる生命の神の呼び掛けなのです。

ここで神は「わたし・あなた」という二人称関係に神・人関係を置き、ご自身を「わたし」「あなたの神」としてどこまでも人格的、具体的な神として「あなた」と関わりを持つようとする動的な神であることを明らかにします。人間に「あなた」と呼び掛け、相互の生きた交わりを求められる人格的な神であるということです。「あなたの神」として彼らを「奴隷の家から導き出した神」であり、そこに具体的で生きた人間との関わりと働きを為さる神なのです。神は、こうしてわたしたちをご自身との交わりへと呼び出し、招かれる交わりの神です。わたしたちとの交わりを求められてわたしたちを救い、「あなたの神」としてわたしたちとの特別な関係へと導き入れてくださったのです。十戒はこの神からの交わりへの招きの言葉なのです。かつてイスラエルを救いだすために、ただ一人戦い、血を流してイスラエルを守られた神は、やがてゴルゴダの丘でただ一人罪と戦われ、ただ一人血を流して、それによってわたしたちを贖いだしてくださった神なのでした。その神が呼び掛けられるのです。「わたしの他に、何者をも神としてはならない」と。（三川栄二）

テキスト 出エジプト記12章21～27節
カテキズム 子どもカテキズム問41, 42

(単元のねらい)

感謝にいきる生活を、十戒を通してまなぶに際して、十戒という神の御言葉が、どのようにして、どんな目的をもって与えられたかを、十分に理解することは、大人にも子どもたちにも大切なことである。十戒は、もとより神の「戒め」であり、神がその民に求められる「要求」である。けれども、このような神の戒めが、神の選びの民に与えられた理由と目的を考えると、十戒は単なる「律法」「要求」として考えるべきものではなく、その根底にある神の愛、神の献身、ということをよく心に刻むことが必要である。

とくに、日本のキリスト者と教会が、「律法」の理解をあいまいにし、その結果「福音」理解そのものが聖書の本筋からそれて、人間中心的になりがちな傾向は、今なお克服されていない。十戒の根拠が、イスラエルに対する神の選びと贖いにあること。そして十戒の恩恵的な性質を、はっきり告げるのが、十戒の「序言」であることを、いくら強調しても過ぎることはないはずである。感謝の生活の指針・規範としての十戒を、神の恵みの選びと愛の福音的基礎の上にはっきり据えることを、この単元の眼目としたい。

「神は私たちをあがなってください」

皆さんは、むかしのイスラエルの人びとが、長いあいだエジプトで奴隷の生活をしてきたことを知っているでしょう。イスラエルの人びとは、はじめはエジプトの王様（ファラオといいます）やエジプトの人びとから、とても歓迎され、やさしく迎えてもらいました。ところが、イスラエルの人びとの数が増え、次第に大きな民になってくると、エジプトの王様は、イスラエルの人びとを恐れるようになりました。それで、イスラエルの人びとにたいへん厳しい労働をさせるようになりました。

けれども神様は、イスラエルの人びとの苦しみと叫びを、聞いておられました。神様は、しばらくのあいだ、ご自分の民が試練や苦しみに遭うことを許されますが、その苦しみと嘆きを、見過ごしたり忘れてしまわれることは、決してありません。神様はイスラエルの人びとの苦しむ様をご覧になり、そして人びとの祈りと訴えに耳を傾けてくださいました。そして、モーセというひとを特にお選びになりました。

モーセについては、皆さんもこれまでに学んで覚えていることもあるでしょう。アニメ映画で『プリンス・オブ・エジプト』というのを観たひともいるかもしれません。モーセは、生まれて間もないころに、不思議な神様のみちびきで、エジプトの王女（ファラオの娘）によってナイル川から助け出されました。そして、40歳になるまでは、エジプトの宮殿のなかで育てられ、エジプトの言葉や学問を学んで、とてもすぐれた指導者としての訓練を受けることになりました。しかし、ひとつの事件があって、モーセはエジプトの宮殿を出て、荒野のなかで40年を過ごすことになりました。羊飼いの娘と結婚し、子どもも生まれて、モーセは80歳にもなりました。

その80歳になったモーセを、神様は、イスラエルの人びとをエジプトから救い出す働きに、召されたのです。神様は、モーセを通して、エジプトの王様に「イスラエルの民を自由にさせなさい」「イスラエルの人びとがまことの神様を礼拝できるように、奴隷の生活から解放してやりなさい」

と、繰り返し命令されました。ところが、エジプトの王様は、モーセの言葉に耳を傾けようとはしません。そのため、神様はエジプトの国にいろいろな災いと苦しみを送り、なんとか王様の心を変えようとしたのです。エジプトの王様は、とても頑固で神様に対してもモーセに対しても、ごうまんに振舞いました。

それで神様は、ついにエジプトにたいして、もっとも激しい苦しみを与えることを決心されました。それは、エジプトに生まれた「初子（ういご）」、つまり人間でも家畜でも、長男として生まれたものを、ぜんぶ死に絶えるようにされる、そういうおそろしいさばきでした。真夜中に、神様の使いがエジプトのすべての家を訪れ、人間であれ家畜であれ、すべて長男として生まれたものの命を絶つという、厳しいさばきははじまりました。

けれども、イスラエルの人びとは、モーセに教えられて、このおそろしいさばきをのがれることができたのです。子羊の血を、ヒソブという植物の枝にぬり、その血をそれぞれの家の入り口の、柱や鴨居（かもい＝柱の上側に渡した横木のこと。数居が下にあるのに対して、鴨居は入り口の上の部分）に塗っておくのです。イスラエルの人びとは、その夜は一步も家から出ることはありませんでした。こうして、滅ぼすために神様から送られた御使いは、イスラエルの家を通り過ぎてくれたのです。この恵みの事件が「過ぎ越し」です。滅びと死の瀬戸際にあるイスラエルの人びとが、こうして神様の大きな守りと愛によって、救われ、いまわしい奴隷の生活から脱出することができました。イスラエルの人びとは、恐ろしい暗闇のなかで、神様が守ってくださった、その愛を、いつまでも忘れないために、それから毎年、「過ぎ越し」を記念して、お祝いをするようになりました。

私たちはこれから、神様のくださった十の言葉（十戒）をひとつひとつ学びます。その十戒のはじめに「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」と書かれていますね。それは、神様がとくに「過ぎ越し」という恵みの出来事をおして、イスラエルの人びとをエジプトから無事に連れ出してくださったことを、教えているのです。神様が、どんなに大きな愛で、イスラエルの人びとを、苦しみから救ってくださったか。「わたしは、あなたがたを、どんな苦しみの中でも見捨てはしない。あなたを愛し、いつまでもあなたがたを私の腕にかかえて、導いてあげよう」。神様は、そのようにイスラエルの人びとに、呼びかけておられます。そして、じつは同じ神様の愛が、今も私たちにむかって差し出されているのです。

ずいぶん昔、「こんにちは赤ちゃん」という歌が日本中で歌われました。生まれてまもない赤ちゃんに、お母さんがやさしい声と笑顔で「こんにちは」と呼びかけて、自己紹介している歌です。

「こんにちは赤ちゃん、わたしがママよ」。ニコニコと、笑顔で赤ちゃんに微笑んでくれる、お母さん。そして「わたしがママよ」と挨拶してくれる。赤ちゃんにとって、こんなに幸福で安心なことはありませんね。神様が、イスラエルの人びとに、十戒という言葉をくださったとき、まずはじめに、神様は自己紹介をされました。「わたしは主、あなたの神」。いつでも、どこでも、そしていつまでも、わたしはあなたを離れない。あなたを見捨てない。だれよりも深く、あなたを愛している。だから安心して、私の言葉に従いなさい。わたしのあとについて来なさい……。これが十戒をくださった神様の心です。（小野静雄）

【今週の暗唱聖句】 出エジプト記12章9節

主が力強い御手をもって、あなたをエジプトから導き出されたからである。

〈ねらい〉

十戒の前書きを通して、神の恵みの選びと十戒を与えられた神の愛の心を知る。

〈展開例〉

昔、イスラエルの人たちはエジプトという国でとてもつらい仕事をいっぱいさせられて、朝から晩までたくさん働かされました。イスラエルの人々はとってもつらかったので、「神さま、つらいよ～苦しいよ～助けてください！！」って神さまに言いました。その声を聞いた神さまはなんとかイスラエルの人々を助け出そうとしました。でも、エジプトの王様のファラオという人はすごく頑固な王様だったので、「もう仕事はやめてエジプトから出て行っていいよ」ってなかなか言ってくれなかったのです。ついに神さまはエジプトに生まれた最初のこども（初子）を全部（人間の子どもだけではなく動物の子どもも）殺すことに決めました。でも、イスラエルの人たちの初子が殺されないように、おうちの入り口に小羊の血を塗るように教えました。夜中に神さまはエジプト中を歩いて初子を一人残らず殺したのですが、イスラエルの人々の初子は一人も殺されずにすま

した。とうとう、ファラオはイスラエルの人たちをエジプトから出て行かせました。神さまが助け出してくださったのです。

十戒の十このおことばの前に「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国奴隷の家から導き出した神である」ということばがあります。これは、「わたしがイスラエルの人たちを救い出した神で、いつもあなたたちと一緒にいますよ」という意味です。昔、イスラエルの人々を助けてくださった神さまは今でもわたしたちのこともいつも助けていてくださるのです。

神さまに救い出されたことを忘れずに、わたしたちを救ってくださった神さまといつも一緒に歩いていくことができるように、神さまはわたしたちに十戒をくださったのです。

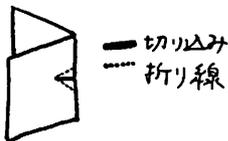
〈お祈り〉

天の父なる神さま、神さまがいつもわたしたちと一緒にいてくださりありがとうございます。これからいつも神さまと一緒に歩いていくことができるように守っていてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

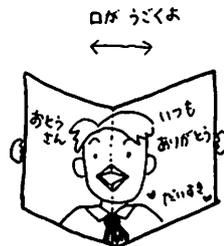
☆バクバクカード☆

『バクバクカード』（飛び出すカード）…父の日・母の日のプレゼントにも…

用意するもの：紙・書くもの・はさみ・のり



- ① 画用紙を半分に折り切り込みをいれて折り線をあせます
- ② 広げて顔など書きます



- ③ 切り込み以外にのりぬり同じ位の紙を張って表紙を合符でもいいですよ。



〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① 神さまを信じるイスラエルの人たちは、どこで奴隷になっていましたか？ (→エジプト)
- ② そこから神様が助けてくださるとき、家の柱に何を塗るように言われましたか？ (→羊の血)
- ③ そうしておくど、エジプト人を撃つために巡っておられた神様がどうなさる？ (通り過ぎていく・過ぎ越される)
- ④ この過越は、このときだけで終わっていいものだった？ (→神さまの救いを語り続けなければならなかった)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

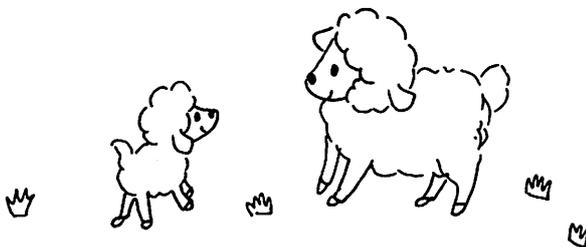
- ① 十戒にはいくつの戒めがありますか？ (→10)
- ② 大きくどこで分かりますか？ (→第一戒から第四戒と第五戒から第十戒)
- ③ 十戒には十の戒めがあるだけですか？ (→前書きがある)
- ④ 前書きが教えている神さまの救いの出来事を何と言いますか？ (→出エジプト)

〈考えてみよう〉

過越によって、イスラエルの人たちは救われましたが、どうして家の柱に血を塗るように神さまは言われたのでしょうか。神さまなら、血など見なくても、どこがイスラエルの人の家なのか分かるのではないのでしょうか。ここでは、その血が犠牲の羊の血であったことを覚えておきましょう。イスラエルの人たちも罪人です。助かるためには犠牲が必要なのです。そして、この羊の犠牲が、やがて来られるイエスさまの十字架の犠牲を予告しているのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。むかしイスラエルの人たちを救ってくださった神さまが、今も私たちがイエスさまによって救ってくださることを感謝します。神さまに感謝して、神さまの教えを守ることができるように助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。



〈ねらい〉

十戒の序文を、背景となった過越におけるイスラエルの救済体験から学ぶ。子ども達が、過越の出来事そのものを覚えるようにしたい。神様が、イスラエルをエジプトから救うために、かたくななファラオとエジプトに対して、恐ろしい災いを下された。イスラエルの人々は子羊の血を家の入口の柱と鴨居に塗ることで、災いが自分たちの家を過越して救われた。ここでは子羊の血による救いがキリストの贖いを暗示することまでは触れなくて良いだろうが、子羊の血を塗った家は過越された事は子どもたちにも覚えさせたい。イスラエルが聞くべきことは、「これほどまでしてあなたを救った神様が『わたしは主、あなたの神』と言って下さる」ということである。

〈展開例〉

考えてみよう。

- 十戒の序文には、神様がイスラエルの人達を、エジプトから導き出したことが書いてあります。どんな風に導きだされたのでしょうか。その中でも、特に大切な出来事は（過越）です。
- 神様は、モーセを通して、エジプトの王様に「イスラエルをエジプトから去らせるよう」「まことの神様を礼拝できるようにエジプトから去らせてやりなさい」と繰り返し命令されました（出エジプト5章1～3節、7章16節など）。エジプトの王様は、モーセの言葉に耳を傾けようとしません。神様はどうされたのでしょうか。
エジプトの国にいろいろな（災い）を送り、王の心を変えようとされた。
- それでも王は（かたくな）で、イスラエルの人々がエジプトを出ることを（許しませんでした）。それでどうとうエジプトに対して、もっとも激しい苦しみを与えることを決心されました。どんな災いだったのでしょうか。
すべての（初子）を打つ、その（命）を絶つこと。
- 神様は、イスラエルの人々に、このさばきから逃れるためにどうするようにお命じになりましたか？
（小羊の血）を（家の入口）の二本の（柱）と（鴨居）に塗っておくこと。イスラエルの人達はその夜は一步も家から出ることはありません。（12章7節）。
- その夜、神様は、エジプトの家に対しては、（人）であれ、（家畜）であれ、すべての（初子）を撃たれました。イスラエルの人々の家に対しては、（血）を見て（過越）されました。（12章12節～13節）。
- どうとうファラオはイスラエルを去らせました。こうしてイスラエルは神様のさばきから救われ、エジプトの奴隷の生活から救い出されたのです。（12章31節）。
- 神様はご自分を、このようにしてイスラエルを救った方として紹介されるのです（12章27節）。
- 神様は、私達にも「わたしは主、あなたの神」とおっしゃっています。私達を救って下さった神様として自己紹介されているのです。

〈祈り〉

天の父なる神様、あなたはイスラエルの人達を力強い御手をもってお救いになりました。私達もあなたの方強い御手によって神様のさばきから救われました。あなたは私を救って下さった神様です。日曜日のたびにあなたを礼拝してあなたにお従いすることができますようにして下さい。

【目標】

過越という不思議な出来事が、神様から私たちへの贖いのみわざであったことを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→出エジプト記12章21～27節を生徒と読む。

【ポイント】

御言葉を、当時イスラエルの民がどのような状況にあったのかを追体験するかのよう、絵画的に想像力を働かせて分かち合えるならば理想的である。子供心にとっても、強い印象を与えるような御言葉である。つらい奴隷生活。頑なな王ファラオ。イスラエルの民の望みは尽きるかに思えた。しかしその中で主は行動を起こされた。暗い夜、主が街を巡られる。イスラエルの民は玄関に小羊の血を塗って備えた。その夜、エジプト中に恐怖の叫びがこだました。イスラエルの民は家の中でじっとしてただけである。ただ主の腕が、彼らを救い出された。その救いをイスラエルの民は忘

れ得ぬ体験として記憶した。十戒はこの救いの神からの掟であり、神への感謝の応答の道筋である。

③生徒と一緒に考える

Q. 自分がもしその場に居合わせたら、どうだったでしょう？

Q. 過越を通して民を救った神様は、どんなお方だと思いますか？

Q. なぜ、戸口に塗るしるしが、小羊の血だったのでしょうか？

→次週への伏線、汚れなき命の犠牲を示す血

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 過越をされたこの神様は今も生きて、私たちを守ってくださいます。これからの一週をこの神様の前にどんな一週間としたいですか？

⑤祈り

神様は愛する民のことを必ず守って救ってくださること、私たちが今生かされていることへの感謝。

テキスト ヘブライ人への手紙9章11～14節

(旧約の幕屋)

旧約の時代、幕屋に聖所が設けられ、祭司を通して、罪の贖いとして雄山羊と雄牛の血による贖いを献げられることが求められました。それは、血が、人間の生命の源であることに基づいており(レビ17:11)、血を流すことなしに、罪の赦しはあり得なかったのです(22)。

しかし幕屋における雄山羊や雄牛の血は、あくまでもキリストによって与えられる完全な贖いの予型に過ぎず、キリストの十字架において流された血を指し示しているに留まっていたのです。しかもそれは繰り返す必要があるものであり、すべての罪の贖いが完全になされることはありませんでした(1-10)。

(大祭司キリスト)

しかしキリストの十字架によって罪の完全な贖いは成し遂げられたのです。そして、人間の手によって造られた幕屋(出エジプト25～40章)ではなく、「この世のものではない」＝神様によって与えられた「完全な幕屋」に、キリストは入られたのです。だからこそ旧約の時代の幕屋は、キリストが十字架に架かれ、死を遂げられた時、その役目を終えたため、真っ二つに裂けたのです(マタイ27:51)。

それは、大祭司としてのキリストが、神の御子であられるため、まったく罪がなく、雄山羊や雄牛と比べることの出来ない完全なものであり、キ

リストの十字架で流された血によって、完全な永遠の罪の贖いを完成するに足るものだからです。従って、旧約の幕屋における動物の贖いのように、繰り返して行われる必要はなく、キリストの十字架によるただ一度の贖いにより、旧約から新約にいたる全ての救われるべき人の、そしてその全ての罪が、贖われたのです。

言い換えれば、本来ならば私たちが自らの罪の故に負わなければならなかった死は、命が献げられなければ贖うことなど出来ないものであり、しかも罪に汚れたものの血によっては、決して贖うことが出来なかったのです。だからこそ、神様の御子として、罪のないキリストが、十字架に架かれ、血を流され、死に渡されなければ、私たちの罪の贖いが完成することはなかったのです。

(キリストを信じる者)

だからこそ、キリストの十字架を信じて、キリストの十字架を受け入れる全ての者は、本来ならば罪の故に死に定められているにもかかわらず、キリストの十字架の贖いの故に、罪が赦され、清められるのです。

そしてキリストの血の贖いにあずかる私たちは、清められ、神の国を見据えた永遠の生命が与えられたからこそ、神様が人間を創造された時の目的である私たち人間が神様の栄光を誉め讃え、神様を讃美しつつ、礼拝を献げる行為へと促されているのです(14)。(辻 幸宏)

6月26日 「過越の成就—キリスト」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム問41,42

子どもカテキズム

問42 この意味は何ですか。

答 かつては、神の民をエジプトから救い出すことによって、今は主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって、神さまはわたしたちの神さまとなってくださいました。ここにすでに、神さまの愛の御心があらわれ出ています。この神さまの愛の支配のもとではじめて、わたしたちは、幸せに、また自由に、生きることができるのです。

参考教理問答 『ウ小教理』96、『ウ大教理』168、『ハイデルベルク』75-78

過越とは、イスラエルがエジプト脱出の折、エジプトを討つための死の使いが行き巡ったとき、小羊の血が死の使いを過ぎ越させたことを覚えて祝う祭でした。神の民を罪の世から脱出させ、死から生命へと過ぎ越させるために、小羊の血が流され、小羊の犠牲が必要でした。わたしたちはそのことを、聖餐によってお祝いしています。主は聖餐を、過越の食事の時に制定されたことで、聖餐が過越の食事であり、そこで意味されたことは、まさに過越であることを明らかにされました。つまり聖餐とは、「キリストがわたしたちの過越の小羊として屠られた」ことを表わすものでした(コリント一5:7)。そこで示されたことは、わたしたちが死から生命へと至るためには、小羊の犠牲が必要であり、そのために小羊の肉が裂かれ、その血が流される必要があるということです。その過越の小羊こそ、キリストご自身でした。キリストは「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1:29)であり、これは「罪が赦されるように、多くの人のために流される」キリストの血(マタイ26:28)を表わすもので、神がわたしたちと「新しい契約」(エレミヤ31:31以下、32:38以下、ルカ22:20)をキリストの血によって締結してくださったことを確証するものでした。わたしたちの罪が、キリストによって確かに贖われ、確かに罪の赦しが与えられたことを、信じることが出来るし、そのことが保証されているのです。

キリストは、「ご自身の血」により、「永遠の贖

いを成し遂げられ」ました。こうして「新しい契約」が結ばれました。この「契約」という言葉は「遺言」という言葉です。「遺言」は、遺言者が死亡してはじめて効力を発揮します(ヘブライ9:17)。「新しい契約」、つまりキリストの遺言は、キリストが十字架で死なれたことによって有効なものとなりました。これまでの動物の犠牲による贖いでは、十分に人間の罪を取り除くことはできなかったもので、罪を犯すごとに、動物犠牲が繰り返されることになりました(10:1-4)。しかしキリストは、わたしたちの罪の贖いを「ただ一度、ご自身を献げることによって、成し遂げられた」のであり(7:27)、「ただ一度、ご自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現われ……多くの人の罪を負うために、ただ一度身を献げられた」(7章26,28)のでした。こうして「ご自身を傷のないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせ」るのです。わたしたちは、キリストの十字架のただ一度かぎりの犠牲によって、確かに「罪の赦し」を得るものとされたのでした。だから、たとえ罪を犯し悲嘆に暮れるとしても、キリストの血によって繰り返し赦され、清められていくのです。「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、全世界の罪を償ういけにえです」(ヨハネ一1:9,2:1,2)。(三川栄二)

テキスト ヘブライ人への手紙9章11～14節
カテキズム 子どもカテキズム問41, 42

(単元のねらい)

十戒の学びに先立って、神への感謝と従順を基礎づける、救いの完成をはっきりと語ることが必要である。そうすることによって、十戒は、圧倒的な恵みにたいする感謝の応答となり、聖書的・福音的な人生にとってかけがえのない指針となり規範となる。

旧約における贖いについての前回の学びは、エジプト脱出時の「過越」に集中して考えた。子羊の血をもって、滅びの使いを過越してくださった神の不思議な恵み。旧約における贖いの恵みは、しかし真実なものが来るための約束であり、まことのものの到来の予告・予型である。イエス・キリストによって完成された、まことの贖いとしての十字架の贖罪を、ここで提示することになる。ヘブライ人への手紙の使信をもちいて、主イエス・キリストの十字架を語ることは、けっして簡単なことではない。しかし、旧約における動物犠牲の時代から、キリストの十字架の一回かぎりの贖いへと、救いの道がどのように完備され、徹底され、強化されたかを、ともに分かち合いたい。そうすることで、十戒に示される「感謝の生活」が、どんなに大きく深い基礎に根ざしているかを語る基盤を得ることができる。

「キリスト・神の小羊」

先週の「過ぎ越し」の恵みから、私たちはいくつもの大切なことを学びました。なかでも、私たちが忘れてならないことは、神様が私たちを救ってくださるために、「血」による贖い、血による罪のゆるしが、欠かせないということです。

旧約聖書の時代には、神様を礼拝するために、祭司という人びとが働きました。祭司が働く場所を、「聖所」といいます。きよい神様を礼拝し、神様から御言葉をいただき、そして罪のゆるしを受けるために、とくべつにつくられた場所、それが聖所です。はじめは、木材や天幕でつくった聖所ですが、のちにはエルサレムに神殿が建てられ、その中心に聖所がおかれるようになります。

聖所で行われたことは、祭司たちが神様への献げものをし、イスラエルの人びとに代わって礼拝することです。とくに、聖所のなかでもいちばん奥にある「至聖所」という場所は、とくべつな目的のために、大祭司というひとだけがそこに入ることができました。大祭司は、なんのために至聖所に入ったのでしょうか。それはイスラエルの人びと全体の罪が赦されるように、一年に一度だけ、

雄の山羊や、若い子牛の血をもって、聖所のいちばん奥にある「至聖所」に入ったのです。動物の血を流すためには、もちろん動物を殺さなければなりません。

わたしが、まだ学生のときに、ひとりの友だちを教会にさそいました。一緒に教会で礼拝したのですが、ちょうどその日の礼拝のお話は、動物の血をささげて、神様に罪のゆるしをお願いするところでした。お話を聞いていた、わたしの友人は、礼拝が終わったあとで、「動物を殺して罪のゆるしを受けるような、そんな残酷な教えを、ボクは信じることはできない」と言いました。ざんねんなことに、その友人は、それから教会に行くのをやめてしまったのです。

たしかに、人間の罪がゆるされるために、牛や羊のような動物の血を流すことは、残酷なように思えます。でも考えてください。私たちが、神様の前におかした罪は、そのままにしておくことはできないほど大きなものです。神様を神様として愛することを忘れ、人をこころから愛することも忘れて、自分を中心に、したいほうだいのことを

続けているのが、私たち人間のほんとうの姿です。そのような私たちの罪を、なんとかして赦し、そして神様とのまじわりができるようにと、神様がひらいてくださった道が、動物の血による犠牲という方法でした。犠牲にされる動物のことを考えると、心が痛みますが、神様の前で罪のあるままで生きるとは、もっともっと恐ろしいことではないでしょうか。

むかし旧約聖書のころは、そのように動物の血によって、イスラエルの人びとの罪の身代わりをする方法を、神様はもちいられました。しかし神様は、もっとすばらしい方法で、救いの道を完成されました。それは、神様の独り子であるイエス様を、私たちの罪のための犠牲にするという、ほんとうに驚くべき方法でした。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。そのようにヨハネ福音書3章16節に記されています。

皆さんは、イエス様が十字架という死刑によって、殺され、そして死んでくださったことを知っているでしょう。十字架は、イエス様の時代はもちろん、人類の長い歴史のなかでも、これ以上に苦しみと痛みの激しい死刑の方法はないと言われるほど、残酷なものでした。イエス様は、いまから2000年前、エルサレムで、その十字架に架られました。なにか悪いことをされたのですか。なにか罰せられるような悪事を働かれましたか。そうではありません。イエス様は、生まれてから十字架につくまで、一日として神様の御心から離れたことをされませんでした。天の父である神様の喜ばれること、つまり神様を愛し、人びとのために自分のすべてをささげて愛すること。そのよう

な完全な愛を、はじめから終わりまで生きてくださったのです。そのような清い、神の子であってこそ、私たちの罪をゆるし、私たちの罪の身代わりになってくださることができました。十字架の上でも、自分を殺そうとしている人びとのために、イエス様は祈られました。「父よ（神様）、あの人たちをゆるしてください。自分がなにをしているか分からないのですから」。

イエス様は、十字架の苦しみによって、ご自分を私たちのためにささげてくださいました。そうすることによって、イエス様は、私たちのための大祭司となられたのです。思い出してください。むかし旧約聖書のころの大祭司は、自分の罪のために、そしてイスラエルの多くの人びとの罪のために、山羊や牛の血をもって、聖所に入ってゆきました。しかも、むかしの大祭司は、おなじことを毎年、繰り返さなければなりません。けれども、イエス様という大祭司は、ただ一度だけ、十字架について流されたとうい血によって、罪のゆるしを成し遂げられました。イエス様を信じるひとは、だれでも、この十字架を信じることにより、罪をゆるされ、そして永遠に神の子どもにしているだけなのです。

大祭司は、天の父である神様と私たちをつなぐ人です。そして、いまでは私たちには、イエス・キリストという、ただひとりの本当の大祭司がおられます。神様の愛も、いのちも、このひとりの大祭司から、私たちに伝えられます。私たちのために、いのちも惜しまないで、十字架にかかり、イエス様は私たちを愛してくださいました。このイエス様につながって、イエス様を信じて、私たちも神の子として天国への道を、もう進んでいるのです！

(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

〈ねらい〉

罪の赦しを得るためには、動物の血が必要であった事を知る。自分が大事にしている身近な動物に置き換えて想像してみる。イエス様の十字架によって動物を捧げる必要がなくなったことを覚える。

〈展開例〉

みんなが友達とケンカして、仲直りするときどうしますか？ 何かをあげる？ お菓子？ おもちとかかな？

じゃあ、神様の前に悪いことをしてしまったら、どうしたら良い？ ごめんなさいって謝るよね。

神様は、わたしたちのことを愛してくださっているから、謝るわたしたちのことを赦してください。そのときに、「大事なものを持ってきなさい」と言われたんです。それも、「命のあるものを」と言われたの。みんなが大事にしているペットとかね。そしたら、悲しくてしょうがないよね。神様は、わたしたちを愛して赦したいんだけど、正しいお方だから、悪いことを見逃すことはなさいません。だから、神様は、代わりに動物をささげることによって、わたしたちを赦してくださいったんだ。イエス様の生まれるずっと昔

はね、大事にしている動物をささげなくちゃならなかったんだよ。

イエス様が十字架にかかったこと、覚えているよね。そこでね。もう僕たちは大事にしている動物を神様にささげなくても良くなったんだ。イエス様のおかげだよ。

〈お祈り〉

神様、私達にイエス様を与えて下さってありがとうございます。そしてイエス様がわたしたちを愛して下さることもありがとうございます。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈ゲーム〉

子供たちそれぞれに好きな動物を頭に浮かべてもらい、それをみんなであてるゲーム。

- ①一人ずつ順番に行うが、好きな動物についてのヒントを三つ考える。
- ②そのヒントを一つずつ言って、それを聞いて周りのみんなで当てていく。

〈お絵かき〉

思い浮かべた好きな動物の絵を描く。
絵を互いに見せ合おう。

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ①過越のとき、何の血が流されましたか？(→羊)
- ②その後もイスラエルの人たちは、罪の赦しのために何をささげ続けましたか(→雄山羊や雄牛)
- ③それらは完全な犠牲でしたか？(→いいえ)
- ④私たちの罪のために完全な犠牲となられたのは誰ですか？(→イエスさま)
- ⑤どういうふうには犠牲になられましたか？(→十字架にかかれ、死なれた)
- ⑥これからも動物をささげる必要がありますか？(→ない)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

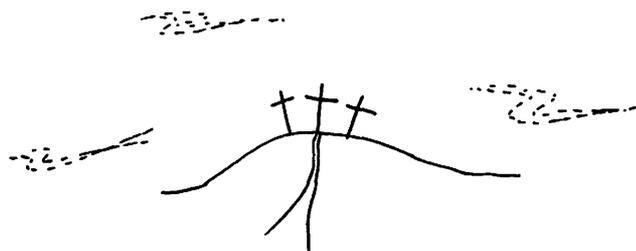
- ①むかし、イスラエルの人たちはどこから救われました？(→エジプト)
- ②イエスさまも私たちをエジプトから救ってくださるのですか？(→いいえ)
- ③イエスさまは私たちをどこから救ってくださるのですか？(→罪の状態)
- ④そのためにイエスさまは何をしてくださったのですか？(→私たちの身代わりとして十字架にかかり、死んでくださった)
- ⑤教された私たちは、神さまからも自由になって生きるのですか？(→救ってくださった神さまに喜んで従うようになる)

〈考えてみよう〉

先週は、どんなことがあったでしょうか。うれしかったこと、残念だったこと、どちらが多かったでしょうか。残念なことが多かったとき、自分は本当に神さまに愛されているのかなあと心配になることがあるかもしれません。でも、そういうときは、先週のことを思い出すのではなくて、聖書に書かれている2000年前のイエスさまのことを思い出しましょう。もうすでにイエスさまは、私たちのために十字架にかかり、その愛をはっきり示してくださっています。イエスさまを知り、信じていることのできる私たちは、神さまに確かに愛されているのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちを愛してくださり、イエスさまを与えてくださってありがとうございます。イエスさまが流してくださった十字架上の血を忘れることなく、いつもイエスさまを信じていることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

過越しの出来事において、イスラエルの人々が救われるために、小羊の血が流された。私達の罪の贖いのためには、キリストの血が流されなければならなかった。過越して流された小羊の血は、キリストの血による贖いを指し示するものである。旧約時代、祭司は動物犠牲をささげて礼拝した。これはやがておいでになるキリストの血による贖いを指し示すものだった。このように、出エジプトにおける過越し、そして旧約時代の動物犠牲において指し示された贖いの血、これがキリストにおいて成就したこと、このつながりを理解したい。十戒を守るのは、キリストが血を流して私達を贖い取って下さったことに対する感謝の献身である。

〈展開例〉

考えてみよう。

○イスラエルの人達がエジプトから救い出される時、エジプトの（初子）が打たれました。このとき神様はイスラエルの家の柱と鴨居に塗られた小羊の血を見て過越されましたね。イスラエルの人達が救われるために小羊の（血）が流されたのです。

○イスラエルでは、旧約聖書の時代、どんなふうに礼拝が行なわれていたでしょうか。

・礼拝する場所として、（幕屋）が造られました（出エジプト25～40章）。後に神殿が造られました（列王記上6章）。幕屋には聖所が設けられ、祭司を通して、雄山羊と雄牛の（血）が献げられることが求められました。

○どうして動物の血が流されたのでしょうか。

人間の（罪）の（償い）のために、血が流されなければならないから。血は命の源（レビ17章11節）。だから（血）を流すことなしに、（罪の赦し）はないのです（ヘブライ9章22節）。

○これは繰り返し行なわれました。なぜなら、そこでささげられる（動物の血）には、人間の罪の身代わりになって私達に、罪の赦しをもたらす力がないからです。でもそれは、私達の身代わりになって罪の赦しをもたらして下さる方を指し示していたのです（ヘブライ10章1～4節）。

○その方こそ、イエス様です。イエス様は、ただ一度だけ、十字架について流された尊い血によって、罪の赦しを成し遂げられました。（ヘブライ7章26～28節、ヨハネ一2章1～2節）。

○過越、旧約時代の動物犠牲はイエス様が私達の罪のためにご自分をささげて血を流してくださいを教えてください。このようにご自分を犠牲にして下さったイエス様に感謝を表す生活が、これから学ぶ十戒を守って生きることなのです。

〈祈り〉

天の父なる神様、私達の身代わりに御子イエス・キリストが十字架で血を流して下さいました。私達のために血を流して下さいましたイエス様に感謝して、十戒を守って生きることができるよう、支えて下さい。

【目標】

動物犠牲の時代からキリストの十字架への贖いの道の更新を学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→ヘブライ人への手紙9章11～14節を生徒と読む。

【ポイント】

時代は新約にとぶ。過越の小羊の血は、十字架にかけられた主イエスの血の予型であった。そもそも私たちの罪は、何頭動物を代わりに殺したところで赦されるものではない。けれども神様は私たちを生かすために動物犠牲という贖いの道を備えられた。けれどもものちの過越の祭りの際に主イエスの十字架の血が、私たちの贖いのために流された。過去にも未来にも、私たちの罪のためのこれ以上の身代わり、犠牲は他にない。今を生きる私たちもこの主イエスの血によって救われる。

③生徒と一緒に考える

Q. 旧約聖書では、何のために動物が犠牲として祭壇で焼かれていたのでしょうか？

Q. なぜ今は教会で、旧約の時代のように動物を捧げたりしないのでしょうか？

Q. 罪の身代わりのために、主イエスの十字架の血以上の捧げものがあるでしょうか？

Q. 疑問は解決されましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 14節、「主イエスの十字架の血があなたの罪を赦して、あなたを清める。」信じられますか？

→教師自身が聖餐式で受けている十字架の血による赦しの恵みを生徒と分かち合う。

ヨハネの手紙一2章1～2節は私たちへの約束です。

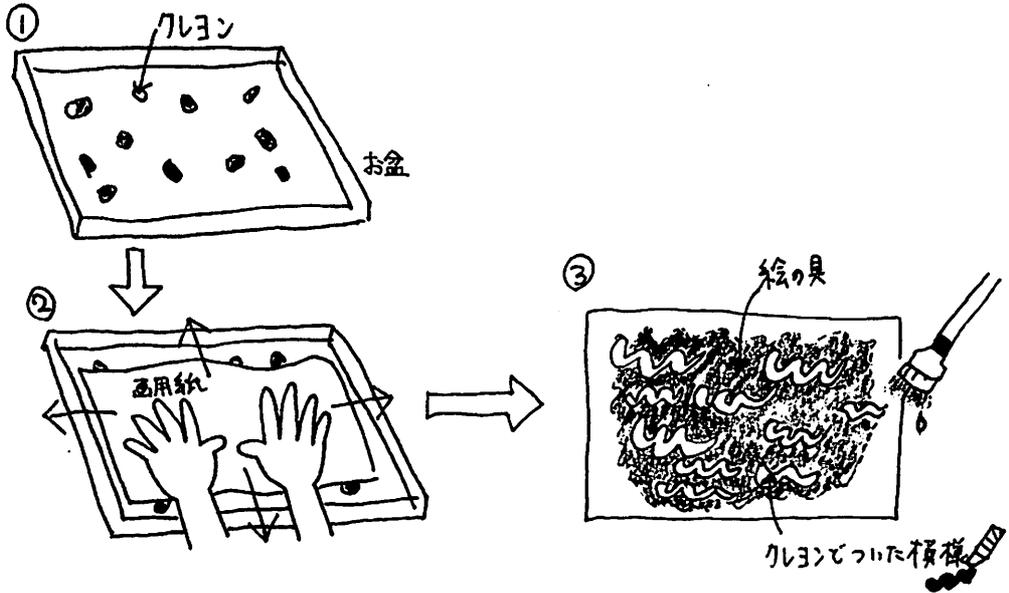
Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

⑤祈り

主イエスキリストの十字架、その赦しが今私たちに与えられていることへの感謝。

《幼稚科工作（予備）》

☆クレヨンコロコロ！素敵な模様カード作り☆



○用意するもの

短くなったクレヨン・クレパス類、お盆のような台になるもの、画用紙、水彩絵の具、筆

○作り方

- ①お盆のような台にクレヨンを適当に入れます。
- ②画用紙を①の上ののせ、両手で自由にその上をゴロゴロと移動させます。
おもしろい模様が画用紙に広がります。
- ③上から水彩絵の具をぬると、クレヨンでできた模様部分だけはじいて、きれいに残ります。
☆できあがったものを、箱や牛乳パックの装飾に使うこともできます。

本号から四回にわたって、日本のプロテスタント教会の歴史について見ていきます。以前に連載された杉山明先生の「教会史」の続編のようなものと理解しています。なるべく平易な解説を心がけたいと思いますが、ごく基本的な、おおまかな事柄にしか触れることができませんので、関連の書物でおぎなっていたいただきたいと思います。

第1課 開国・維新とキリスト教会

日本は古来から、山川草木いずれにも神々が宿るとする多神教（汎神論）的、偶像崇拜的な風土の中でその歴史をおりなしてきました。さらに、キリシタン迫害の歴史をもち、キリスト教邪宗観が根強く根を張る場所でもありました。日本プロテスタント教会の草創期に活躍したブラウンという宣教師も、日本に福音を宣べ伝えることは石地に種をまくようなわざだと語っています。

しかしそのような土地にも、幕末期にさまざまな困難をのりこえて来日した宣教師たちによって、福音の種はまかれました。

プロテスタントの日本宣教のきっかけとなったのは、日本歴史上のおおきな変化です。すなわち、開国と明治維新です。

1800年代にはいると、それまでも植民地の獲得競争を展開していた欧米の強い国々は、東アジアの地域にも植民地をもとめはじめます。ペリーの黒船来航をきっかけとして日本が長い間の鎖国をといたのも、欧米各国のそうした圧力があったためです。開国は決して自発的なものではなかったのです。

ともかく、日本の開国が福音宣教の足がかりと

なったことはたしかです。外国とのあいだに条約が結ばればはじめると、かねてから日本伝道を願っていた欧米の宣教師たちが、続々と来日してきます。

ただ、当時はまだキリスト教禁制の高札がたかだかとかかげられていた時代です。そこで宣教師たちは、はじめはおもてむき学校教育や医療活動等を行いながら、伝道の機をうかがいつつ準備をすすめたのです。

「維新」とはすべてがあらたまり、新しくなることです。そのように、明治維新（1868年）によってそれまでの日本の国のありようは急激に、しかも根本的に変化することになりました。明治維新政府が目指したのは、ひとことで言えば強く、しかも近代的な国家づくりです。一方で欧米の国々に負けないように軍備の増強がはかられ、経済の基盤がかためられ、廃藩置県、学制発布、地租改正、身分制度の廃止といった近代化がすすめられました。他方では欧米の学問や技術、風俗習慣が積極的にとりいれられました。

このように近代化、文明開化の風潮にあっても、明治維新政府はことキリスト教に関しては徳川幕府以来の禁止政策をそのまま受け継ぎ、さらにキリスト教邪宗観がなお根強かったこと、西洋文明を受け入れた識者のなかにもキリスト教反対論が少なくなかったことから、日本のキリスト教会は草創期から逆境のもとに置かれることとなりました。この時代にキリストを信じることは、決死の覚悟をとまなうことであつたでしょう。

（木下裕也）

第2課 草創期の日本人キリスト者たち

1. 草創期の日本人キリスト者たち

日本伝道をころごして来日した欧米宣教師たちの伝道活動がさまざまな困難をともなったように、この時期の日本人がキリスト教に入信することも、なみたいていのことではなかったはずだ。

では、当時においてさまざまな困難や迫害にもかかわらず入信し、教会にくわった人々はどのような人々であったのでしょうか。

よく指摘されるのは、彼らは当時の知識階級であった武士階級の人々、とりわけ開国を幕府の主導で行おうとしていた人々（「佐幕派」と呼ばれます。「佐」はたすけるという意味です）であったということです。

実際には彼らの思いとはことなって、天皇中心の絶対王政のもとでの国づくりをかかげた薩長土肥といった西南雄藩出身の人々によって幕府は倒され、明治維新政府の政権はこれらの人々によって握られることになります。この人々には新しい日本国家のリーダーとしての活躍がすでに約束されていたわけです。

しかし政権奪取のたたかいにやぶれた佐幕派の人々は、幕府の崩壊と家の没落のかなしみを味わわれたのみならず、新しい国家体制のもとでは立身の志や豊かな才能を発揮する場所も与えられていませんでした。

そこで彼らは、西洋の新しい学問や思想、精神文化を積極的に学ぶという方向に活路を見出し、活躍の機をうかがうことになります。

そして西洋の学問を身につけるにはまず英語を学ばなければならないということで、キリスト教禁制下において当初は英語や学問を教える方法をとっていた欧米宣教師たちと出会い、同時にキリスト教とも出会うことになるのです。

2. 西欧文明としてのキリスト教受容

日本にプロテスタントを伝えた宣教師たちは、聖書をまっすぐに信じる素朴な信仰をもち、個人的な回心の経験をおもんじ、伝道熱心であり、厳格で禁欲的な生活を守る人々であったといわれます。彼らに触れるなかで、その信仰と人格の清新な息吹が、多感な日本人青年たちに強いインパクトを与えたにちがいません。

さらに、はじめて出会った聖書の世界は、彼らがそれまでまったく知ることのなかった新しい世界でした。唯一の神を信じる信仰は、それまで八百万（やおよろず）の神々に親しんできた彼らの人生観と世界観を根元からくつがえし、彼らを偶像宗教の迷信からときはなしたことでしょう。

ただ、この頃の人々はやはり国家形成を第一の関心事とし、新しい日本の建設を第一の使命としていました。そこで、キリスト教を西欧文明の土台としてとらえ、これこそが新日本建設の力だと考えて、いわゆる国家経世という目的で入信した人々も少なくはなかったはずだ。彼らが真の福音信仰に目覚めるためには、いわば第二の回心ともいうべき経験が必要だったようです。

（木下裕也）

第3課 明治のキリスト教会（その一）

1. 日本最初のキリスト教会—日本基督公会

明治維新後も、しばらくはキリスト教禁制の高札がかげられたままでした。政府の要人や当時の識者たちのなかにも、キリスト教反対論はなお根強くありました。

しかし、すでにキリスト教解禁への流れはとどめ得ないものとなりつつありました。これから欧米諸国と付き合っていくというのにキリスト教を禁じたままでは、諸外国の印象がよいわけはありません。1873（明治6）年2月に、キリスト教禁制の高札はついに撤去されます。

日本最初のプロテスタント教会の誕生はその前年、1872（明治5）年3月のことです。この教会を日本基督（キリスト）公会（あるいは横浜公会）と呼びます。

日本基督公会誕生のきっかけとなったのは、当時横浜に住んでいた宣教師たちが持っていた祈禱会です。この祈禱会が宣教師バラの英学塾に学んでいた日本人青年たちを刺激し、彼らだけで祈禱会を持つようになったことで教会ができたのです。皆が祈っているところに聖霊がくだりたもうて教会が生まれたというのは、使徒言行録2章にあるペンテコステの出来事をほうふつとさせます。

2. 無教派の路線

日本基督公会の特色は、無教派ということにあります。プロテスタント教会はいくつもの教派に分かれているというところにひとつの特徴があります。日本に最初にプロテスタントのキリスト教を伝えた宣教師たちも、改革派、長老派の人々

でした。

しかし日本基督公会は、はじめから教派の別をたてず、聖書を信じる者をはびひろく迎え入れるという主義に立っていたのです。このような、プロテスタントの歴史においてはきわめてユニークな性格の教会として日本最初の教会が生まれたことは記憶にとどめておいてよいことです。

そこには、宣教師たちと日本人信徒たちとのあいだの思惑が一致したということがあったようです。宣教師たちには、生まれて間もない日本の教会にあまり教派色や重厚な教理、神学を持たせるのは時期尚早で、かえって弊害となるという考えがあったでしょう。

一方日本人信徒たちには独立自主の気概を旺盛に持ち、日本の教会が一日も早く外国宣教師たちにも頼らず、国家にも干渉されない自立した教会になることを何よりも願っていました。そのためには教派のちがいをこえて団結しなければならないと考えたのです。

ただ、その後は無教派というしかたではやはりしっかりした教会をたてあげることはむずかしいと考える宣教師たちもあらわれたこと、さらにキリスト教解禁にともなって聖公会、バプテスト、メソジスト等プロテスタント各派のミッションが続々と来日したことで日本基督公会も数ある教派のひとつようになってしまったこと等があって、無教派路線はかならずしもかんばしい経過をたどったとは言えません。けれども、この無教派の行き方は、日本の教会のひとつの宿願として、後の教会の歴史にもしっかりと根をおろすこととなったのです。 （木下裕也）

2005年7～9月カリキュラム (第18号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
			聖 書 箇 所
単 元 の 目 標			
7月3日	第一戒 神を神とする	問43, 44	ウ小45-48、ハイデ94
		マタイ4: 1-11	出エジプト20: 3
神を神とする戦いに勝利された主イエスを仰ぎ、神の御前に生きる幸いに招く			
10日	第二戒 刻んだ像	問45, 46	ウ小49-52、ハイデ95
		出エジプト32章	出エジプト20: 4a
像を用いることはもちろん内なる偶像礼拝をしりぞける。正しい神礼拝に生きる			
17日	第三戒 神の御名	問47, 48	ウ小53-56、ハイデ99-102
		マタイ7: 21-23	出エジプト20: 7a
神の御名を唱えることで過ちを犯さない。正しく神をたたえ、神に祈ろう			
24日	第四戒 主の日の安息	問49, 50	ウ小57-62、ハイデ103
		ルカ6: 1-11	出エジプト20: 8
主イエス・キリストを礼拝する主の日の喜びとその安息を分かち合おう			
31日	第五戒 父母を敬う	問51, 52	ウ小63-66、ハイデ104
		エフェソ6: 1-3	出エジプト20: 12a
与えられた人間関係を神の恵みとして受け入れる心を養おう			
8月7日	第六戒 殺してはならない	問53, 54	ウ小67-69、ハイデ105-107
		創世期1: 20-31	出エジプト20: 13
いのちの主なる神を示し、殺してはならない理由といのちの尊厳を学ぼう			
14日 (平和)	平和を創り出す	—	—
		イザヤ2: 1-5	イザヤ2: 4
平和主日として礼拝をささげる。平和の幻に生き、平和を創り出す者となる			
21日	第七戒 姦淫してはならない	問55, 56	ウ小70-72、ハイデ108-109
		創世期2: 18-25	出エジプト20: 14
いのちと性のかかわり、性の祝福、結婚の神聖を学ぼう。キリスト教「性教育」			
28日	第八戒 盗んではならない	問57, 58	ウ小73-75、ハイデ110, 111
		エフェソ4: 48-29	出エジプト20: 15
すべては神のものである。盗むのではなく、分かち合い、与えることへ			
9月4日	第九戒 偽証してはならない	問59, 60	ウ小76-78、ハイデ112
		使徒言行録5: 1-11	出エジプト20: 16
神の真実の愛にこたえて、私たちも神と人に真実を尽して歩もう			
11日	第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62	ウ小79-81、ハイデ113
		マタイ18: 21-35	出エジプト20: 17a
恵みをむさぼることは偶像礼拝である。神に感謝して生きよう			
18日 (敬老)	神のおきてを喜ぶ生活	問63	ウ小85-90、ハイデ86-91
		詩編119: 97-104	テトス2: 14
恵みにより、善い行いに熱心な民とされている。神の御心に生きることに励もう			
25日	十戒の完成者キリスト	問64	ウ小82、ハイデ114
		マタイ19: 16-30	ローマ8: 1
神の民をつぐない、いのちを与えてくださる主イエスを信じる幸いに生きる			

2005年度 年間カリキュラム

(2005年4月～2006年3月)

二年サイクル第2年 (子どもカテキズム問34～85)

月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2005年			
4月3日	進級式	神の民の祈りの家	問34
10日		キリストの体なる教会	問34
17日		再臨の約束	問35
24日		再臨に備える	問35
5月1日		死のときの祝福	問36
8日	母の日	復活のときの祝福	問36
15日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	
22日		第三部 生活の道 一、感謝について 感謝……神の求め	問37
29日		感謝としての服従	問38
6月5日		第三部 生活の道 二、感謝に生きる道 十戒……感謝の道標	問39
12日	花の日	十戒の要約……神と人への愛	
19日	父の日	隣いのみわざ……過ぎ越し	問41, 42
26日		過ぎ越しの成就……キリスト	問41, 42
7月3日		第一戒 神を神とする	問43, 44
10日		第二戒 刻んだ像	問45, 46
17日		第三戒 神の御名	問47, 48
24日		第四戒 主の日の安息	問49, 50
31日		第五戒 父母を敬う	問51, 52
8月7日		第六戒 殺人の禁止	問53, 54
14日	(平和)	平和について	
21日		第七戒 姦淫の禁止	問55, 56
28日		第八戒 盗みの禁止	問57, 58
9月4日		第九戒 偽りの禁止	問59, 60
11日		第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62
18日	(敬老の日)	神のおきてを喜ぶ生活	問63
25日		律法に背く人間	問64
10月2日		第三部 生活の道 三、教会に生きる道 教会に生きる (一)	問65
9日		教会に生きる (二)	問66

月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2005年			
10月16日		信仰と悔い改め	問67
23日		恵みの手段	問68
30日	宗教改革記念日	生ける神の御言葉	問69
11月6日		御言葉への聴従	問70
13日		礼典	問71
20日		洗礼	問72, 73
27日	アドベント	聖餐	問74, 75
12月4日	アドベント	待降節	—
11日	アドベント	待降節	—
18日	アドベント	待降節	—
25日	クリスマス	降誕祭	—
2006年			
1月1日	新年	一年の感謝と新たな始まり	
		第三部 生活の道 四、祈りに生きる道	
8日		祈りとは何か（一）	問76
15日		祈りとは何か（二）	問76
22日		祈りのお手本……主の祈り	問77
29日		呼びかけ	問78
2月5日	（信教の自由）	第一の祈願	問79
12日		第二の祈願	問80
19日		第三の祈願	問81
26日		第四の祈願	問82
3月5日	レント	第五の祈願	問83
12日	レント	第六の祈願	問84
19日	レント	頌栄	問85
26日	レント	アーメン	問85

『教会学校教案誌』発行のための
自由献金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに5年目を迎え、第17号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ40教会で採用されています。先の第59回定期大会の教育委員会報告にありますように、大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています（2004年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認。2005年度も提案する予定）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

〈あとがき〉

第17号をお届けいたします。5年目を迎えることが許されました。執筆のご協力に、また採用してくださっている教会からの励ましに、心からの感謝申し上げます。今年度も、「子どもたちに福音を！」と願って、神のみわざに仕えて励んで参ります。よろしく願いいたします。

今号の4月分4回は、聖書研究・カテキズム研究・説教展開例を一人の執筆者が執筆することを試みました。聖書の学び・黙想から始まり、教理的な検討を経て説教作成の段階に至る、その過程を少しでも知っていただければと願うからです。そのような視点でも学んでいただければ感謝です。

また、新しい企画を始めました。一つは「日曜学校教師会のために」の連載です。毎月の教師会で読み合わせていただくことを念頭において、一号につき3回分を掲載し、全体で12回になります。

ぜひ教師と教師会の学びのためにお用いください。もう一つは、成人科の「日本教会史」です。日本のプロテスタント教会の歴史を学びます。中高生の学びに、また壮年会・婦人会・青年会などの学びにもお用いください。こちら月一回・全12課で、一号につき3課分を掲載して参ります。

〈購読のお願い〉

教案誌の購読は、春名義行（津島教会）までお問い合わせください。別冊『子どもカテキズム』（300円）、バックナンバーの在庫もありますので、ぜひご購入ください。

津島教会 気付 春名義行 まで

〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30

Tel/Fax. 0567-26-4221

Soli Deo Gloria!

〈編集後記〉

●楽ではありませんでしたが、楽しく執筆させていただきました。多くの教会学校のために(ちょっと)奉仕できたことは、喜びであり感謝です(横浜教会教会学校教師会)。

●初めての小学科でした。アウトラインだけです。各教会学校で工夫して展開してください(石原知弘)。

●初めての執筆です。子どもたちの理解の助けになればと

願っています(鈴蘭台教会日曜学校教師会)。

●笑顔で賛美する子どもたちにいつも励まされています(吉岡契典)。

●子どもにとっても、大人にとっても、キリストとの出会いにまさる幸いはほかにないことを痛感します(木下裕也)。

●「進級おめでとう」と共に喜びましょう。子どもの成長と共に自分も成長させられることが感謝であり、慰めです(望月信)。

☆ 本文執筆者一覧 ☆

4月礼拝部分

相馬伸郎(名古屋岩の上伝道所宣教教師)

春名義行(津島教会牧師)

5月・6月聖書研究

望月信(高蔵寺教会牧師)

木下裕也(豊明教会牧師)

中根汎信(那加教会牧師)

辻幸宏(大垣伝道所協力牧師)

5月・6月カテキズム研究

吉田隆(仙台教会牧師)

三川栄二(稲毛海岸教会牧師)

5月・6月説教展開例

小野田雄二(上野緑ヶ丘教会牧師)

相馬伸郎(名古屋岩の上伝道所宣教教師)

岩崎謙(神港教会牧師)

木下裕也(豊明教会牧師)

小野静雄(多治見教会牧師)

分級展開例

幼稚科・横浜教会教会学校教師会

小学科下級・石原知弘

(北神戸キリスト伝道所宣教教師)

小学科上級・鈴蘭台教会日曜学校教師会

中学科・吉岡契典(仙台カナン教会牧師)

成人科・木下裕也(豊明教会牧師)

表紙イラスト

坂野知子(松戸小金原教会日曜学校教師)

イラスト・作画協力

平尾信子(高蔵寺教会教会学校教師)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長) 名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也 豊明教会牧師
辻幸宏 大垣伝道所協力牧師
春名義行 津島教会牧師
望月信 高蔵寺教会牧師

定期購読・バックナンバーの申し込み

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橘町2-30 津島教会
Tel/Fax. 0567-26-4221

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2005年4・5・6月号 (季刊)

第17号

2005年2月20日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

編集・印刷 株式会社あるむ

〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F

頒価 900円 (本体価格)
